
学生による地域活性化プログラム

平成22年度 活動報告書



平成 23 年 3 月

 長岡大学

ごあいさつ



学長 原 陽一郎

「学生による地域活性化提案プログラム」は、学生に対して職業人としての基礎的能力を鍛える目的で18年度に一部のゼミで試験的に実施し、19年度から3, 4年次ゼミの6割以上が参加する全学的な取組に発展しました。そして、19年度に文部科学省の「現代的な教育ニーズ取組支援プログラム」の「特に優れた取組（現代GP）」に選定され、特別補助金の交付対象のなると共に大学教育改革合同フォーラムのポスターセッションで発表しました。

本格展開から4年、本プログラムは学生の職業人としての基礎的能力を鍛えるという点では予想以上の効果があることが明らかになってきました。そればかりではなく、学生グループの調査研究の結果や提言に対して長岡の行政や市民活動の関係者から思いもかけぬ高い評価と期待を頂いてきました。

本年度から、名称を「学生による地域活性化プログラム」と変えました。提案に止まらず、自ら実行もするものにしようと考えたからです。

本年度も、プログラム推進委員会、地域連携アドバイザーの皆様方、ならびに、学生の調査にご協力頂いた市民の皆様のお陰で、9ゼミナール12の学生グループが調査研究の結果をまとめました。今年2月に行われた成果発表会にも、市の責任者や市民団体の役員、さらに市議員や教育関係者、学生の家族や一般市民など約120人の方々に聞いて頂きました。

このプログラムは図らずも人材育成と地域貢献を同時に行うという優れたもので、日経新聞社の全国大学地域貢献度ランキングで長岡大学が2年連続してベスト10に入りましたが、マスコミは長岡大学の地域貢献活動の中で、このプログラムにもっとも関心を持ってくれています。地域社会の課題を対象に学生グループが調査研究し提言する取組は他の大学にも少なくないのですが、必須のゼミとして全学的な取り組みで実際にたくさんの学生が参加している例は大変に珍しいようで、多くの大学からも問い合わせを頂きました。

皆さまのおかげで本プログラムは「人づくりと実学実践教育」という長岡大学の教育の特徴を象徴する中核的な取り組みに育ってきました。長岡大学の教育の目玉として、さらにレベルを上げて継続していきます。今後ともご支援、ご協力、よろしくお願いいたします。

平成23年3月

学生による地域活性化プログラム
平成22年度活動報告書

第 I 部

学生による地域活性化プログラム
平成 22 年度 活動報告書 第 I 部

目 次

第 1 章	学生による地域活性化プログラムの概要	I-1
1.1	プログラムの位置づけ	I-1
1.2	プログラムの概要	I-1
第 2 章	平成22年度の経過	I-4
2.1	本年度取組の経過	I-4
2.2	平成22年度の学生による地域活性化取組ゼミ	I-5
2.3	平成22年度の推進体制	I-6
第 3 章	取組の進め方に関する事例集	I-7
3.1	『長岡地域の在宅介護の現状と課題—家族介護者の負担を軽減するために—』 ：菊池いづみゼミのケース	I-7
3.2	『長岡市における特産品の東京市場販売計画』：田邊正ゼミのケース	I-12
3.3	『地域コミュニティ活性化による豊かで安全・安心な暮らしを考える』 ：高橋治道ゼミのケース	I-17
3.4	『グラスルーツグローバリゼーション (草の根・地域からの地球一体化推進)』：広田秀樹ゼミのケース	I-22
3.5	『長岡周辺地域における健康管理と予防医療の現状』 ：山川智子ゼミのケース	I-27
3.6	『環境・リサイクル問題への取り組み』：原田誠司ゼミのケース	I-32
3.7	『楽しもう！越後長岡「まちの駅」』：鯉江康正ゼミのケース	I-34
3.8	『佐潟・福島潟・鳥屋野潟の地域との関わりと湿地の賢明な利用について』 ：吉盛一郎ゼミのケース	I-39
3.9	『「出会いの街・ながおか」大手通活性化プロジェクト』 ：鯉江康正ゼミのケース	I-43
3.10	『企業の情報発信とホームページの役割（コンテンツ診断）』 ：原田誠司ゼミのケース	I-48
3.11	『企業の情報発信とホームページの役割（システム診断）』 ：村山光博ゼミのケース	I-51
3.12	『中山間地における地域活性化の提案と実践』：田邊正ゼミのケース	I-55
第 4 章	本取組における学生教育の評価	I-60
4.1	社会人基礎力の評価	I-60
4.2	ビジネス展開能力の評価	I-70
第 5 章	取組結果のまとめ	I-73
5.1	取組成果と今後の課題	I-73
5.2	取組結果の概要	I-74

巻末参考資料

1	平成22年度学生による地域活性化プログラム中間発表会	I-87
2	学生による地域活性化プログラム平成22年度成果発表会（ポスター）	I-88
8	学生による地域活性化プログラム平成22年度成果発表会（チラシ）	I-89
9	学生による地域活性化プログラム平成22年度成果発表会①	I-90
10	学生による地域活性化プログラム平成22年度成果発表会②	I-91
11	社会人基礎力育成グランプリ2011関東地区予選大会	I-92
12	社会人基礎力診断シート（学生用）	I-93
13	社会人基礎力診断シート（教員用）	I-94
14	平成22年度「地域活性化プログラム成果発表会」意見シート	I-95

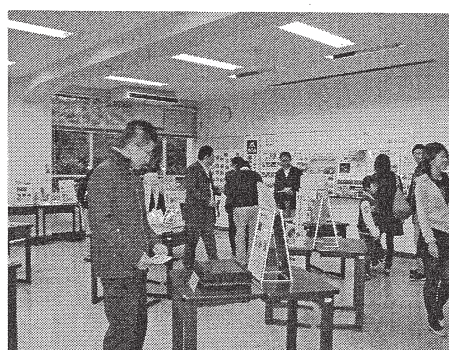
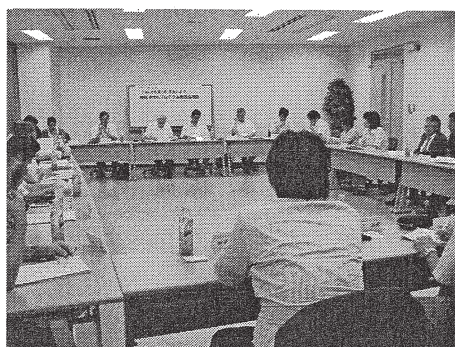
第2章 平成22年度取組の経過

2.1 本年度取組の経過

平成22年度の「学生による地域活性化プログラム」の主な実施経過は、次のとおりである。

<平成22年度取組の経過>

4月7日	平成21年度大学改革推進等補助金実績報告書を提出
5月13日	平成22年度第1回地域活性化プログラム運営委員会開催（以後、毎月1回開催）
6月8日	平成22年度第2回地域活性化プログラム運営委員会開催
7月7日	平成22年度第3回地域活性化プログラム運営委員会開催
7月22日	平成22年度第1回地域活性化プログラム推進協議会開催 於：長岡大学
9月9日	平成22年度第4回地域活性化プログラム運営委員会開催
10月13日	平成22年度第5回地域活性化プログラム運営委員会開催
10月30日 10月31日	悠久祭（大学祭）において、地域活性化プログラムの活動を紹介
11月9日	平成22年度第6回地域活性化プログラム運営委員会開催
11月20日	平成22年度第2回地域活性化プログラム推進協議会開催 中間成果発表会を同時開催 於：長岡大学大教室
11月26日	経済産業省主催「社会人基礎力育成グランプリ予選大会」に地域活性化プログラム鯉江ゼミが出場
12月15日	平成22年度第7回地域活性化プログラム運営委員会開催
1月19日	平成22年度第8回地域活性化プログラム運営委員会開催
2月12日	地域活性化プログラム平成22年度成果発表会開催 於：ホテルニューオータニ長岡 NCホール
3月17日	平成22年度第3回地域活性化プログラム推進協議会開催 於：長岡大学



2.2 平成 22 年度の学生による地域活性化プログラム取組ゼミ

本年度は9ゼミ 12 取組が実施された(一部の取組は他ゼミのメンバーと協働で実施されたものもある)。各取組の活動報告については「第5章 取組結果のまとめ」を、学生が作成した成果報告については「第Ⅱ部 学生による活動報告」を参照されたい。

<取組ゼミとテーマ>

ゼミ名	テ ー マ
菊池いづみ ゼミ	長岡地域の在宅介護の現状と課題 — 家族介護者の負担を軽減するために —
田邊 正 ゼミ	長岡市における特産品の東京市場販売計画
高橋 治道 ゼミ	地域コミュニティ活性化による豊かで安全・安心な暮らしを考える
広田 秀樹 ゼミ	グラスルーツグローバルイゼーション (草の根・地域からの地球一体化推進)
山川 智子 ゼミ	長岡周辺地域における健康管理と予防医療の現状
原田 誠司 ゼミ	環境・リサイクル問題への取り組み
鯉江 康正 ゼミ	楽しもう！越後長岡「まちの駅」
吉盛 一郎 ゼミ	佐潟・福島潟・鳥屋野潟の地域との関わりと湿地の賢明な利用について
鯉江 康正 ゼミ	「出会いの街・ながおか」大手通活性化プロジェクト
原田 誠司 ゼミ	企業の情報発信とホームページの役割 (コンテンツ診断)
村山 光博 ゼミ	企業の情報発信とホームページの役割 (システム診断)
田邊 正 ゼミ	中山間地における地域活性化の提案と実践

(注) ゼミの順序は、成果発表会発表順および「第Ⅱ部 学生による活動報告」の掲載順である。



2.3 平成22年度の推進体制

平成22年度の『学生による地域活性化プログラム』の推進体制は、次のとおりである。

<総合アドバイザー>

所 属	職 名	氏 名
長岡市市長政策室政策企画課	課長	成田 高史
株式会社ホクギン経済研究所	副所長	河田 博

<地域連携アドバイザー>

所 属	職 名	氏 名
福祉保健部介護保険課介護予防推進室	主査	若月 恵子
長岡市地域包括支援センターなかじま	センター長	丸山 千代子
市民協働部市民センター	主任	木村 圭介
まちなかの駅もてなし家	駅長	山田 勝
中越高等学校	教諭	高澤 晃
越時計店	店主	野本 九萬雄
ながおか生活情報交流ねっと	理事長	桑原 眞二
神谷地区	区長	白井 湛
地域振興戦略部	総括主査	川上 英樹
財団法人山の暮らし再生機構	主任支援員	佐々木 康彦
商工部観光課観光戦略室	主査	戸田 幸正
NPO法人長岡産業活性化協会N A Z E	情報化コーディネーター	杉浦 聡
市民協働部国際交流課	主任	大隅 一
NPO法人特定非営利活動法人 地域循環ネットワーク	スタッフ	長谷川 公亮
有限会社ニッコーインターナショナル	代表取締役社長	ドミニク・ネルソン
福祉保健部健康課	係長	茨木 奈美

<学内推進委員>

学 長	原 陽一郎	ゼミ担当教員	広田 秀樹
運営委員長	鯉江 康正 (ゼミ担当)		菊池 いづみ
ゼミ担当教員	原田 誠司		村山 光博
	高橋 治道		田邊 正
	吉盛 一郎		山川 智子

第3章 取組の進め方に関する事例集

3.1 『長岡地域の在宅介護の現状と課題—家族介護者の負担を軽減するために』 (菊池ゼミ) のケース

本取組に参加した学生は4年生7名、3年生9名の16名である。4年生は全員、平成21年度地域活性化G Pプログラムに参加したメンバーである。

3.1.1 ステップ1: ゼミ公募

新3年生のゼミ公募にあたっては、取り組むテーマを社会保障・社会福祉制度のあり方を中心とするゼミ生の関心に基づいた関連領域の課題とした。そのうえで、地域活性化プログラムへの参加を視野に、研究方法は、社会調査の手法(現地で収集したデータをもとにして分析する)によること、また、最終目標として、研究成果を公開の場で発表することを明記した。さらに、平成21年度に取り組んでいるテーマ「ユニバーサル社会をめざして—バリアフリーのまちづくり」(地域活性化G Pプログラム)において得られた成果如何によっては、これを発展させた研究も考えていることを付け加えた。

以上のとおり、新3年生は、社会保障・社会福祉の課題および、社会調査の実施に関心をもって集まったメンバーといってよい。

3.1.2 ステップ2: テーマの設定

第1回(4月13日)ゼミにおいて、授業の目的と方法について、地域活性化プログラムに基づく活動を通じて、デスクワークだけでなくフィールドワークによる社会調査の手法を用いて実証的研究を進めていくこと、これによって、専門知識のみならず社会人基礎力を伸ばすことを示した。

地域活性化プログラムについて理解を深めるために、第2回(4月20日)から第3回(4月27日)ゼミにおいて、昨年度まで実施していた地域活性化G Pプログラムに関する学習と、4年生による昨年度の活動の振り返りの時間を設けた。第3回(4月27日)ゼミでは、今年度のゼミ内の役割を決め、これによって地域活性化プログラム担当に各学年から3名ずつ、計6名(希望による)が決まった。

第4回(5月8日)ゼミで、テーマと調査方法(調査票調査か事例調査か)について、全員で意見を出し合ったところ、テーマは、高齢者介護問題、介護問題以外の高齢者に関する問題、昨年度のテーマに関連した障害者に関する問題に集約できた。社会調査の方法は、ヒアリング調査の希望が多かった。そこで、次回(第5回5月15日)までに、テーマ、目的、方法、対象について各自考えをまとめておき、全員が発表することになった。議論の末、多数決で半数以上の支持を集めた高齢者介護問題に決まり、第6回(5月24日)ゼミにおいて、テーマにどのようにアプローチするかを検討し、在宅介護の問題に絞り込んだ。調査方法は、当初から希望の多かったヒアリングによる事例調査に決まった。

新3年生は、社会保障・社会福祉の課題に関心をもって集まったメンバーであったことから、テーマの集約から決定までは、比較的順調に進んだといえる。

3.1.3 ステップ3：社会調査の実施

(1) 事前学習1

1) 文献研究

調査の企画に先立ち、関連情報を収集し、テーマに対する理解を深めた。たとえば、第7回(6月8日)ゼミでは、国の実施した既存調査をもとに、在宅介護の現状について3グループ(①在宅介護者と介護時間、②在宅介護者の悩みやストレス、③在宅介護とサービス利用)に分かれてディスカッションした。そして、第8回(6月15日)ゼミで、グループごとに知見を発表した。この時の質疑応答は、課題の明確化に有効であった。

また、介護保険制度に関する長岡市からの情報、厚生労働省による情報など、インターネットを有効活用して、最新情報にも積極的にアクセスするよう指導した。

2) ビデオ学習

第9回(6月22日)ゼミでは、介護保険制度に関する理解を深めるために関連するビデオを、また、第10回(6月29日)には、老老介護、息子による介護をテーマとするビデオを視聴した。事前学習として、介護保険制度下での在宅介護の負担という観点から、本取組のテーマについて考えを深めるために、有益であった。

(2) 研究の枠組みの決定

ある程度、テーマに関する理解の進んだところで研究の枠組みを決めることにした。

まず、第11回(7月6日)ゼミで、4年生が研究の全体像を整理した。この作業は、本取組をもとに卒業論文を作成することから、論文の構成の検討としても位置づけられる。

そして、第12回(7月13日)、第13回(7月20日)ゼミにおいて、研究の枠組みならびに事例調査の枠組みを決定した。事例調査は、介護者によるパターン別に4事例(要介護者介護→後に複数介護に変更、別居介護、息子介護、老老介護)を取り上げようということになった。そして、調査対象者は、特に在宅での介護が大変とされる認知症高齢者を介護する家族介護者とした。なお、各事例調査の担当者を1班3人とし、いずれのパターンを担当するかは希望によって決めた。また、事例調査とは別に、社会資源(介護者の負担を軽減するためのサービス等、支援策の提案に関わるもの)を調査する研究班を社会資源調査班として、4年生を中心に編成した。

(3) 事前学習2 - 「認知症サポーター養成講座」の受講

7月22日開催の第1回推進協議会において、本取組のアドバイザーに若月恵子氏(長岡市福祉保健部介護保険課介護予防推進室 主査)ならびに丸山千代子氏(長岡市地域包括支援センターなかじま センター長)が確定した。第14回(7月27日)ゼミでは、アドバイザー両氏を講師として招き、「認知症サポーター養成講座」を受講した。これによって、ゼミ生全員が認知症サポーターとなった。

(4) 事例調査の質問項目の決定と調査準備

事例調査は、4グループ(A班：複数介護、B班：別居介護、C班：息子介護、D班：老老介護)に分かれて実施することから、収集する情報のばらつきを少なくするために、半構造化インタビューの手法によることにした。調査技術の未熟な学生にとっても比較的

実施しやすい方法といえる。そこで、第 15 回（8 月 10 日）ゼミにおいて、質問項目を各自最低 3 項目もちよることにし、K J 法を応用して最終的に 14 項目に絞った。

また、アドバイザーの丸山千代子氏の紹介による事例調査への協力者（認知症高齢者を介護している家族介護者）4 名（パターン別）の情報を、グループリーダーに通知した。以後、個人情報につき厳重に管理することを指導した。この情報をもとに、グループごとに今後の日程（訪問先への事前連絡・挨拶等）を話し合った。調査実施にあたっての留意事項を確認し、翌 8 月 11 日に、教員より、調査協力者に対して挨拶状を送付した。

（5）調査実施

調査は、夏期休暇中を利用して 8 月 23 日から 9 月 25 日の間に実施した。具体的には、本文のとおりである。グループリーダーを中心に、事前に電話連絡し、調査対象者の日程をうかがい、調査日時を決定した。

調査は半構造化インタビューにより、用意した質問項目は 14 項目であるが、はじめに、調査シート（図表 1）を用いて調査対象者の基本属性をたずねた。

なお、インタビュー内容は共同研究による分析のため、録音は必須である。調査倫理上の配慮として、録音にあたっては、必ず次のとおり了解を得ることを徹底した。「調査でうかがった内容は、今後、成果発表会等で公表し、報告書としてもまとめる。ただし、匿名で個人が特定されるような公表の仕方はしない。個人情報として秘密厳守する。せっかくお聞きしたことを無駄にしたいくないので、録音させていただきたい」。そして、調査対象者全員に録音の許可をいただいた。

図表 1 調査シート（調査対象者の基本属性）

調査年月日			
調査者			
	項目	備考	
要介護者	性別		
	年齢		
	要介護度		
	認知症老人の日常生活自立度		ご家族がわからなければケアマネジャーに尋ねる
	認知症の病名		
主介護者	性別		
	年齢		
	続柄		
	就労		
	居住		要介護者と同居か別居か
	健康状態		
	介護期間		
	副介護者		

（6）関連学習－「すこやか・ともしびまつり 2010」ボランティアスタッフ参加

「すこやか・ともしびまつり」とは、長岡市が 1988 年に始めた「ともしび運動」の一環として年に 1 度開催している「健康でふれあいのあるまちづくり」を実現するための祭典である。今年度は 10 月 9 日（土）と 10 日（日）に、ハイブ長岡・千秋が原ふるさとの森において開催された。このイベントにボランティアスタッフとして 3 年生 4 名、4 年生 3 名が参加した。受付、イベントの補助、着ぐるみでの広報、後片づけなどの役割を担った。

（7）事例調査の報告と中間発表会

調査実施後、グループごとにインタビュー逐語録を作成した（その後、4 年生が報告書の作成を担うなかで、3 年生が分担して完成させた）。

後期のはじめのゼミにあたる第16回（10月5日）から第19回（10月26日）まで4回にわたって、各グループによる調査報告を実施した。自分のグループの調査結果をまとめるとともに、ゼミ内での情報共有を目的とした。中間発表会に向けての重要な作業でもあった。中間発表会の準備は、役割を分担して進め、第20回（11月2日）と第21回（11月9日）ゼミで資料を作成し、第22回（11月16日）にリハーサルを実施した。そして、11月20日当日に、アドバイザーからいただいた意見（若者にできる支援策として、「認知症サポーター」について携帯メールなどを活用して広める）は、その後の実践のヒントとなった。第23回（11月30日）ゼミで、これまでの取組を振り返り、今後に向けて話し合った。若者の集まる場所でのリーフレットの配布やパネル展示などの意見がでた。また、若者世代ができる支援策を検討するために、社会資源調査班による報告の機会を設けた。

（8）分析

分析は、インタビュー逐語録をもとに、4年生2名が中心になって進めた。それぞれ、質問項目について介護を引き受けるプロセスに着目した分析と、介護者のパターンに着目した分析を試みることにした。この時点で、実践と提案という課題が残されていることから、全員に質的調査の分析方法を丁寧に指導する時間的余裕はなく、分析結果については個別に添削指導を重ねた。したがって、直接かかわった学生は、質的調査の分析技術を向上させることができたが、その他の学生は分析の手法を学ぶことは難しかったといえる。そうした限界はあったとはいえ、分析結果は、専門的にみても示唆に富む内容であった。このことから、質的調査の分析を通して、考え抜く力を鍛えられると確信した。

3.1.4 ステップ4：実践と提案のとりまとめ

本取組の目的は、家族介護者の負担軽減策を探ることにあり、特に、若者世代ができることは何かという視点で、実践に結びつく提案をすることに意義を見いだしている。また、提案のみならず、地域福祉推進の主体として、実践することも目的としている。そこで、第24回ゼミ以降では、調査結果の分析による支援策の提案と並行して、実践活動を展開した。

まず、第24回（12月7日）ゼミにおいて、今年度中にできる活動を検討した。活動の目的を次のとおり確認した。認知症高齢者の地域での見守りと認知症サポーターの広がりに対する人びとの理解と関心を高め、在宅で介護する家族の支援につなげる。実践において、目的を念頭におくことは不可欠である。そして、第25回（12月14日）ゼミでの最終的な話し合いの結果、媒体としての携帯メールは、迷惑メールとも取られかねず必ずしも有効ではないという理由で、これに代わるものとして、啓発用のリーフレットを人の集まる場所で配布することに決まった。さらに、大学ホームページへの掲載（活動の様子も）、リーフレットの拡大版のパネル展示として展開していくことになった。また、社会資源調査班による研究報告（後半）をもとに、支援策を探った。たとえば、ボランティア活動のリストを参考にして、各自、できそうな活動を考えることで支援策の提案につなげた。

（1）実践

年内最後となる第26回（12月21日）ゼミで、具体的な実践方法（リーフレットの配布

場所、日時等)を決定し、役割分担した。主な役割は、リーフレットの作成(前回に決定)ほか、配布場所の許可申請にかかわる手続きなどがあった。いずれも地域活性化プログラムの担当者が引き受けた。年明けの第27回(1月11日)ゼミにおいて、リーフレット作成担当者2名より、原案「認知症を正しく理解して地域を支えよう!」が示され、修正箇所等を全員で検討した。アドバイザー両氏からもコメントをいただき、これをもとに完成させた。リーフレット配布の実践活動は、第28回(1月18日)ゼミの当日に、同学年のメンバーでペアを組み、ショッピングモールの入り口3か所に分かれて実施した。

この活動について、若月氏の配慮により、平成22年度第10回長岡市地域包括支援センター連絡調整会議(開催日:1月19日(水)、場所:長岡市役所)で報告の機会を得た。地域活性化プログラムに関する教員による簡単な説明の後、4年生の代表2名が認知症サポーターとしての活動を中心に、取組の概要を報告した。同連絡調整会議は、長岡市内に設置されている12の地域包括支援センターの職員が、月に1度、全員集まって開催される会議であり、大学との接点をもったことが何らかのプラスに働くことを期待している。

第29回(1月25日)ゼミで活動の振り返りの時間を設けた。その後、実践活動の展開(大学ホームページへの掲載、パネル展示)は、担当者が役割を遂行した。

(2) 提案

第29回ゼミでは活動を振り返るとともに、最終発表会に向けて提案のとりまとめ作業にはいった。最終ゼミにあたる第30回(2月1日)ゼミまでに、家族介護者の負担を軽減するための支援策ならびに若者世代ができることを各自考えてくることにした。

第30回ゼミで、4年生による分析結果の報告をもとに、研究成果としての支援策を検討した。また、若者世代ができる支援策については、各自が実際にできる活動をあげた。

3.1.5 ステップ5:公表

(1) 成果発表会における口頭発表

発表者はあまり多くない人数がいいという意見が多く、4年生3名を選出することになった。成果発表会では、質疑応答への対応も求められることから、分析作業の中心的役割を担った2名に、残り1名は立候補を募ることにした。

(2) 報告書の作成

報告書は、4年生が執筆した卒業論文をベースに活動スナップなどを掲載して完成させた。論文の構想にはじまって、一連の過程を通じて思考が鍛えられていった。そして、共同制作には欠かせない編集作業は、4年生の代表が率先して取り組んだ。

高齢者介護問題は、国の重要課題であるにもかかわらず、一般に若者世代の関心は低い。そうした介護問題に、学生たちは正面から取り組んだ。家族介護者を訪問して実施したインタビュー調査を通して在宅介護の現実に触れ、自分たちのできることは何かを探ろうと真剣に取り組んだ。アドバイザー両氏には、本取組に対して格別のご支援をいただき、深く感謝している。そして、最後になったが、インタビューにご協力いただいた家族介護者の皆様にこの場を借りてお礼を申し上げたい。

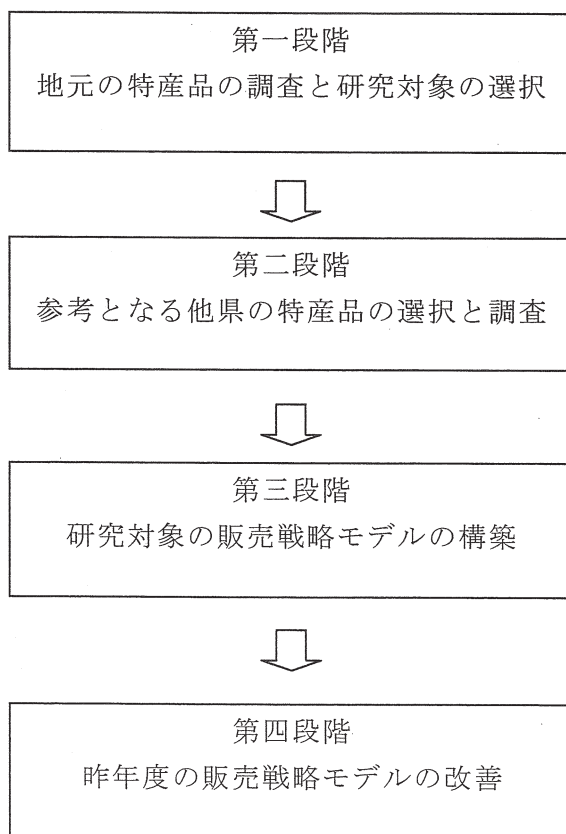
3.2 「長岡市における特産品の東京市場販売計画

－長岡を売り込み首都圏と繋ぐ－の研究手順とその経過

田 邊 正

一昨年から当ゼミナールでは、「長岡市における特産品の東京市場販売計画－長岡を売り込み首都圏と繋ぐ－」というテーマで取り組んでいる。長岡市には、様々な特産品が存在する。しかし、これらの特産品のうち日本酒等の一部のものが全国又は関東に認知されているだけで、大多数のものは認知されていない。一方、何かのきっかけによって、マスメディアに採りあげられ、一気に全国及び東京市場で着目される地方の特産品も存在するのは確かである。例えば、「博多の明太子」、「スープカレー」、「横須賀カレー」、「宇都宮の餃子」、「博多ラーメン」、「九州の焼酎」、「富士宮焼そば」等と例をあげればきりが無い。このように、特産品が東京市場で着目されることで、一気に地域名が知れわたり、マスメディア、雑誌等に採りあげられることによって地域活性に繋がるといえることがある。したがって、長岡市の特産品をいかにして東京市場に売り込んでいくかという販売戦略モデルを構築することが当ゼミナールの課題となる。以前に、栃尾の油揚げ、イタリアン、岩の原ワインの販売戦略について研究している。

そこで、課題を設定した後、販売戦略モデルを構築する際、下記の研究手順によって進めていった。



3.2.1 第一段階(地元の特産品の調査と研究対象の選択)

(1) 課題の設定

当ゼミナールでは、全員が地域活性化プログラムに参加している。ただし、「長岡市における特産品の東京市場販売計画ー長岡を売り込み首都圏と繋ぐー」というテーマで取組んでいるゼミ生は、4年生のメンバーが2名、3年生のメンバーが2名であり、残りのゼミ生は、「中山間地における地域活性化の提案と実践」というテーマで取組んでいる。4年生は昨年度の課題である小国和紙の販売戦略を引続き研究するが、3年生は、斉藤俊輔が当ゼミナール希望の段階で新潟ラーメンについて研究したいということだったので、新潟ラーメンの販売戦略を研究に加えることにした。

(2) グループわけについて

4年生は、日本人の笠原浩と留学生の彭佛兵である。昨年度、二人で小国和紙の販売戦略モデルを構築したが、内容的には今一つであった。これは笠原浩がリーダーシップを取れなかったことと課題を期日までにやってこなかったことの遅れによる結果であった。

前述したように、3年生は、斉藤俊輔が新潟ラーメンの販売戦略について研究したいということで、彼をリーダーにして、3年生のゼミ生のなかから新潟ラーメンについて研究したいゼミ生を募ったところ坂井成良と稲井正人が手を挙げた。そして、斉藤俊輔が坂井成良をメンバーとして選ぶこととなった。ちなみに、この研究は二年間を予定しており、4年時に仕上げた報告書が卒業論文となる。

(3) 地元特産品の調査研究

従来、長岡市にどのような特産品があるのか調査研究をさせ、そのなかから研究の対象となる特産品を選択させていたが、3年生は斉藤俊輔の希望によって、研究対象は新潟ラーメンの販売戦略と事前から決定していた。したがって、今回は地元特産品の調査研究はさせていない。

(4) 研究対象の選択と調査研究

従来、地元特産品の調査研究のなかから一品目を選択して研究対象とするように指導するが、今回は事前に決定していたので研究対象を選択するということはなかった。

昨年度、4年生の小国和紙については小国和紙の概要及び(有)小国和紙生産組合ヒアリング等の調査研究は既に終わっており、研究対象の調査研究は昨年度の報告書にまとめてある。

一方、3年生の新潟ラーメンについては、まず、ラーメン全般について調査研究させた。具体的に、ラーメンの起源、ラーメンの種類、ラーメンの作り方、新潟ラーメン三大ラーメンについて調査研究させることによって、ラーメンについてある程度の知識を身につけさせることができたと思われる。しかし、文献による調査研究を希望していたが、なかなか文献を収集することができず、ほとんどがウェブによるものであった。したがって、ウェブによる資料を中心に二人でA4にまとめあげるように指示した。しかし、指示したようには、まとめがなかなか進まず、結局厳しく指導する破目になった。

3.2.2 第二段階(参考となる他県の選択と調査)

(1) 参考となる他県の特産品の選択

従来、研究対象となる特産品を調査研究したうえで、さらに参考となる他県の特産品を

調査研究させることにしていた。一昨年は、栃尾の油揚げは讃岐うどん、イタリアンはお好み焼き、岩の原ワインは甲州ワインというように、研究対象となる特産品と関連性のある他県の特産品について調査研究させた。

4年生は薩摩切子を選択しており、昨年度に本来ならば調査研究しなければならないのだが、まとめ上げることができず、次の段階に進むことができなかつたため、結局、薩摩切子についての調査研究は削ることになった。

一方、3年生は、新潟ラーメンということなので、パスタ、そば、うどん、焼きそば等が他県の特産品として考えられるが、あえて他県の特産品の調査研究は実施しないことにした。後述するが、新潟ラーメンについて、県民がどのように認識しているかということをも調査しなければならぬと考えたからである。

(2) ヒアリング調査とアンケート調査の実施

従来、研究対象となる特産品を調査研究するうえで、比較対象となる他県の特産品を選択についてA4で5枚くらいのレポートにまとめさせ、参考となる他県の特産品からヒアリングの対象となる会社等を決め、ヒアリング調査を実施していた。

しかし、4年生は他県の特産品を選択していない。ただ、昨年度、実際に小国和紙を製造している工房である(有)小国和紙生産組合(今井宏明氏対応)にヒアリング調査に伺っている。このヒアリング調査のまとめについては昨年度の報告書に掲載済である。

一方、3年生はあえて他県の特産品の調査研究をしないということにした。理由はアンケート調査を実施して新潟ラーメンについての認識をもっと深く知ることが必要であると考えたからである。そこで、ラーメン店の店主に対してのアンケート調査を実施した。調査方法は店主への配布回収方式である。内容は、①創業年数、②従業員数(アルバイトを含む)、③新潟ラーメンのレベル、④新潟四大ラーメン、⑤関東進出、⑥他店のラーメン等についてであった。店主がどのように考えているかということとサンプルを100以上は回収したいということから、直接、ラーメン店の店主を伺う配布回収法にした。まず、長岡駅周辺のラーメン店を伺ったのだが、約30店伺ってアンケート調査に応じてくれたラーメン店は1店のみであった。木曜日の午後四時以前に伺ったため、日時的が原因ではないと思われる。また、アンケート調査実施の目的を記載した用紙も準備し、二人ともスーツで伺ったので対応もしっかりしていたと思われる。斉藤俊輔と坂井良成は、ラーメン店の店主の気質的なものが原因ではないかと述べていた。

このように、店主からのアンケート調査が上手くいかなかったことから、新潟県民が新潟ラーメンについてどのように考えているかというアンケート調査に切替えた。長岡駅、新潟駅、悠久祭で面接アンケートを実施した。内容は、①ラーメンの嗜好、②ラーメンを食する頻度、③新潟ラーメンの認識、④関東で通用するか否か、⑤好きなラーメン店等についてであった。約160のサンプルが回収できた。

このアンケート調査の反省点は、私の目から見て若干正確性に欠けるということであった。回収したアンケート用紙の字のくせから同一人物ではと疑われるサンプルが結構あったのである。また、下越、中越、上越でラーメンの好みも変わってくるため、この三か所でアンケート調査を実施するべきである。したがって、もう少し私がアンケート調査に手を貸してもよかったと反省しており、本人たちも正確なデータを知りたいということから、再度、アンケート調査を実施する予定である。

3.2.3 第三段階(研究対象の販売戦略モデルの構築)

(1) 販売戦略モデルの提案

4年生は昨年度の販売戦略モデルの提案をしなければならなかった。しかし、具体的な販売戦略モデルの提案には至らなかった。このようになった理由として、まず、笠原浩と彭佛兵の意見が噛み合わなかったことがあげられる。彭佛兵は学術的に販売戦略モデルを提案しようとするのだが具体性に欠けるのである。それに対して、笠原浩が代替案を提案すればよいのだが、その案がないのか遠慮しているのかで販売戦略モデルが構築されないのである。次に、文章としてまとめ上げなければならないのであるが、笠原浩がリーダーシップをとってやらないので、なかなか先へ進まないのである。昨年度の成果報告書作成において、一応候補として、いくつかの販売戦略モデルはあげている。

一方、3年生はアンケート調査を実施して、それをデータとして集計するという作業があった。この作業で今年度は終了になるかと思っていたが、せっかくならば来年度につながるために、販売戦略モデルも構築してみようということになり、販売戦略モデルと一緒に検討してみた。本来、ゼミナールの時間に実施するべきであったが、「中山間地における地域活性化の提案と実践」のグループの議論が思ったよりも時間が掛ってしまったため、私を含め三人での検討となった。そこで、提案されたのが、数店のラーメン店が組合を組織化して、東京の雑居ビルで二週間ごとに順番で開店するというものであった。この戦略によって新潟ラーメンを関東の人々に認識してもらえるし、関東進出の足がけとなるはずである。

なかなか販売戦略モデルを提案できないので、ヒントを与えながら検討していったつもりであった。販売戦略モデルの構築は学生のオリジナルのものであるようにしたいと思っていたからである。しかし、後述するが、報告書作成の段階で、斉藤俊輔が自分なりに販売戦略モデルを提案していたのである。

(2) 販売戦略モデルの構築と改善

前述したように、4年生は本来構築すべき販売戦略モデルをまともに提案していない。しかし、販売戦略モデルの候補として、いくつかの販売戦略モデルをあげていた。したがって、そのなかのものを具体化することで販売戦略モデルを構築することにした。すなわち、改善ではなく提案というべきである。昨年度から学生へのデザインを発注するということを提案していたのだが、自分の意見をまとめあげてくるようにと指示しても、期日を守らないだけではなく、ずっとやってこないのである。ゼミには出席するのだが、「やってきていません」と謝るばかりである。二人で販売戦略モデルを検討して構築しても文章としてまとめないので全く前に進まない状態であった。個展を開催するという具体的な販売戦略モデルは成果発表会の寸前に構築したものである。

(3) 報告書の作成

4年生は卒業論文となるため、ある程度しっかりしたものを作成するべきである。彭佛兵は課題を与えれば期日までにしっかりとやってきた。しかし、笠原浩がやらないのである。したがって、彭佛兵はプロジェクトから切離して「人的資源管理」についての卒業論文を作成するように別個に指導することにした。したがって、笠原浩が一人で小国和紙についての報告書を作成することになるのだが、十四回目のゼミでも殆どやっていない状況であったので、3年生に手伝ってもらうことを彼に促した。これによって、3年生にお願い

いして手伝ってもらい私の研究室で作成することとなった。

一方、3年生は、骨子に近いものを作成させ、これを斉藤俊輔と坂井良成に分担させて報告書を作成させた。2～3週間ごとに報告書作成の進捗度を知るために、まとめたものを見させてもらっていた。これによって、順調に進んでいると把握していた。しかし、編集するにあたって、二人がまとめ上げた原稿を受取った時点で、ほとんど九割以上を斉藤俊輔一人でやっていたことに気付いた。彼が中心でやっていたことは知っていたのだが、何も言わなかったのも、ここまで負担が彼にかかっているとは知らなかった。また、新潟ラーメンのカップラーメンを作ることによって新潟ラーメンを認知してもらい販売戦略モデルも提案していた。

まとめ

本来、4年生については大きく成長しなければならないはずである。しかし、成長したとは言いがたい。これは私の指導不足でもあり個人の課題でもある。4年生がテーマに真摯に取り組む姿を見て3年生も真面目に取り組む姿勢ができるのだが、今回は上手くいかなかったため残念である。この影響は、「長岡市における特産品の東京市場販売計画ー長岡を売り込み首都圏と繋ぐー」のグループにも影響があったようである。

ただ、積極的に取り組む学生もなかにはいることは確かである。ゼミナール全体で取組めば、必ず学生の間で温度差が生じてくることは当然のことだが、この温度差を縮めようとする努力が必要だし、縮めることによってゼミナールのチームワークもまとまってくる。

3年生は二人に大きな温度差があるようで、二人のチームワークがまとまれば、よりよい提案ができそうである。来年度はラーメン店の店主を集めて報告会をし、販売戦略モデルの実現可能性を問う試みも予定している。そのためには、もっと緻密に戦略を練らなければならない。したがって、斉藤俊輔と坂井良成が二人でしっかりとまとまる必要がある。来年度、3年生には大きく成長することを期待している。

3.3 『地域コミュニティ活性化による豊かで安全・安心な暮らしを考える』 (高橋ゼミ) のケース

3.3.1 ステップ1：ゼミ公募・実課題設定・企画書作成

(1) ゼミ公募

昨年度から本取り組みに参加している4年生2名とゼミ公募で新たに入ってきた3年生5名の計7名で本取り組みを行った。3年生は、ゼミ公募の時に本取り組みを行うことを明示し、それを理解したうえでゼミに参加してきたにもかかわらず、自ら進んで積極的に活動に参加する姿勢は最後まで見られなかった。

(2) 実課題の設定

4年生は、昨年度に引き続き、地域コミュニティを中心とした安全・安心のテーマに取り組んだ。昨年度は、神谷地域のコミュニティ活動を支えている諸団体へのヒアリングと地区行事への参加を通して、地域コミュニティを中心とした安全・安心の要となる地域コミュニティの活性化要因を明らかにした。

今年度は、昨年度の取り組みを継続し、地域コミュニティが中心となった「地域の安全・安心」の在り方を明らかにするために、神谷地区の住民が地域に対してどのような意識を持っているか、コミュニティ内の安全・安心をどのように認識しているかを内容とした「地域コミュニティに対する意識調査」を神谷地区の住民を対象として行うこととした。

3年生は、神谷地区からの要望もあり、神谷地区が平成21年に購入した「旧神谷信用組合の歴史的建造物」を活用した地域活性化策に取り組むこととした。4年生によるこれまでの取り組みの報告、神谷地域の歴史と特徴、神谷信用組合の歴史などを予備知識として学んだうえで、「旧神谷信用組合の建物」の現地調査を7月20日と12月14日に行った。この現地調査とそれまでに行った予備学習から、「旧神谷信用組合の建物」のすぐ近くには耕作者の高齢化などにより耕作されないままの畑が数多くあることが分かった。そこで、「歴史と交流による活性化」というコンセプトでこの「旧神谷信用組合の建物」と耕作困難畑を連動させた地域活性化策を考えることとした。

(3) 調査研究計画書の作成

4年生は、昨年度からの取り組みを引き続き行い、コミュニティに対する住民の意識を明らかにするためのアンケート調査を、7月：調査準備、8月：調査実施、9月、10月：調査のまとめ、というスケジュールで行うこととした。

3年生は、4月：これまでの取り組みの成果の確認と神谷に対する事前学習、5月：コミュニティ活性化の取り組みの事例調査、6月：人にわかりやすく伝える技術についての学習、7月：旧神谷信用組合の現地調査、9・10月：旧神谷信用組合の建物利用法の検討、11月：中間発表会の準備、12月：旧神谷信用組合の建物利用法の検討、1月：成果発表会の準備、というスケジュールで今年度の取り組みを行うこととした。

6月に「人にわかりやすく伝える技術」についての学習を行うのは、前年度の現地調査やヒアリング調査、ゼミでの意見発表の際に、自分の考えや意見などを相手に分かりやすく伝える能力が不足していることが明らかになったためである。

3.3.2 ステップ2：調査対象地域の選定・基礎学習

(1) 調査対象地域の選定

これまでの活動の継続性と神谷地区から要望を寄せられていることから、調査対象としては、長岡市神谷地区を選んだ。

(2) 基礎学習

これまでの研究成果をレビューするとともに、取り組みに対する知識を共有化するために、基礎学習として以下のことを行った。

- 平成21年度の報告書を基にして、これまでの研究内容と成果の確認。
- 歴史的建造物を核とした地域活性化策を考えるとということから、各地における地域活性化の取り組みを調査し、その特徴や手法の学習。
- 活性化策の中心となる「神谷信用組合」をめぐる歴史の学習。
- 「神谷信用組合」の創設や神谷の地域振興で中心的な役割を果たした高橋九郎の人となりについて、長岡市が発行した「郷土長岡を創った人々」中の「高橋九郎（担当：内藤孝）」を使った学習。
- 神谷地区の概要の学習。

また、自分の考えや意見などを相手に分かりやすく伝える能力が不足していることが明らかになったことから、池上彰著「人に分かりやすく伝える技術」（講談社）を使って、人に分かりやすく伝えるにはどのようにしたらよいかについて学習した。

3.3.3 ステップ3：活動報告

3.3.3.1 アンケート調査

神谷地区の人たちが、地域の防犯や安全、および住民同士のつながりについてどのように考えているかを明らかにするために、

- ①神谷地区の防犯について
- ②住民同士のつながりと交流について
- ③神谷地区の防災について

に関するアンケート調査を神谷の全戸（163戸）を対象として12月下旬に行った。具体的な設問は、以下に示す24項目とした。

- 設問1. 防犯対策として隣近所との交流、つながりは重要だと思いますか。
- 設問2. 神谷地区で行われている各種の行事は、住民同士のつながり強化に役立っていると思いますか？
- 設問3. 隣近所や親しい人の間で、不審者、空き巣、訪問販売などの情報を知らせあったりしたことがありますか？
- 設問4. 犯罪を未然に防ぐために、地域住民によるパトロール活動は有効だと思いますか？
- 設問5. 有志を募ってパトロール活動を行うとしたら参加してもよいと思いますか？
- 設問6. あなたがぜひパトロールしてほしいという場所があれば御記入下さい。
- 設問7. あなたが防犯に関して、神谷に何か希望することがあれば御記入下さい。
- 設問8. 長岡市のホームページにある犯罪情報などを参照したことはありますか？

- 設問 9. 防犯に関して長岡市にしてほしいことはありますか？あれば御記入下さい。
- 設問 10. 地域の中でどこに誰が住んでいるかわかりますか？
- 設問 11. 老人が一人暮らししている家の場所を把握していますか？
- 設問 12. 隣近所に何か異変があった場合、すぐに気づくことが出来る交流はありますか？
- 設問 13. 隣近所の人困っていたら出来る範囲で協力しようと思いますか？
- 設問 14. 防災対策として隣近所との交流、つながりは重要だと思いますか？
- 設問 15. 中越地震の際、神谷地区としての支援は十分でしたか？
- 設問 16. 中越地震の際、近所同士の助け合いはありましたか。
- 設問 17. 中越地震の際、普段は交流のない人とも助け合いましたか？
- 設問 18. 中越地震の際、知りたいと思った情報は上手く伝わってきましたか？
- 設問 19. 中越地震の際、神谷が行った活動には、どのようなものがあったか知っていますか？
- 設問 20. 中越地震の際、以前から住んでいた住民と新しく越してきた住民との協力は上手く行われたと感じますか？
- 設問 21. 中越地震の際、行政からどのような援助があったか知っていますか？
- 設問 22. 災害の際の避難場所がどこか知っていますか？
- 設問 23. 災害の際、神谷にして欲しい活動を御記入下さい。
- 設問 24. 長岡市の防災マップの存在を知っていますか？

3.3.3.2 旧神谷信用組合と耕作困難畑の現地調査

旧神谷信用組合の建物と耕作が困難な畑の現状、および神谷地区における活性化の取り組みに関する現地調査を7月20日と12月14日の2回行った。

調査では、神谷区長の白井湛氏から「旧神谷信用組合の建物」購入の経緯と耕作困難な畑の現状の説明を受けた。また、歴史・文化の会（神谷を知ってる会）事務局長の丸山信明氏からは、歴史・文化の会が現在取り組んでいる「神谷の暮らしを伝える写真と歴史的資料の収集・保存」をめぐる活動についての説明を受けた。



旧神谷信用組合の建物



区長さんから畑の説明を受ける



耕作が困難な畑の現状

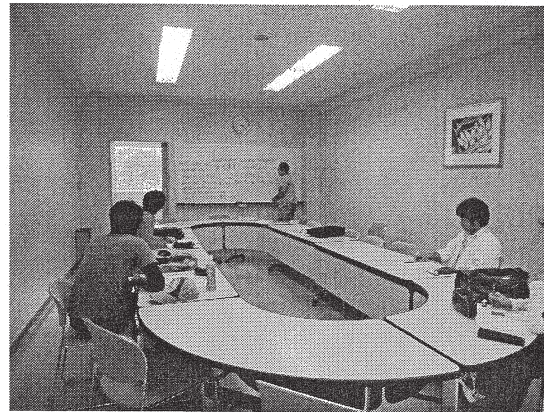


歴史・文化の会による写真展示会

3.3.3.3 活性化策の検討

旧神谷信用組合の建物と畑の現地調査、および区長さんと歴史・文化の会事務局長との懇談を通して得た知識を基にして、旧神谷信用組合の建物と耕作困難な畑の貸し出しを連動させた「にここ交流直売センター」プランを検討した。

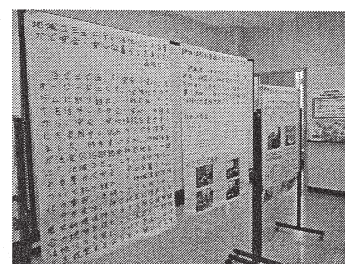
検討した項目は、建物に持たせる機能（休憩所機能、直売所機能）、畑貸し出しに関する各種項目（貸し出しシステム、貸し出し区画の面積、貸し出し料金、貸し出しに際して必要な設備、支援の仕組み）等、多岐に渡った。



活性化案の検討風景

3.3.3.4 学園祭でのポスター展示

平成21年10月30日、31日に開催された悠久祭において、これまでの取り組みを紹介するポスター展示を行った。



悠久祭でのポスター展示

3.3.3.5 現地調査と活性化プラン策定のまとめ

2回の現地調査と事前学習を通して、大枠ではあるが活性化プランをまとめた点は大きな成果である。

しかし、活動に積極的に関わり、自ら計画を立てて活動をまとめ上げてゆく姿勢が最後まで見られず、活動全体を通して常に指示待ちの状態であった。また、現地調査の時に質問をせず、調査からより多くのことを学ぼうという姿勢があまり感じられなかった。さらに、一部の学生は、何の連絡もなしに活動を欠席するなど、チームで働く意識の弱い学生がいたことは、今後の課題として残った。

3.3.4 ステップ4：調査研究報告書の作成と成果発表

(1) 調査報告書の作成

事前学習と2回の現地調査、およびその後の討議を通して、歴史的建造物と耕作困難な畑を連動させた地域活性化プランを報告書にまとめることができた点は評価できる。

しかし、報告書の作成を自分たちで計画を立てて取り組むことはせず、提出期限間際になって指導を受けて初めて取り組むなど、社会人基礎力の「シンキング力」、「アクション力」が十分に育たなかった点は反省しなければならない。また、7人のメンバーのうちの3人は、報告書作成に積極的に関わろうとはせず、チームで働く力がほとんど育たなかったことは残念である。さらに、報告書を書くにあたり、先輩が書いた報告書を参考にして、報告書のスタイルや構成を考えるなどの工夫が全くみられなかった点については、今後の指導のなかで解決してゆかなければならない。

(2) プレゼンテーション資料の作成

「PowerPoint」を使ってプレゼンテーション資料を作成した点は評価できる。

しかし、「人にわかりやすく伝える技術」を学んだにもかかわらず、資料の構成、各スライドでの情報の提示の仕方とデザインなど、情報の見せ方の点で工夫が見られなかったことは、今後の課題として残った。

(3) 成果発表

11月20日の中間発表会、2月12日の成果発表会で成果を発表し、参加者から興味、関心を持って聞いてもらうことができた。アドバイザーからは、歴史的建造物の保存と耕作困難な畑の問題の解決はそれぞれが大きな課題であり、テーマを分けて検討を進めたほうが良いのではないかというアドバイスをいただいた。

発表の際は、自分の言葉でしゃべることを事前に指導したにもかかわらず、原稿をそのまま棒読みしてしまい、若者らしくはきはきと自信を持って自分たちの成果を発表することができず、課題が残った。また、アドバイザーからの質問やコメントをメモすることをせず、ただ漫然と聞いてしまっていた。今後、いままで以上に時間をかけ、プレゼンテーション力の指導を強化する必要がある。

3.4 『グラスルーツグローバルイゼーション

—草の根・地域からの地球一体化推進—』

(広田ゼミ) のケース

3.4.1 ステップ1：ゼミ公募とゼミ生の個性

今年度のゼミ生の募集に際しては、「グローバルイゼーションと地域との関係に視点をおいた地域活性化プログラム」を行うこと表明したため、それを理解した学生4人が入ってくれた。ゼミの陣容は、昨年度の地域活性化プログラムの活動を経験した4年生1人と、新しくゼミに入った4人の3年生で編成されることになった。人数は少なかったが、皆、個性的なまじめな学生だった。

4年生のラブダンスレン＝エルデネバト君は、モンゴルからの留学生で、昨年度の「長岡市における多文化共生社会の実現に向けて」という地域活性化プログラムの活動を経験していた。3年生の王慧さんは、中国からの留学生で、抜群の英語力があつた。松永貴幸君は、高校時代アメリカ領グアムへの渡航経験がある国際派で、本間圭君はデジタル機器に詳しかった。高橋健幸君はいつも笑顔を絶やさず場の雰囲気をも明るくしてくれるムードメーカーだった。

3.4.2 ステップ2：学生による実課題の設定

22

5人のゼミ生達は、地域活性化プログラムの活動をどのように進めていくべきかについて、4月に議論を開始した。最初、4年生のエルデネバト君が、昨年度の「長岡市における多文化共生社会の実現に向けて」というグローバルイゼーションの潮流の中で長岡市に縁あって来られた外国籍市民の方についての実態調査を中心とした地域活性化プログラムのゼミ活動について説明してくれた。

ゼミ生は、今年度の活動方針を話し合う中で、昨年度同様にグローバルイゼーションという歴史的潮流に関連したテーマを設定して、グループワークを行っていこうという方向性を明確にしていったようだ。ただし、昨年度は「調査」にウエイトをおいた活動であったのに対して今年度は、「アクション」にウエイトをおいた活動をしていきたいという意見が強くなっていった。

議論が進む中で、ゼミ生の問題意識は、「急速に進むグローバルイゼーションと、地域で生活する私達の関係をどう考えるべきか。草の根・地域から、グローバルイゼーションを平和的に進め、その過程を地域活性化に役立てることができるとすれば、どんな方法が考えられるか」という点に絞られていった。

そして、「グラスルーツグローバルイゼーション」(草の根・地域からの地球一体化推進)というキーコンセプトが生まれた。グラスルーツグローバルイゼーションというコンセプトを軸に、グローバルイゼーションを草の根・地域から平和的に推進していこうということになった。

3.4.3 ステップ3：具体的活動方法の明確化

グラスルーツグローバリゼーションというテーマを決めたのは良いが、テーマがゼミ生にとっては当初大きすぎるように感じ、具体的なゼミ活動をどう進めていくかに関しては、かなり困惑していたようだ。

ゼミ生は具体的なゼミ活動についてディスカッションを重ねた。その結果、「とにかくできることからやってみよう」ということになった。そして以下の4つのことを試みることにした。

即ち、第1に、グローバル化に関する学習 (Study)、第2に、ゼミに外国の方を招待しての交流 (Invite)、第3に、外国人の方が集まる場所等への訪問 (Visit)、第4に、学園祭に出店しその利益を少しでも世界に寄付し支援する (Donate) である。5月から、グラスルーツグローバリゼーションの具体的活動として、Study・Invite・Visit・Donateを、進めていくことになった。

— ゼミ生が考えた「グラスルーツグローバリゼーション」の具体的活動ないし方法 —

Study	グローバル化に関する学習
Invite	ゼミに外国の方を招待しての交流
Visit	外国人の方が集まる場所等への訪問
Donate	学園祭に出店しその利益を少しでも世界に寄付し支援する

93

3.4.4 ステップ4：活動の展開

(1) Study

5月からゼミ生はグローバル化に関する学習を開始した。皆でグローバリゼーションについての様々な資料を持ち寄り、ディスカッション形式で学習していった。グローバリゼーションはビックピクチャーな分野でどのような視点から学習していくべきか分からないことが多々あったようだが、頻繁にゼミ担当教員に質問し、自分達なりによく理解していったと思う。

ゼミ生は、グローバリゼーションについて、その定義、1800年代以降の国家 (nation-state) の急速な形成、第1次世界大戦、第2次世界大戦という国家主義の極点、1945年以降の国際協調主義の発展、1980年代・1990年代と本格化するグローバリゼーション等、グローバル化の長期発展過程の詳細を理解していった。さらに、エコノミックグローバリゼーション、ポリティカルグローバリゼーション、カルチャラルグローバリゼーション、インフォメーションリレーティドグローバリゼーション等、グローバリゼーションの複数の次元を整理した。グローバリゼーションは世界経済全体の拡大など多大な恩恵をもたらす一方で、経済格差、経済摩擦や、また文明間、各国間、各民族間等での相互理解の欠如からの摩擦、紛争、動乱、戦争など、深刻な問題も惹起させることを知っていった。今後ますます高度化するグローバリゼーションを、平和的にランデ

イングさせるには、世界の各地で皆が出会い、語り合い、友情を築いていくことが大切であり、世界の各地の草の根・地域で、世界の人々が出会い、語り合い、友情を築いていくことの重要性、グラスルーツグローバリゼーションの意義の深さを認識していった。

(2) Invite

ゼミ生は Invite の活動として、以下のように外国の方を招待して活発に交流し学んでいった。

①中国人料理家ショウコウレイ氏を招待

6月にゼミ生は中国人料理家ショウコウレイ氏をゼミに招待し交流した。ショウコウレイ氏からは、中国での生活の様子、中国の若者に対する教育、日本で料理の仕事をするようになったきっかけ、料理における中国と日本の違いなどについて、話を伺った。

ゼミ生達が最も驚いたことは、中国の若者の多くは中学を卒業すると、寮生活を始める人が多いということだった。寮は、10人部屋、20人部屋は当たり前で、多くの人と若い時から集団生活をする中で、自然にコミュニケーション能力やチームワークなどを身につけるということに、中国の若者の強さを知ったようだった。

②フィリピン人エンターティナー、ポール＝イルデファンソ氏を招待

同じ6月にゼミ生は、フィリピン人エンターティナーのポール＝イルデファンソ氏を招待し、フィリピンの歴史、文化、社会、伝統的な家族のあり方などについて教わった。

ゼミ生が最も感銘したことは、イルデファンソさんのフィリピンのご実家は、13人家族²⁴で、皆、仲が良いということだった。フィリピンでは、家族をととても大切にする文化が、社会の底流にあり、家族の温かさが、フィリピンの誇りだと語られるイルデファンソ氏の姿に、感動したようだった。

③アメリカ人ビジネスパーソン、スコッティ＝ジロッド氏を招待

7月にアメリカ人のビジネスパーソン、スコッティ＝ジロッド氏を招待し、アメリカの経済状況、教育、文化等について語り合った。

スコッティさんは、アリゾナ州の出身だった。日本人には、ニューヨーク等の東海岸、カリフォルニア等の西海岸は、よく知られているが、アリゾナ州等のアメリカ南西部については、あまり知られていない。ゼミ生はアリゾナの地理、歴史、風土、料理、生活等について、ジロッド氏に積極的に質問していった。当日は茶道部が開催していたお茶会に参加していただき、日本のお茶を楽しんでいただいた。

(3) Visit

ゼミ生は Visit の活動として、以下の2つの訪問活動を行った。

①ニッコーインターナショナル主催の「オクトーバーフェスト」へ参加

9月に長岡で開催されたドイツのお祭り、オクトーバーフェストに、ゼミ生が参加した。オクトーバーフェストは、毎年秋にドイツのミュンヘンで開催される、世界的に有名なフ

フェスティバルで、地域活性化プログラムの広田ゼミのアドバイザーを担当してくれているニコローインターナショナルのドミニク＝ネルソン社長が、日本の皆に、ドイツの文化を知ってもらおうと開いたものだった。

当日は、本場ドイツのビールを試飲しながら、多くの方と交流することができた。そこでゼミ生は、世界中の方と積極的に交流されてこられたコスモポリタンのビジネスリーダーと知りあいになった。その方は「国籍、民族、宗教などの違いを超えて、広く大きい気持ちで、世界の人々と友情を結んでいきなさい」と、ゼミ生に教えて下さった。

②長岡市国際交流センター「地球広場」を訪問

12月に長岡市の国際交流の司令塔とも言える、長岡市国際交流センター「地球広場」を訪問し、大隅一氏に長岡市の外国籍市民の様子や、市の外国人の方への応援の取り組み等について学んだ。

長岡市には、留学・研修・日本人の方との結婚など、多様な形で、58カ国から2300人の外国籍市民が住まれていることをゼミ生は知り、地域が予想以上に多国籍化していることに驚いていた。また、地球広場では、外国人の方への日本語学習支援、外国人の方と日本人の国際交流のイベントなど、グラスルーツグローバルイニシアチブを推進することを、たくさん行っていることが分かった。国際交流、世界への開放性という点で、長岡は進んでいるというのが、ゼミ生の感想だった。

(4) Donate

10月末の長岡大学の悠久祭において、世界への寄付金を得る目的で、ゼミ生はハイグレードバーというお店を出店した。ハイグレードバーでは、グローバルな雰囲気を出すために、イタリアのガリアーノ、アメリカのワイルドターキー、メーカーズマーク、イギリスのフォートナム&メーションなどを出した。その中でも、特に、イタリアのガリアーノは、世界中の映画のシーンで出されるほどに洗練されたフォームをしたボトルに、独特のテイストを有する最高のリキュールで、一番人気があった。ハイグレードバーで得た収益金の寄付について、ゼミで話し合った結果、世界の子供たちを応援しようということになり、ユニセフに寄付することに決定した。ホテルニューオータニ長岡が、ユニセフとの仲介を行っていたので、そこで寄付金を贈呈した。

3.4.5 ステップ5：活動の発表

11月の中間発表会、2月の成果発表会は、活動内容を発表する絶好の機会となった。2回の発表会は、それまで活動してきた内容を10分程度で説明するというものだった。ゼミ生にとってはプレゼンテーションの良いトレーニングになった。ゼミ生が戸惑ったのは、自分達が活動してきた多くの内容を、10分程度でアピールする内容に絞り込むことであった。全員で検討を重ねた結果、グラスルーツグローバルイニシアチブというコンセプトの意義とその手法として自分達が考えた具体的活動である「Study・Invite・Visit・Donate」を、率直にアピールしていこうということになった。インパクトのあるパワーポイント資料を考え、文字を極力少なくし一瞬で内容が理解できるように、ビジュアル性重視の資料を作成した。資料作成後は、本番のステージで最大限有効にアピールできるように戦術を

考えていった。テーマにあったイメージ、声質、雰囲気等、あらゆる視点から誰がステージに立つべきか、また服装や髪型はどうすべきかまで、皆で話し合っていた。2回の報告会とも見事に行うことができた。特に、発表の最後の部分での、世界的に有名になった2004年のオバマ大統領（当時上院議員）のスピーチを引用したゼミ生の以下のメッセージは感動的だった。

アメリカのオバマ大統領は、「黒人のアメリカも、白人のアメリカも、ラティーノのアメリカも、アジア系のアメリカもない。あるのはアメリカ合衆国だけだ」と訴えました。

私たちは言いたい。「日本人の世界も、アメリカ人の世界も、中国人の世界も、アラブ系の世界も、アフリカ系の世界もない。あるのは世界であり、世界市民だけだ」と。

3.4.6 ステップ6：報告書の作成

12月後半から1月にかけて、一年間の活動内容に関する報告書の作成を進めた。現実に行ってきた活動の流れである「Study・Invite・Visit・Donate」を基調にまとめることにしたようだった。各自が分担箇所を執筆していった。報告書作成の過程は、それまで自分達が学習してきた全プロセスを詳細、緻密に振り返る機会になったと思う。1月中旬に、各自が執筆した分担箇所を一つにまとめたが、それぞれの思いや価値観が強く出たり文体もそれぞれ異なっていたので、統一性のとれた内容にするのに予想以上に時間がかかったようだが、最終的には見事にまとめあげた。26

グラスルーツグローバルイゼーションの活動を通じて、ゼミ生達は多くのことを学んだと思う。特に、Invite・Visitの活動の中で、外国人の方と対話をした経験は大きかった。ゼミ生は、自然に、国籍、民族などが違っていても、皆、友情と幸せを求める同じ「人間」であり、誠実に対話、交流していけば、素晴らしい人間関係が構築できることを理屈ではなく、体得したと思う。そして、人間性豊かな交流の拡大こそが、グローバル化を平和的にランディングさせ行く底流であり、地域も、国も、世界も全て、「人間」でできているとすれば、一人一人の「人間」が幸福になることが、地域の活性化に通じるのだということを、理解したと思う。

3.5『長岡周辺地域における健康管理と予防医療の現状～「食育」と「運動」を中心とした取り組みについて～』（山川ゼミ）のケース

3.5.1 ステップ1：ゼミ公募・実課題設定・企画書作成

(1) ゼミ公募

「地域活性化GP」で活動していたことは、現在の3年生を募集する段階で告知はした。但し、初年度の取り組み自体があまりうまく行ったとは言えなかったため、4年生たちが今年度も本当に取り組む意思があるのか？と、かなり懐疑的だったことは事実である。

4年生よりも3年生の方が、この時点においては積極的だったようにも思える。4年生も結果的には、昨年あまりうまくできなかった分リベンジしよう！といった意気込みからか、取り組みに参加を表明した。

(2) 長岡市総合計画からのテーマ選択と方向性

初年度に掲げた「長岡周辺地域における健康管理と予防医療の現状」をテーマとして、継続することになった。昨年の報告書で学生たちがまとめたレポートを見ても、予防医療と言うよりは広く健康管理に目が向いていると感じた。確かに栄養管理などは予防医療における一次予防に該当するが、一般的な予防医療としてイメージを喚起されるのは健診の二次予防だ。新たなテーマの設定の余地もあったかも知れないが、テーマ選択の時点では「食育」と「運動」の2点に絞りきれず、「健診」部分も健診受診率データを各方面に依頼するなど検討はしていたので、そのまま据え置く形となった。

ゼミ担当自身が、医療情報学に関連した研究を大学病院等で行ってきた経緯もあって、本音としては、もっときちんと「健診」について調査やフィールドワークをしたかった。とは言っても、それを押しつけることはかえって学生たちの自主性を削ぐことになろうし、医療に関連した分野は、ある程度の基礎知識がないと消化しきれないのもわかっていた。

昨年度の報告書作成の際に、長岡市総合計画の概要版や新潟県における資料などを学生たちに渡して読み込むように指示していたが、正直なところ、あまり内容を理解しているとは思えない節も見受けられた。そうした学生たちの知識を底上げするために、ゼミでの座学を今年度は意図的に増やしてみたが、どこまで効果があったかは何とも心許ない。

健診だけでなく、食育にせよ、運動にせよ、万事において知識というものは大事である。知識があってこそ、目の前にある現象を読み解き、新たな提言や発想も生まれると思う。今年度の取り組んだ内容は、昨年よりは行動としては進歩したかも知れないが、今ひとつ焦点が絞り切れておらず、深みが欠けるきらいがあるのも、知識の不足が影響している。

ともあれ、自分たちが積極的に行動して欲しいという気持ちは非常に強かった。そこで、本年度はあらかじめ健康に関するイベント参加をゼミナール全体のスケジュールに盛り込み、そこへ全員が参加するようにと指示した。この辺は比較的スムーズにいったと思う。

昨年度のアドバイザー下田さんから、今年度のアドバイザー茨木さんへと引き継ぎの際、6月20日（日）の父の日企画イベントにボランティアとして参加する意向は示していた。

(3) ゼミで取り組む実課題の設定

昨年度は本当にゼミ学生たちが自主的に動かなかった。課題や示唆を与えても、それを自分のものとして捉える気概に欠けていた。最終的に発表も報告書も、ゼミ担当が何とかしてくれるだろうという甘さがあったことは否めない。今年度はそうした他力本願を払拭して本来の意味で、学生たちが自主的に取り組んで欲しいという切実な願いがあった。そのためには学生たちの身の丈に合った課題の設定をすることが必要不可欠であった。

4年生を中心に昨年の報告書にまとめた内容などを振り返り、自分たちが興味を持った点をより深めて探ってゆくように促した。その結果が「食育」と「運動」だったと言える。

(4) 調査研究計画書の作成と学生の役割分担

5月に入って、今年度の活動のおおまかなスケジュール作成やゼミのグループ分けを行った。昨年は同じ学年の学生たちだけで、ある意味まとまりは良かった。ところが、今年3年生が7名加わったことで、上級生らしさや下級生らしさをそれぞれの学年が模索しつつ、16名がお互いに周囲の出方を窺っているようなところが垣間見られた。

上級生としての自覚を持ってもらうため、4年生をリーダー格として、ゼミを4つのグループに分けた。従来のように自然発生的にやれる人がやるというのではなく、グループごとのテーマや担当決めを行った。昨年度の反省を活かして、新たな事柄に積極的に取り組むためには、ゼミの中での組織づくりが重要だと思ったからだ。

便宜的にグループをリーダー格の学生の名前で「〇〇班」と呼んでいたが、最終的には「食育」関連のグループと、「運動」関連のグループがゼミを牽引することになった。

3.5.2 ステップ2：資料収集・分析

地域活性化P 平成22年度ゼミ計画表

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
地域		テーマ決定	アドインザ決定	第1回推進協議会			悠久祭 10月30日 (土) 31日 (日)	中間発表会・第2回推進協議会 11月20日 (土)			H22年度成果発表会 2月12日 (土)	第3回推進協議会 報告書作成
山川	ゼミ内でのオリエンテーション +昨年度の反省	テーマ決定、知識の底上げを狙いとした講義の展開	アドインザ決定とイベント参加、分担の割り振りなど	実施調査、ヒアリングと各種データの検証①	実施調査、ヒアリングと各種データの検証②	各パートで報告書作成と検証作業①	各パートで報告書作成と検証作業②	中間発表に向けての準備	中間発表の反省を踏まえての内容の改善と振り返り	最終発表に向けてのハーサルと報告書作成①	最終発表に向けてのハーサルと報告書作成②	最終発表の反省を踏まえての報告書最終仕上げ

昨年はアンケート調査を実施することができなかったので、今年度は学生たちが自主的にアンケート調査をするようにと心掛けて指導した。手始めに身近な学内に目を向けて、学生アンケートを2回実施した。学生が自分たちで調査用紙の回収分担枚数を決めたり、アンケート項目の文言を試行錯誤した点は評価できる。惜しむらくは学内に留まって外へ目を向ける余裕がなかったのと、統計処理の分析が不徹底だったことだ。学術論文では、この統計解析こそが内容の価値を決める肝となるポイントだ。サンプル数が多いに越したことはないが、限られたデータから知見を抽出して考察を加えるトレーニングをどこかできちんとやらせておくべきだったとも思う。

3.5.3 ステップ3：活動報告

3.5.3.1 健康に関するイベントへのボランティア参加

(1) 「父の日企画 家族で守ろう パパの健康」：2010年6月20日（日）

青壮年期世代への健康づくりの意識啓発を目的とした『父の日企画 家族で守ろう パパの健康』にゼミ学生 12 名が参加した。ショッピングモール内で家族連れを対象に健康について考えてもらうという趣旨だった。最初は「こんなところでやるんですか?!」と気後れしていた学生もいた。長岡市福祉保健部健康課を中心に組織された精鋭スタッフの足手まといにならぬよう、ぎこちないながらも自分たちなりに出来ることを見つけようという空気が自然に生じてきた。長岡大学の学生に当初期待されていたのは、年齢も近いということからか、イベントに参加する家族連れのお子様たちの見守りだった。ところが、次第に忙しくなると、数名が BMI を算定するサポートに呼ばれたり、いつの間にか体力チェックコーナーで見よう見まねでインストラクターの助手のように動いていたりした。

極めつけは「あぶらげんしん」（油揚げと健診に因んだマスコット）の着ぐるみだった。初夏ということもあって、20 分間も入っていると汗だくになってしまうのだが、3 年生の男子 3 名が代わる代わる着ぐるみ姿となって呼び込みをしたり、テレビの取材に応じた。

何というか、これはボランティアとして参加する側にとっても楽しいイベントとなった。

(2) イベントを経験したことによる意識の醸成

父の日企画のイベント内容には「3・1・2 弁当箱法」の紹介や栄養管理の相談もあって、その後の「食育」グループの行動の方向性にかんがりの指針を与えてくれたと思う。BMI による「からだ年齢測定」も然りだ。握力や反復横跳びの測定は、運動能力について考えるきっかけにもなったと思う。さらに、血圧・血糖値などの簡易検査も行われていたことで、講義で説明した内容がようやく腑に落ちたという表情を見せていた。百聞は一見に如かずとは、本当によく言ったものだと思う。体験したことは、身体の記憶に残ってゆくのだ。

このイベントへの参加を通じて、少しずつゼミの学生たちも親睦を深めていったようだ。

3.5.3.2 悠久祭における「各ゼミの取り組みパネルの展示」

(1) パネルのデザインと準備

悠久祭において、地域プログラムに参加しているゼミが取り組んでいる内容をパネルとして表示することになった。3 年生がインターンシップに励み、4 年生が就職活動に苦戦を強いられていた夏を過ぎて、本格的に準備に乗り出したのは 10 月に入ってからだった。

最終的にパネル原稿を取りまとめたのはゼミ担当だったが、今年は 3 年生たちにパネルのデザインを描くように指示した。この時点では、6 月の父の日イベント以外に目ぼしい活動内容がなく、それを中心にまとめることになった。3 年生に絵心のある学生がいて、非常に的確にパネル案のスケッチを描いてくれた。それを元にパネル原稿を作成した。

(2) パネル展示とボランティア体験

悠久祭の地域プログラムのパネル展の近くでゼミ担当は課外授業「ボランティア体験」の展示を細々に行っていた。昨年は『MVP(=もっともボランティアで貢献した人の意味)コンテスト』と称し公開プレゼンテーションとコンテストを兼ねた内容だった。履修者も少なかった今年は、作ったスライドをそのまま掲示した。パネル展のついでに見ていって下さいという便乗型の呼び込みを学生たちにやらせてみた。外部からのお客さんが来て、しげしげと地域プログラムのパネルや展示物を見ていた姿が印象に残った。

3.5.3.3 長岡周辺の食育イベントへの参加

(1) 燕三条食育PR

スーパーの一角での催事だったが、栄養士さんのネットワーク県内の広範に渡ることを知った。県央地域では食育にかなり力を入れていて、給食人気メニューの展示などからもそうした姿勢が伺えた。弁当箱とカロリーの目安など表示が具体的でわかりやすかった。

(2) 長岡農業まつり

「3.1.2弁当コンテスト」の表彰風景を実際に見ることができて良かった。農作物などの産地直売コーナーの一角で食育推進のための栄養管理チェックなどが行われていた。6月のイベントで一緒にしたスタッフと再会するなど、改めて人と人の繋がりを感じた。

3.5.4 ステップ4：調査研究報告書の作成

(1) 調査報告書の作成

今年度は6月から各種の健康イベントへ参加したり、中間発表と成果発表を担当する3年生たちが主軸となって悠久祭のパネル展示のプランを考えるなど、報告書に盛り込むコンテンツは、割と早いうちから出来始めていたように思える。

但し、これは主に食育に関する内容ばかりで、健診や運動についての部分は、ほとんど出遅れた感じだった。昨年実施しなかったアンケート調査も中間発表が迫ってきたことで焦って動き出したのは否めない。いい意味で3年生と4年生がお互いを刺激し合っていたのが10月頃だった。一種の自然淘汰かも知れないが、学年に拘わらず行動できる学生とそうでない学生の差が少しずつ、だが確実に開いていったのもこの時期である。

(2) プレゼンテーション資料の作成

今年度は11月20日(土)に中間発表会があった。昨年度はゼミ担当の止むにやまれぬ出張と重なったので、中間発表会の場に臨んだのは、ゼミ担当も3年生も初めてだった。あとで3年生と4年生に聞いたら、発表の中でもっとも緊張したのはこの学内の中間発表会だったと答えた学生が結構多かった。中間発表のスライド資料を作る際には、昨年度に4年生が作ったものを改めて配り、まず発表スライドのイメージを持たせようと努めた。

実際のスライド作成は、3年生たちが自主的に行った。昨年とは格段の進歩であった。

3.5.5 ステップ5：調査研究の発表

今年度は発表会の予定時間や発表時の概要などをなるべく詳細に学生に伝えるように腐心してきた。その甲斐もあってか、次第に学生が自分たちで発表などの段取りを考えるようになっていたのは、ゼミ担当としても嬉しい進歩であった。

平成23年2月12日（土）に、ホテルニューオータニ長岡「NCホール」で成果発表会に臨んだ。今年度は3年生が中間発表と成果発表の両方を担当した。但し、成果発表会のスライド作成と原稿の準備と、4年生の卒業論文の提出と、さらには試験問題の作成などすべての事柄が1月から2月にかけて集中したことで、ゼミ担当は急激に繁忙を極めた。

悪天候も相まってほとんど家にも帰れず駅前のホテルに連泊していた。それにしても、ゼミ学生は決まって問題を抱え、ゼミ担当の研究室へと夕方近くにやって来る。学生対応で遅くなる→授業など自分の仕事の取り掛かりも遅れる→周囲に迷惑をかけたくないのので何とか挽回しようと自分に鞭打って頑張るが、体力的にも精神的にも限界に達するという悪循環に嵌っていた。「健康」をテーマに取り組んでいるはずのゼミ担当が、何が悲しくてこんなに不健康な生活習慣に埋没してしまっているのか、本当に不思議でならなかった。対応した学生たちがそれなりに成長して、同じミスを繰り返さなければまだ救われるが。「できない」と言って思考停止状態に陥って、こちらに案件を丸投げしてくる学生たちに一体どこまで面倒を見るべきなのか、大学に着任して以来ずっと判断に苦しんでいる。

4年生の卒論に時間がかかりすぎた分、発表する3年生への対応が遅れたのは心が痛む。だが、3年生は彼らなりに4年生たちやゼミ担当すらも反面教師として自主性を伸ばしていったようだ。成果発表会の手元資料や発表スライドにはいくつか改善の余地もあった。こうすれば見栄えが良くなるといったアドバイスをもっと素直に聞いて欲しいという気もしないではなかった。だが、完成度よりもせつかく芽生え自主性を重んじたいと思った。

地域に関する取り組みに参加して2年目で実感したのは、ゼミ担当の大きな仕事は口を挟むことよりも、口を挟んであれこれ世話を焼きたくなる気持ちを抑えることに尽きる。但し、全くの放任ではなく、学生たちが方向を見失わないように、見守りながらである。

3.5.6 ステップ6：報告書の印刷・公表・提言

4年生が共同の卒論として提出した部分をベースに、3年生それぞれに加筆する分担を決めた。地域プログラムの報告書をそのまま卒論として提出するというのも出来たかも知れないが、不十分でも卒論は卒論で4年生の大学生活の集大成としてまとめたかった。もっと現実的なことを言うと、卒論の提出期限の段階では盛り込めなかった部分についてきちんと報告書で網羅する必要もあった。4年生の共同卒論については、学生たちの文章にほとんど修整は加えなかった。日本語としてどうかという表現について、わかりやすく書き直しを促した程度である。これだけでも昨年から見たら、大きな進歩には違いない。

3年生と4年生と、それぞれの学年において年度当初よりも成長したなど感じるものが多くなった。もっともまだまだ至らぬところばかりで先が思いやられるのだが、今年度は地域への取り組みとして、ある程度の達成は出来たと思いたい。

それもこれも、アドバイザーの茨木さんや下田さん、地域プログラムの山田さんたちや実に多くの方のご尽力や励ましがあってのことである。心からの感謝を伝えたい。

3.6 環境・リサイクル問題への取組みー地域循環ネットワークを中心にー

ゼミナール担当教員 原田 誠司

平成 22 年度の原田ゼミナールの「環境・リサイクル問題への取組みー地域循環ネットワークを中心にー」プロジェクトの実施計画・状況は次の通りである。

3.6.1 取組のテーマ選び・・・第 1 段階（平成 22 年 4～5 月段階）

まず、学生が取り組むテーマ選びを行った。

(1) 方針の説明

ゼミ担当教員・原田の方から、4 月のゼミで、次の方針を学生に提示した。

- ・位置づけ・・・前年度（平成 21 年度）で助成が終了した現代 G P の地域活性化プログラムを平成 22 年度も継続するので、地域活性化プログラムとして、取り組みたい。
- ・目的・・・実際のテーマを対象にして、提案することにより、調査研究の方法を学び、社会人基礎力の向上を図ることを目指す。
- ・取組テーマ・・・長岡市の地域活性化課題・テーマを検討してほしい。具体的には、長岡市総合計画「第 4 章第 1 節環境にやさしい循環型のまち」づくりへの取組はどうか。
- ・より具体的には、リサイクル事業で実績を上げている「NPO 法人地域循環ネットワーク」のリサイクル活動を取り上げたらどうか、と提起した。

(2) テーマの検討・決定

- ・テーマ・・・環境問題も多様だが、地域の循環型社会づくりに資するテーマとして、「環境・リサイクル問題への取組みー地域循環ネットワークを中心にー」に取り組むこととした。
- ・取組みチーム・・・取組チームも、学生の応募をベースに、2 名が応募したが、途中で 1 名が離脱、結果的に、次の笹岡君 1 名になった。
*リサイクル取組・チーム・・・原田ゼミナール 3 年生 笹岡慎也
- ・連携アドバイザー・・・地域循環ネットワークスタッフ：長谷川公亮氏に、本取組のアドバイザーをお願いした。

3.6.2 調査研究計画・・・第 2 段階（平成 22 年 6 月段階）

第 2 段階として、調査研究計画を具体化した。

- ・調査対象企業・・・地域循環ネットワーク
- ・取組の趣旨・目的・・・次の 2 点にある。地域循環ネットワークの活動の調査、さらに参加により、状の評価・問題点をまとめ、今後の改善方策を提案する。また、この調査研究を通して、学生の調査能力・社会人基礎力の向上を図る。
- ・調査研究スケジュール・・・大きくは、次の 3 段階で進めた。

①循環型社会の概要把握・・・環境問題のなかの循環型社会の概要について、諸文献・政府・自治体政策情報等で整理する。

- ②地域循環ネットワークの給食残さ等事業把握・・・地域循環ネットワークのスタッフ（長谷川氏）へのヒアリングにより、同ネットワークの柱の事業である〈給食残さリサイクル事業〉や〈わりばしリサイクル事業〉について、整理する（5W1Hで）。
- ③給食残さリサイクル事業等への参加・・・以上のヒアリングを経て、給食残さやわりばしリサイクル事業に参加し、体験する。
- ④改善提案等まとめ・・・ヒアリングや参加の結果を踏まえて、改善提案等まとめを行う。

3.6.3 調査の実施・・・第3段階（平成22年7月～11月）

以上の調査研究計画を踏まえて、次のように調査を実施した。

- ・循環型社会の概要把握・・・7月
- ・給食残さ等事業の把握・・・7～8月
- ・給食残さ等事業への参加・・・8～10月
- ・中間発表・・・11月

3.6.4 改善提案等まとめ・・・第4段階（平成22年12～平成23年1月）

上記の中間報告等に対して、地域循環ネットワークの長谷川氏のアドバイスをいただき、まとめを行った。

- ・最終報告・・・平成23年2月

3.7 『楽しもう！越後長岡「まちの駅」』（鯉江ゼミ）のケース

3.7.1 取組活動の決定

(1) 取組実施の決定

昨年度まで、「まちの駅」に関する調査を3年継続で行ってきており、「ながおか市民センター」をはじめ、長岡市内の多くのまちの駅の駅長さんや、昨年度調査に伺った「本庄地域」、「富土地域」、「会津地域」の方からも継続して取り組んでもらいたいという期待が寄せられていたので、この取組だけは継続させることにしていた。

(2) 事前学習

昨年度まで本学で勤務されていた石川准教授の退職に伴い、本年度の鯉江ゼミの学生数は18名となったが、「地域活性化プログラム（本学の3，4年生のゼミ対象）」や「まちの駅への取組（鯉江ゼミの取組）」については全く意識が異なっていた。

そこで、過年度調査報告書をもとに、①「まちの駅の歴史」と概要、②過年度調査結果の概要、について昨年度調査にかかわった4年生から新しいメンバーにレクチャーを行った。しかしながら、具体的活動イメージを共有化することは難しかった。

平成22年度、鯉江ゼミのメンバー構成

	新、鯉江ゼミナール（18名）	
	旧、鯉江ゼミ	旧、石川ゼミ
4年生	6名：「まちの駅」を経験	2名：プログラムを認識
3年生	6名：「まちの駅」を認識	4名：全く白紙

(3) 今年度取組内容を検討するため想い

過去3年間の取組を通して、私自身が感じた印象は以下の通りである。

長岡は3度に渡って11市町村が合併し、地域資源は豊富であるがお互いを良く知らないという課題を抱えている。そのために、長岡市総合計画では地域交流の拠点として「まちの駅」を有効活用することを計画し、平成22年度末までに50駅を開設するという目標を立てている。これについては、平成21年度中に達成されているが、まだまだ有効に機能しているとは言い難い。一方で、長岡市は2004年10月の中越大震災の被災地であり、住民が一丸となって復興に努めてきた経緯もある。したがって、地域で協調・協働する意識は高いと感じられる。

過年度取組の反省点として、文部科学省からの補助金（現代的教育ニーズ取組支援プログラム＝現代GP、平成19年度～21年度＝）による取組であることから、どうしても教員が成果を求める傾向があった。そのため、教員主導となり、学園祭で行った模擬店（補助対象外の取組）以外は学生が少しも楽しんでいなかった。また、一部の学生のみ熱心に活動するが、それ以外はお客さんであった。さらに、就職はできているが、卒業後は地域を意識しない傾向が見られた。その結果、学生の社会人基礎力についても、チームで働く力（チームワーク）に関しては一定の成長が見られたが、前に踏み出す力（アクション）に関しては、行動はできるが、いつまでも指示待ち状態。考え抜く力（シンキング）に関し

ては、残念ながら、成長があまり見られない状態であった。そこで、今年度は口出し・手出しをしないことを基本方針に、①君たちが楽しいと思うことをしなさい、②地域の魅力を自分たちで体感しなさい、とだけ指示を出した。

私としては、取組を通して次のようなことができれば良いと考えてはいたが。一つは、長岡市のすばらしさを社会調査の手法（ヒアリング調査）を用いて調査し、情報処理技術を駆使して広く市民に伝える（パネルの作成、展示、ホームページの作成）ことで、旧市町村の相互理解を深めるお手伝いをする。そのことが、学生が地域を知り地域を愛することになる。もう一つは、「まちの駅」などが企画するイベント活動に参加したり、ボランティアとして活動したりすることにより、地域活性化につなげていければより望ましいと考えていた。そして、何よりも学生が地域の潤滑油になってほしいと考えていた。

(4) 今年度取組内容の決定

昨年度から取組にかかわっていた4年生は上述のような私の考え、および、昨年度までの「地域活性化提案プログラム」から「地域活性化プログラム」への移行を通じて、学生のマイカー利用による調査活動も許可されたので、その意味（学生が実際に地域にでて活動することを期待していること）を十分に理解していた。

そこで、彼らが中心となって今年度の活動を以下のように設定した。

- ①市内にある「まちの駅（50駅）」の紹介パネル作成
（ヒアリング調査、パワーポイントによるパネル作成、ホームページ作成）
- ②パネル展及び商品展示（学園祭でのパネル展実施）
- ③「まちの駅」の食材を使った豚汁とおにぎりの販売
（学園祭での模擬店の実施）
- ④まちの駅関連イベントへの参加
（県内外のイベントに、出展・スタッフとしてボランティア参加）
- ⑤取組活動に関する「越後長岡まちの駅」へのアンケート調査（当初は計画なし）

学生が今年度はこういう活動をしますと言ってきたときは、私自身、「正直言ってこんなにできるのかな」という不安を持ったことは事実である。

(5) 調査研究計画書の作成と学生の役割分担

10月30日、31日に実施される学園祭で「パネル展」を行うためには、それまでに、ヒアリングを行い、パネルを完成させておく必要がある。メンバー全員のスケジュールをあわせて50駅のヒアリングを実施することは不可能であるため、3チームに分けて担当を決めた。

また、イベントへの参加は必要に応じてメンバーを構成し対応することにした。

ヒアリングの担当地域およびメンバー構成

班	担当地域
	メンバー
1班	旧長岡(6駅)、小国(4駅)、越路(4駅)、三島(3駅)
	石綿真也、小島和幸、小林薫、関根絢也、中嶋真悠美、李佩
2班	旧長岡(7駅)、和島(3駅)、山古志(3駅)、川口(2駅)、与板(2駅)
	黒田未奈子、重野友里、山田祐介、大平卓弥、竹内祐輝、南雲涼
3班	旧長岡(6駅)、栃尾(4駅)、中之島(3駅)、寺泊(3駅)
	寺本誉、大井拓朗、今坂麻美、小嶋さやか、粉川大樹、中山佳之

3.7.2 活動報告

3.7.2.1 「まちの駅（50駅）」のパネル作成とパネル展、ホームページの作成

(1) ヒアリング調査

6月から8月にかけてチームごとにひたすらヒアリングを行っていた。事前アポから必要書類の作成（出張計画、出張報告）まで、学生が着実に対応できるようになっていた。

(2) パネルの作成

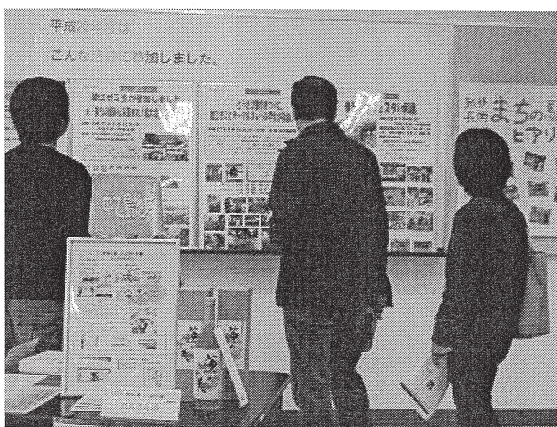
ヒアリングには参加しているが学生により傾聴能力には差がある。真剣に聴いてメモを取る学生、何となく座っている学生、様々である。彼らがそれぞれの分担をしてパネルをつくれればその成果物は大きな違いがあるのは当然である。中には「作成すればいいんでしょ」という感覚で別の駅の写真を貼り付けた学生もいたほどである。ここで、学生間に軋轢が起こったが、作成したパネルは各駅にお送りして確認してもらわなければならないことを知り、真剣に取り組みに参加している学生の指示に従わざるを得なくなった。このような基本的なことが理解できていない学生がいたことには驚きを感じたが、数人の学生が中心となって修正等を加え、どうにか学園祭までには完成を見ることができた。

(3) パネル展の実施

この企画は3年前から行っているもので「まちの駅」の紹介パネルと、その「まちの駅」の商品を一緒に展示し様々な方に「まちの駅」をPRするものである。今年度は50駅すべてにヒアリングを行った結果、取組に賛同してくださる駅も増え、物品提供は昨年度の16駅から33駅になった。また、来場者も昨年度の194名から276名へと増加した。この増加は単なる偶然ではなく、紹介体制など学生の工夫によるところも大きい。

(4) ホームページの作成

作成したパネルをもとに、ホームページを作成した。当初、学生が作成したホームページを公開できるのか不安に思ったが、得意な学生もおり、私自身が驚くようなすばらしいものができたと感心している。



3.7.2.2 学園祭における「模擬店」の実施

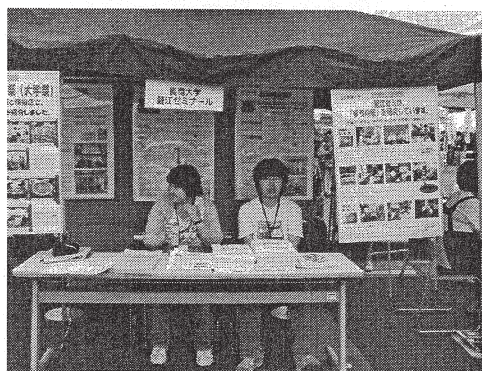
模擬店とパネル展を同時に行うことによって、相乗効果があることは昨年度の経験から学生は理解していた。本年度もまちの駅の食材を利用した「豚汁とおにぎり」の販売を行った。

ここでもヒアリング調査の好影響があり、食材を格安で提供していただいたこともあり、5万円を超える利益を上げることができた。この点でも、「まちの駅」の協力の大切さを実感したものと思われる。



3.7.2.3 まちの駅関連イベントへの参加

今年度はまちの駅関連イベントにも多く参加した。当初はゼミ担当教員へのお誘いや依頼が多かったが、ヒアリング活動やイベントへの参加を通じて学生へ直接依頼が来るようになった。とりわけボランティアではゼミ生だけでは必要人数を確保できなこともあり、学生自らが他のサークルに協力を呼びかけるなど、そつなくこなしていた。私はこのまま行くと鯉江ゼミはイベント屋になるのではと心配したほどである。



また、「まちの駅巡り」では食事が提供されるため費用がかかるが、一部の学生が自費で参加するなど喜ばしい現象が起こった。余談になるが、「まちの駅巡り」のなかで造酒屋を見学したそうで、私へのおみやげとしてお酒（一升）を買ってきてくれたのには、涙が出るほどうれしかった。

参加したイベント一覧

日付	イベント	依頼先
5月20日	「越後長岡まちの駅」駅長会議参加	市民センター
7月4日	「まちの駅フェスタin和島」	市民センター
8月10日	「とうきび観音まつり」	日本茶の駅
8月22日	「まちの駅みんな集まれ！ にいがた県大会」	市民センター
8月28日	「長岡灯りの祭典in寺泊」 キャンドルアートコンテスト	長岡市
9月12日	第9回お台場Eポート 防災交流大会	長岡市
10月2日 3日	第13回 まちの駅全国大会 まちの駅全国フォーラムin鶴来	市民センター
10月23日 24日	SONG OF THE EARTH2010	NPO法人にいがたからみんな えがおに
10月30日 31日	長岡大学悠久祭 まちの駅紹介パネル展/模擬店の実施	自主企画
11月6日	市民活動まつり	自主企画
11月19日	市民活動まつり反省会	市民センター
11月27日	学生間交流会	まちの駅 人生の交差点
1月20日	「越後長岡まちの駅」駅長会議参加	市民センター

3.7.2.4 取組活動に関する「越後長岡まちの駅」へのアンケート調査

この取組は、当初は考えていなかったものであるが、学生自らが自分たちの活動について評価をしてもらい次年度への課題を抽出するために行ったものである。このような自主的な活動ができるようになったことが、学生の成長の証と思われる。

アンケート内容は、①アポイントの取り方に関して、②ヒアリング日時の設定に関して、③ヒアリング内容に関して、④パネルの作成に関して、⑤悠久祭（学園祭）の実施に関して、⑥今後の活動に関して、である。対応等は概ね良好との評価が得られており一安心した。また、今後の活動に関してはいくつかの有益な意見もいただいております、次年度以降の活動に反映させていきたいと思っている。

3.7.3 調査研究の発表

平成23年2月19日に、ホテルニューオータニ長岡「NCホール」で成果発表会を実施した（参加者は230名＝地域連携アドバイザー16名、一般90名、本学教職員33名、学生91名）。

今年度は学生自らが活動してきたこともあり、教員の力をほとんど借りずにその準備が進んだ。また、必要に応じて、チェックを求めるなど「ハウレンソウ（報告、連絡、相談）」の重要性を十分理解してくれていた。この点の成長は非常に大きかった。



3.7.4 報告書の印刷・公表

本報告書を作成し、印刷後、長岡市や関係機関、ヒアリング先、高校等に配布する。あわせて全面的に協力いただいた長岡市へも結果を報告する。

また、今年度の経験を、次年度のプログラム展開の参考資料としても利用する。

3.8 『佐潟・福島潟・鳥屋野潟の地域との関わりと湿地の賢明な利用について』 (吉盛ゼミ) のケース

ゼミの取組の進め方は、以下のようになる。

課題の設定 → ラムサール条約の文献研究 → 佐潟・福島潟・鳥屋野潟のフィールドワーク → ヒアリング → 佐潟・福島潟・鳥屋野潟の文献研究 → 中間発表 → 再度フィールドワーク → ゼミ論文作成 → 本発表

3.8.1 課題の設定と進め方

2010年10月に名古屋市で生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開催されることもあって、人と野生生物(特に鳥類)との関わりから地域の活性化(観光)に繋げないかということから、「佐潟・福島潟・鳥屋野潟」の湿地と飛来する鳥類の保護を今年の課題にした。活動するゼミ生は11名(4年生)である。

新潟市には「潟」という地名が市内のあちこちに残されている。しかし、現存する「潟湖」は少なくなっているが、そこには、希少なオオヒシクイや多くのコハクチョウ、カモ類などが生息できる自然環境がある。

さて、オオヒシクイはロシアのカムチャカ半島から、ハクチョウはシベリアから飛来している。新潟市内にある「佐潟」、「福島潟」や「鳥屋野潟」は、多くの野鳥がそれぞれ行き来している生息地である。

本研究では、「佐潟」、「福島潟」と「鳥屋野潟」で現地調査を行って、いかに地域の人々が守り、関わってきたかを考察する。

また「佐潟」は、ラムサール条約に登録された湿地である。ラムサール条約は「湿地の生態系の保全」や「湿地を持続的に利用していくワイズユース(賢明な利用)」を基本理念としている。「ワイズユース」とは何かを明らかにして「福島潟」と「鳥屋野潟」が登録湿地になるための条件を考察する。

水鳥を保護する「ラムサール条約」についてまず文献研究する。1971年にイランのカスピ海湖畔の町ラムサールで「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」が締結された。2009年2月末現在、世界で158ヶ国が加入している。登録地数1,832ヶ所で、面積では約170万平方キロメートルである。

さて、ラムサール条約は「湿地の生態系の保全・再生」と「賢明な利用(ワイズユース)」を基本理念としている。そこでこれらの基本理念について考察する。

つぎに「佐潟」、「福島潟」と「鳥屋野潟」でフィールドワークして、ラムサール条約の基本理念が実践されているかを調査する。

3.8.2 ラムサール条約の文献研究

ラムサール条約は、1971年にイランのラムサールで開催された国際会議で採択されたために都市名から呼ばれているが、正式名称は、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」(The Convention on Wetlands of International Importance Especially as Waterfowl Habitat)という。他にも幅広い湿地の保全に力を入れるために「湿地条約」

(The Convention on Wetlands) とも呼ばれている。1971年の会議でラムサール条約に調印した国は18ヶ国であり、当時、日本は未加入であったが、1980年に日本はラムサール条約に加入した。

日本は、1980年に条約に加盟するときに、釧路湿原を条約湿地とした。2011年1月現在では、37か所が登録を受けている。

ラムサール条約は渡りを行う水鳥にとって繁殖地や中絶地または越冬地など生息地として国際的に重要な湿地を国際間の協力によって保全していかなければならないため多くの国が締結している国際条約である。また人間にとっても価値のある資源を将来に持続させる必要性と努力を促している。

日本での登録条件には3つある。その条件は①国際的に重要な湿地であること、②国の法律（自然公園法、鳥獣保護法など）によって将来にわたり自然環境の保全が図られること、③地元住民などから登録への賛同が得られることの3つである。

ラムサール条約ではそれぞれの加盟国が国内法によって条約湿地を保全していくことが義務付けられているが、湿地保全の基本原則は湿地を保護地域に定め人々の立ち入りを禁止するなどの保全施策を実施するのではなく、湿地の生態系を維持しつつ湿地の有形資源や無形資源を持続的に利用または活用する賢明な利用に基づいている。

ラムサール条約で採択された賢明な利用（ワイズユース）とは、「生態系の自然財産を維持し得るような方法での、人類の利益のために湿地を持続的に利用することである」という。また条約第3条第1項では、「締約国は、登録簿に掲げられている湿地の保全を促進し、およびその領域内の湿地をできる限り適正に利用することを促進するため、計画を作成し、実行する」と規定する。

ところで、ラムサール条約では人の立ち入りや狩猟や漁業などを厳しく規制はしていない。湿地の賢明な利用とは湿地とそこに生息する多様な生物の恵みなどを子孫に伝え守りながら湿地からの恩恵を受けつつ利用していくことである。賢明な利用となるものは伝統的な狩猟や漁業などそれぞれの地で代々受け継がれてきたものや、適正に管理されている観光利用などである。

海や湖沼、川、水田などの湿地から、ワカサギやハゼ、カキ、ウニ、コンブなどの水産物や、米、レンコン、わさびなどの農産物を得ている。湿地は、地域の産業を育て、地域経済を活性化する。湿地には、多くの観光客が訪れて、ハイキング、バードウォッチング、カヌー・ハイクなどを楽しむことができる。湿地は、植物や水鳥を観察することによって心を和ませ、環境学習、教育、研究の教材を与えてくれる。

3.8.3 フィールドワーク

佐潟、福島潟と鳥屋野潟を実際にゼミ生と調査した。10月初旬の佐潟は、水生植物が湖面を覆っており、水鳥はあまり飛来していなかった（写真①）が、福島潟の11月初旬の湖面には多くのカモ類が飛来していた（写真②）。鳥屋野潟の11月初旬は、野鳥は少なかった（写真③）。

佐潟が唯一ラムサール登録湿地であるので、観光客がやはり多く見えていた。福島潟は登録湿地ではないが、NPO法人や地元の有志の尽力もあり、観光客は多いが、鳥屋野潟は公園で遊ぶ人はいるが、潟を見に来ている人は少ないと感じた。

写真① 佐潟の風景



写真② 福島潟の風景



写真③ 鳥屋野潟の風景



3.8.4. 佐潟・福島潟・鳥屋野潟について文献研究

佐潟については「佐潟水鳥・湿地センター」内に資料展示物があり、福島潟については「ビュー福島潟」館内の2階にある「NPO 法人ねっとわーく福島潟」の活動報告書を読み、福島潟の歴史を研究した（写真④）。鳥屋野潟は、「スポーツ公園事務所」が管理を行っているが、展示物資料等は少ないので、鳥屋野潟の歴史については新潟市民図書館から研究書を借りて研究した。

写真④ 「水の駅・ビュー福島潟」館内で文献調査



3.8.5 中間発表・本発表・報告書の作成

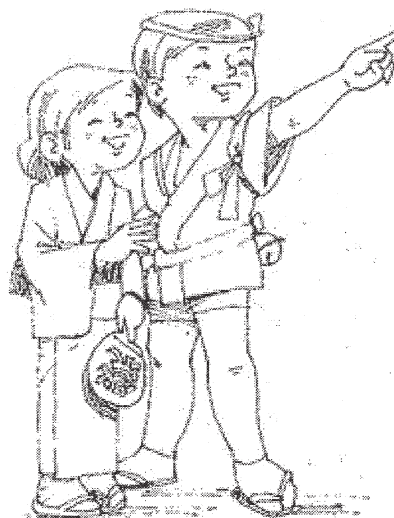
ゼミ生を4班に分けて、ラムサール条約研究班、佐潟班、福島潟班と鳥屋野潟班ごとに資料を収集してパワーポイントを作成して発表し、論文に纏めた。

3.9 『「出会いの街・ながおか」大手通活性化プロジェクト』

(鯉江ゼミ) のケース

3.9.1 取組活動の決定

この取組を行うきっかけは中越高校からのお誘いによる。中越高校放送部では平成 21 年度に「街かど調査隊～出会いの街、長岡から」を作成している。そのときに出会った大手通にある 6 体のブロンズ像の原面のすばらしさに感動し、それを活かせる方法はないかと考えたそうである。当初はカレンダー制作が最有力な案であった。



3.9.2 具体的な活動までの道のり

(1) 進まない事前学習 (誤算 1)

今年度の鯉江ゼミは 18 名であるが、新潟市、魚沼市、小千谷市および長岡市と合併した地域の出身者が多く、なおかつ彼らはほとんどがマイカーで通学しているため大手通へはあまり行かない状況であった。

大手通を知る意味もあって、学生たちにブロンズ像を見てくるように指示をした。学生たちは何となく楽しそうということで、早速、大手通へ足を運んだが、大きな誤算があった。私としては、大手通を題材として取組を行うのだから、当然大手通はどういう雰囲気、どこが魅力的で、何が問題なのかくらいは感じてきてくれると思っていたが、夕方車で行ってブロンズ像を見て、「今まで知らなかったけれど、魅力的な像でした」が感想であった。

(2) 誤算 2

『7.3 楽しもう！越後長岡「まちの駅」』でも触れたが、今年度の鯉江ゼミは 18 名であるが、3分の2はこのプログラムをよく認識していなかった。「まちの駅」の取組と「大手通」の取組のどちらに中心的に参加したいかというアンケートを採った結果、希望者は半々であった(数名は両取組とも参加する意志を表明)。しかし、昨年度から「まちの駅」の調査にかかわっているメンバーは継続して「まちの駅」の調査を行うことを希望していた(一部の学生は両取組に参加)。さらに、石川ゼミから来た 4 年生の 1 名も「まちの駅」の取組への参加を表明していた。残ったのは、4 年生 1 名プラス掛け持ち組と 3 年生という結果になった。

メンバーもどうにか確保できたし、どうにかなるかと思った私に誤算があった。「まちの駅」の取組を行っているメンバーは経験者たちで、昨年の反省から早めにヒアリング等の活動を行わないと学園祭に間に合わないという危機感を持っていた。またヒアリング箇所も 50 駅と多く、全員で分担しなければ対応できないという意見を持っていた。これはこれで正しい判断ではあるが。

その結果、「まちの駅」へのヒアリング活動ばかりが先行し、ヒアリングを行えばパネル作りも発生するため、ますます「まちの駅」の取組にウエイトが移っていった。

(3) 迷走する学生たち

それでも何とかしなければという意識はあったと思われるが、「地域活性化プログラム」の活動内容を理解し経験もしてきているメンバーがいない集団では何も進まないのが実情であった。この状態は「地域活性化提案プログラム」が始まった平成19年度と同じである。

何とか学生を動かそうと、中越高校との打ち合わせやブロンズ像の原画を描かれた越時計店の野本氏へのヒアリングを行ったが、誰もまとめるものもおらず、いつの間にかヒアリングメモも無くす始末である。そして時間ばかりが過ぎていった。

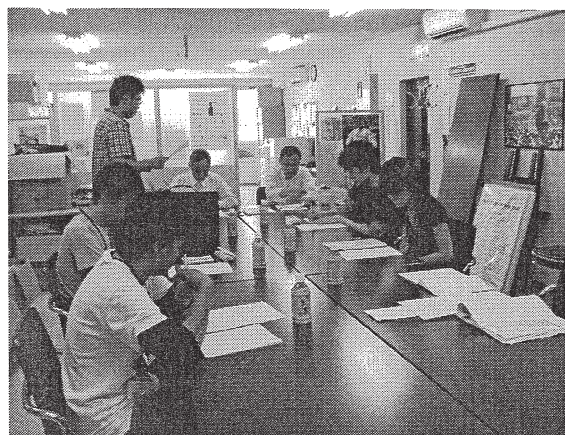
夏休みも終了し、「まちの駅」の取組の中心メンバーたちが「大手通」の取組が全く進んでいないことに危機感を覚え、口出しを仕始めた。その様子は、ボクサーとサンドバッグのようだった。サンドバッグ組は当然面白いはずはなく、ますますやる気を失っていった。私に言われ、しょうがなく打ち合わせはするが、全く気持ちの入ったものではない。

時間だけが過ぎ、中間報告会（11月20日）の期日も迫って来ているが、活動実績は何もない状態である。中越高校へもだんだん敷居が高くなり、相談に行けなくなっていた。9月30日に大手通商店街振興組合事務局の方と自分たちの活動について打ち合わせを行ったが、カレンダー案はあえなく却下された。その打ち合わせの時に、「市民活動まつり（11月6日）」で学生が考えたイベントをやらしてもらえないかと依頼される。

ついに、「まちの駅」の取組の中心メンバーが立ち上がり強行突破を始めた。このままでは中間報告会で大恥をかくという意識が強かったと思われる。10月25日に再度、大手通商店街振興組合事務局の方と打ち合わせを行い、「市民活動まつり」で「大手通ちびっ子探検ラリー」を実施することに決まった。開催日の12日前のことである。ここで力を発揮したのは「まちの駅」の取組を通じて培った実行力（行動する爆発力と表現した方が適切かもしれない）である。企画書を作成し、メンバーを募り、チラシ・ポスターを作成し、クイズを作成した。7ヶ月を要して実行できたたった一つの取組である。

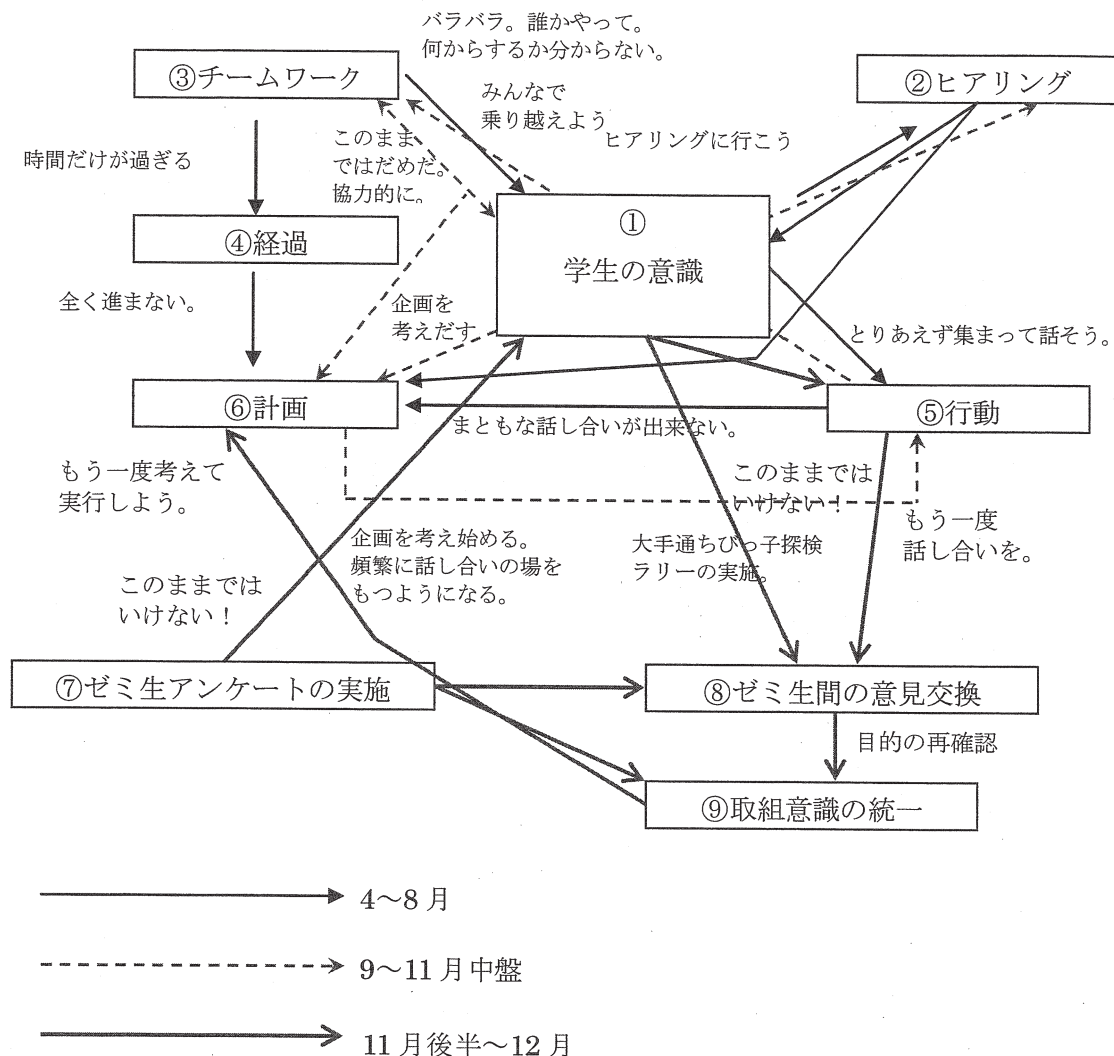
しかし、迷走はまだ続く。「大手通ちびっ子探検ラリー」は成功して、中間報告会も何とか乗り切ることができたが、アドバイザーからはかなり厳しい意見をいただいた。私としては当然の指摘と思っていたが、学生にはかなりきついものであったらしい。そこで、これまでの「まちの駅」、「大手通」の活動について自己評価をし、加えて「大手通」の取組を中越高校側がどう感じていると思うかについて、学生にアンケートをした。その結果は驚くべきものであった。「大手通」の取組にかかわっている学生の多くが「充分である」「中越高校からは感謝されている」と回答しているのである。「嫌みを言われている人間は嫌みを感じず、嫌みを言われていない人間がそれを感じている」現実を目の当たりにした。

さすがにこのままではまずいと感じ、私から学生に対して①12月以降のゼミの活動体制と活動内容、②「出会いの街・ながおか」大手通活性化プロジェクト（報告書目次案）、を配布し、当初の趣旨とこれまでの活動の乖



離点、今後行うべき活動の指針を示した。それを参考に、12月からいよいよ今年度の活動が本格化した。

下図は、4月から12月上旬にかけての学生の迷走ぶりを学生自身がまとめたものである。



(4) 取組に入る前の意識統一の重要性

私が長々と「具体的な活動までの道のり」を書いているのは、本プログラムのような体験型取組を実行する上で非常に重要と感ずるからである。奇しくも、本年度の鯉江ゼミの2つの取組でそれが如実に現れた。

「まちの駅」の取組では昨年度からの経験者もおり、また、過去3年間継続して取り組んできた実績もあるため、何を目的として何をしていくのかが明確であった。そして、それを中心メンバーが率先して実行していきつつ、メンバーに分担させるという形態が取られていた。この点では、中心メンバーの負担は大きかったと思われるが。

それに対して、「大手通」の取組では全く逆であった。目的が曖昧なまま中心となって活動すべきメンバーが大丈夫と言いつつ、苦しくなると役割分担と称して、他人任せにしていた。それでは任された方（主に力関係で弱い下級生）はたまったものではない。挙げ句の果てに、「まちの駅」のメンバーが乗り込んできて、それではまずいという

始末。「船頭多くして船山に上る」である。「まちの駅」のメンバーが悪いのではない。彼らは見るに見かねて手を出したのだ。それを言い訳にして、「大手通」の中心メンバーは手を引いていく。そんな繰り返しで「大手通」の取組にかかわるメンバーのやる気を失わせていったのである。

3.9.3 今年度の活動報告

3.9.3.1 確認された今年度の活動目的

今年度の取組の目的は、「ブロンズ像の原画を使い、大手通の魅力を学生が発信することで、多くの市民に大手通に興味を抱いてもらい、出会いの街・ながおかに貢献すること」である。そのために、①大手通の魅力を発信するために大手通の魅力発見、②ブロンズ像及び原画を媒体とした大手通の魅力発信企画の実行、をしようということになった。具体的には、以下の活動を行った。

- ① 大手通の概要と歴史の調査（文献、ホームページ調査）
- ② 大手通の方々の想いの紹介（文献調査、ヒアリング調査）
- ③ 大手通の魅力発見調査（学生による現地調査）
- ④ 「大手通ちびっ子探検ラリー」の実施（企画、イベント）
- ⑤ ブロンズ像の原画を活かした魅力発信
（カレンダー作成、原画から想像したストーリー作成、デスクトップの壁紙作成、携帯電話の待ち受け画面作成、ホームページでの公開）

3.9.3.2 今年度の活動内容

(1) 大手通の概要と歴史の調査

大手通の概要と歴史を、ホームページを中心にまとめた。このような作業は、本来、取組前に行うことであるが、12月に入ってからであった。

(2) 大手通の方々の想いの紹介

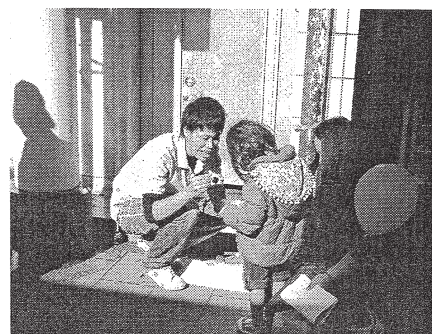
「ハイライフステージ出会いの街」のコンセプトを文献から調査した。あわせて、再度野本氏にヒアリングをすることによりブロンズ像の原画と大手通への想いをまとめ上げた。

(3) 大手通の魅力発見調査

学生が大手通に赴き、自分たちの印象を整理した。これによって、学生の大手通に対する意識が高まった。(1) から(3)は、取組直後にもできることであったが、学生間の意識の統一が無いと、このようなことをすること自体思いもよらなかったようである。

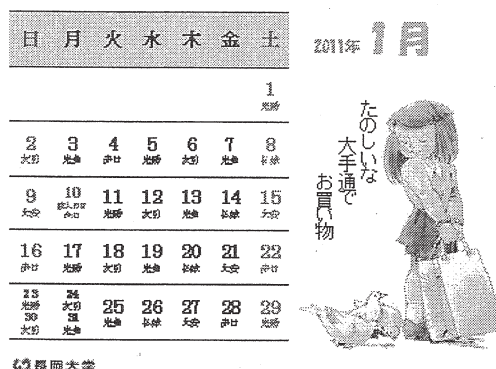
(4) 「大手通ちびっ子探検ラリー」の実施

大手通を会場としたクイズラリーで、対象者は小学生。小学生にブロンズ像や大手通のことを少しでも知ってもらえるようなクイズを出題した。また、この企画ではゼミ生ばかりでなく他のサークルからも協力をいただいた。



(5) ブロンズ像の原画を活かした魅力発信

カレンダー作成、原画から想像したストーリー作成、デスクトップの壁紙作成、携帯電話の待ち受け画面作成を行い、ホームページで公開した。また、ホームページ上にメールフォームを用意し、ストーリーを投稿してもらうなど、今後の活動への足がかりをつくることができたことも評価できる。



3.9.4 調査研究の発表

平成 23 年 2 月 19 日に、ホテルニューオータニ長岡「NCホール」で成果発表会を実施した（参加者は 230 名＝地域連携アドバイザー16 名、一般 90 名、本学教職員 33 名、学生 91 名）。

今年度は学生が非常に苦勞した分だけ、成果発表会に対しても真摯な姿勢になり、自分たちで全面的に下書きを作り、発表のチェックを求める形式を取ることが出来た。

3.9.5 報告書の印刷・公表

本報告書を作成し、印刷後、長岡市や関係機関、ヒアリング先、高校等に配布する。また、今年度の経験を、次年度のプログラム展開の参考資料としても利用する。

原画『ないしょ』

女の子：あのね実は・・・

男の子：な～に

女の子：なんでもないよ。アハハ

男の子：エへへ

3.10 企業の情報発信とホームページの役割

－大原鉄工所／小西鍍金ホームページの情報内容

(コンテンツ) 診断と改善提案－

ゼミナール担当教員 原田 誠司

平成 22 年度の原田ゼミナールの「企業の情報発信とホームページの役割－大原鉄工所／小西鍍金ホームページの情報内容 (コンテンツ) 診断と改善提案」プロジェクトの実施計画・状況は次の通りである。

3.10.1 取組のテーマ選び・・・第 1 段階 (平成 22 年 4 ～ 5 月段階)

まず、学生が取り組むテーマ選びを行った。

(1) 方針の説明

ゼミ担当教員・原田の方から、4月のゼミで、次の方針を学生に提示した。

- ・位置づけ・・・前年度 (平成 21 年度) の長岡産業活性化協会 N A Z E を対象に、かつ同協会と連携して実施した「機械系製造業をめぐる環境変化と企業の対応」プロジェクトの実績の上に立って、地域活性化プログラムとして、取り組む。
- ・目的・・・前年度と同様、実際のテーマを対象にして、提案することにより、調査研究の方法を学び、社会人基礎力の向上を図ることを目指す。
- ・取組テーマ・・・長岡市の地域活性化課題・テーマを検討してほしい。具体的には、長岡市総合計画「第 5 章第 3 節高品質・高付加価値を生み出す産業のまち」の課題解決、つまり、産業活性化への取組みとしたい。
- ・より具体的には、前年の N A Z E プロジェクトでヒアリングした大原鉄工所の大原社長から、大原鉄工所のホームページの改善調査ができないかとの問い合わせが来ている。

(2) テーマの検討・決定

- ・全体テーマ・・・「企業の情報発信とホームページの役割－大原鉄工所のホームページ改善提案」に取り組むこととした。
- ・具体的テーマ・・・ホームページ診断を情報内容＝コンテンツ、仕組み＝システムの 2 面から調査研究することとした。
- ・取組チーム・・・取組チームも、学生の応募をベースに、次に 2 チームで行うこととした。

①コンテンツ・チーム・・・原田ゼミナール 4 年生 ◎印＝責任者

◎野村祐彰、石丸祐貴、榎本啓樹、緒形康幸、鈴木茂樹、野村聡史

②システム・チーム・・・村山ゼミナール 3 年生 ◎印＝責任者

◎笛木香央里、池田敬一朗、菊池拓也、高野里奈、竹田隼人、山田亮

- ・連携アドバイザー・・・N A Z E 情報化コーディネーター：杉浦 聡氏に、本取組のアドバイザーをお願いした。N A Z E では、会員企業の情報発信力強化のための連携・課題解決事業として位置づけた。

3.10.2 調査研究計画・・・第2段階（平成22年6月段階）

第2段階として、調査研究計画を具体化した。

- ・調査対象企業・・・前期に大原鉄工所、後期に小西鍍金
 - *小西鍍金は秋の段階で、NAZEアドバイザーの杉浦氏と協議して決定した。
- ・取組の趣旨・目的・・・次の2点にある。企業が若者を採用するために好ましい情報発信＝ホームページのあり方、具体的には、掲載情報内容（コンテンツ）と使い勝手（システム）について、現状の評価・問題点をまとめ、改善課題を提案する。また、この調査研究を通して、学生の調査能力・社会人基礎力の向上を図る。
- ・調査研究スケジュール・・・大きくは、次の3段階で進めた。
 - ①**企業研究シートの作成**・・・大原鉄工所のホームページ等を調査し、「企業研究シート」に記入し、情報内容＝コンテンツを整理する。
 - *企業研究シートは原田誠司が授業等で活用するために作成した様式であり、企業活動の基本情報を記入するシートである。このシートは、若者の人材確保という観点から既存調査で作成・提案したくホームページ・コンテンツ診断チェックシート＞（経済産業省からの長岡大学受託調査『長岡地域若者キャリア育成事業報告書』平成19年3月長岡大学）の諸情報項目を改善したものでもある。項目や様式は本文報告書を参照されたい。
 - ②**企業診断シート・企業診断チャートの作成**・・・次の手順で、「企業診断シート」および「企業診断チャート」を作成する。
 - a 学生6名が作成した企業研究シートにもとづき各人が「企業診断シート」に評価（5、4、3、2、1の5段階評価）を記入する。
 - b 同診断シートの各人評価点を100点満点に換算し、各項目の平均値（6人の）を算出する。
 - c 同診断シートの各項目平均値をレーダーチャートに図示する。
 - ③**問題点等の整理とヒアリング**・・・以上の「企業研究シート」、「企業診断シート」および「企業診断チャート」を踏まえて、ホームページ内容の問題点等を整理し、調査対象企業にヒアリングを行う。
 - ④**改善提案**・・・ヒアリング結果を踏まえて、改善提案を行う。

3.10.3 調査の実施・・・第3段階（平成22年7月～9月）

以上の調査研究計画を踏まえて、次のように調査を実施した。

- ・企業研究シートの作成・・・7～8月
- ・企業診断シート／企業診断チャートの作成／問題点整理・・・9月
- ・大原鉄工所ヒアリング・・・9月

3.10.4 改善提案・・・第4段階（平成22年10月）

（株）大原鉄工所社長・大原興人氏に、原田、村山、杉浦3名でお会いし、改善提案を行った（10月）。

3.10.5 大原鉄工所のホームページ改善・・・第5段階（平成23年1月）

大原社長から、社内での検討を踏まえて、ホームページの改善を行ったとの連絡を、平成23年1月に受けた。

3.10.6 小西鍍金のホームページ改善提案活動

小西鍍金のホームページ改善活動は、上記の大原鉄工所の進め方と同様、次のように進めた。

- ・企業研究シートの作成・・・10～11月に実施
- ・企業診断シート／企業診断チャートの作成／問題点整理・・・11月に作成
- ・小西鍍金ヒアリング・・・12月に実施
- ・改善提案・・・(株)小西鍍金社長・小西統雄氏に、原田、村山、杉浦3名でお会いし、改善提案を行った（平成23年1月）。
- ・小西鍍金のホームページ改善・・・平成23年2月段階は提案の検討中である。

3.10.7 N A Z E 総会での報告

以上の大原鉄工所および小西鍍金のホームページ改善活動については、平成23年3月9日のN A Z E 総会で発表を行った。

なお、小西鍍金の調査等詳細については、平成23年度に行うこととなった。

3.11 『企業の情報発信とホームページの役割—システム診断—』（村山ゼミ）のケース

3.11.1 ステップ1：ゼミ公募・実課題設定・企画書作成

(1) ゼミ公募

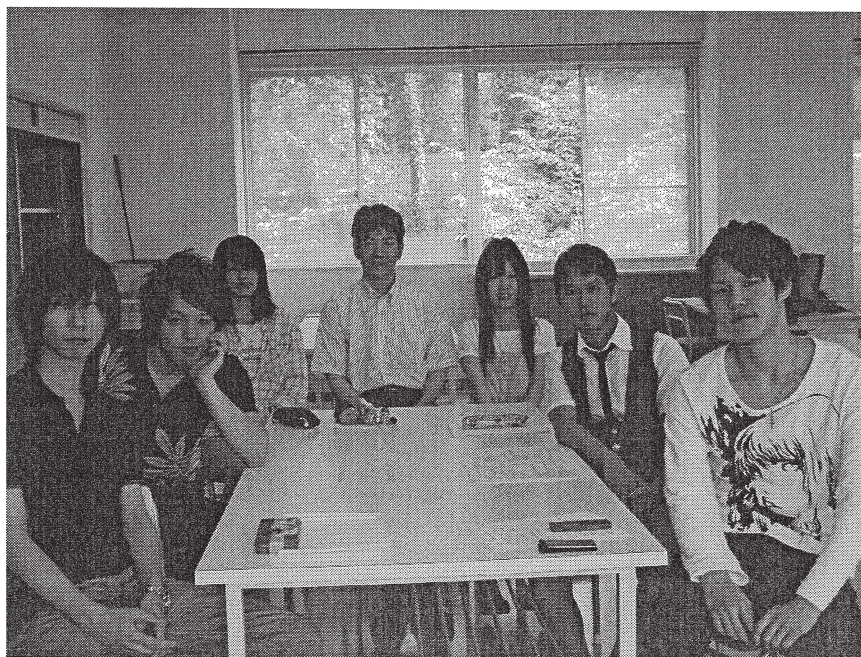
昨年度に行われた村山ゼミナールⅢの学生募集では、情報処理技術者試験「ITパスポート試験」の合格を目指した学習を中心とする事を学生に示していた。したがって、今年度の本ゼミナールに所属する3年生にとっては、「地域活性化プログラム」への参加および本研究テーマへの取り組みは想定していなかったことであった。

(2) ゼミで取り組む実課題の設定

新年度4月に入ってから、原田ゼミナールの4年生と共同でNPO法人長岡産業活性化協会NAZEと連携してNAZEの会員企業ホームページの改善に取り組めないだろうかという案が教員間で持ち上がった。そのため5月中旬のゼミでは、ゼミナールⅢの授業内容として当初目標としていた「ITパスポート試験」の合格を目指した学習活動に取り組むのか、それとも「地域活性化プログラム」に参加して本研究テーマに取り組んでいくのかについて、新3年生のゼミ生6名で話し合っ決めていくように指示した。

「地域活性化プログラム」への参加については、グループワーク、フィールドワーク、発表会への参加、報告書の作成などいろいろな活動が必要で忙しくなることを以前から先輩学生などに聞いていたようで、あまり積極的に参加したいという様子でもなかったが、ゼミ生での話し合いの結果、せっかくの良い機会でもあるので取り組んでみようという意見にまとまった。また、リーダーは笛木香央里、サブリーダーは竹田隼人に決まった。

このような経緯の中で、本研究への取り組みが具体的に始まったのは5月下旬以降となった。下の写真は今年度の村山ゼミナールⅢのメンバーで、左から、菊池拓也、竹田隼人、高野里奈、村山光博、笛木香央里、池田敬一朗、山田亮の7名である。



3.11.2 ステップ2：資料収集・分析

NAZEの会員企業のホームページに対する診断と改善提案を行うための準備として、その評価項目を検討する必要があった。平成19年3月に本学が発行した『長岡地域若者キャリア育成事業に関する指針』の中で、企業の人材募集を目的とした採用ホームページの評価を行うための「コンテンツ診断チェックシート」と「システム診断チェックシート」が提案されていたことから、まずはこの「システム診断チェックシート」をたたき台として評価項目の見直しを行うことで人材募集の目的に限定しない「企業ホームページのシステム診断チェックシート」を検討し、作成するようにゼミ生に指示を出した。

評価項目の見直しに向けた最初の作業として、既存の「システム診断チェックシート」を利用して各ゼミ生が普段よく見ている企業ホームページのうち3社ずつを診断してみることにした。それまでは何気なく見ているだけだったホームページを特定の評価項目に照らして採点しながら閲覧することで、今までとは違った視点からの見方を意識することになった。

次に、企業ホームページを実際に診断した結果から、既存の「システム診断チェックシート」の評価項目をどのように変えるべきかという改良案を各ゼミ生が持ち寄り、ディスカッションをしながらまとめた。リーダーとサブリーダーを中心に話し合いを進め、一つの改良案をまとめることができた。

3.11.3 ステップ3：システム診断と改善案の策定

(1) 株式会社大原鉄工所ホームページのシステム診断

6月には、作成した「企業ホームページのシステム診断チェックシート」を用いて実際に企業のホームページを診断し、改善案を策定する段階に入った。そのため、昨年度からNAZEの会員企業の強みや弱みをまとめる取り組みを行っていた原田ゼミの関係から、NAZEの情報化コーディネータの杉浦聡氏にご尽力をいただき、株式会社大原鉄工所（以降、大原鉄工所）に協力をお願いすることになった。

具体的な作業として、ゼミ生は作成したシステム診断チェックシートを用い、まずは各自で同社のホームページを閲覧しながら採点を行った。診断の過程で「優れている点」や「改善を期待する点」などがあった場合は別途メモをとっておくように指示した。全員の診断が終わった段階で診断結果を持ち寄り、発表し合うことで集計表にまとめた。同様に、「優れている点」、「改善を期待する点」についても集約をおこなった。

当然のことながら、ゼミ生はホームページの評価を行った経験などはこれまでに無く、「優れている点」や「改善を期待する点」などは意見として出にくいのではないかと考えていたが、各自いくつかの点を挙げてきており、ゼミ生間でも共通する点が多く見られた。

集計表およびレーダチャートに整理した診断結果と「優れている点」、「改善を期待する点」をまとめた結果は、原田ゼミのコンテンツ診断結果と合わせて大原鉄工所 代表取締役社長 大原興人氏に提出し、同社に出向いて説明をおこなった。

(2) 株式会社小西鍍金ホームページのシステム診断

今年度後期の取り組みとして NAZE の会員企業である株式会社小西鍍金（以降、小西鍍金）のホームページの診断を行うため、その協力のお願いとスケジュール確認などのため、

原田教授、杉浦氏、村山の3名が9月14日(火)に同社を訪問し、代表取締役社長 小西統雄氏と専務取締役 小西幸夫氏と打合せをおこなった。同社ホームページのシステム診断の実施に対して快くご了解いただき、後期からのゼミの活動として実施することが決まった。

12月7日(火)、原田ゼミ学生6名、村山ゼミ学生6名、原田教授、杉浦氏、地域活性化事務室 山田氏、村山の計16名で小西鍍金に出向き、工場見学とヒアリングを行った。参加したゼミ生にとって鍍金の技術は未知の世界でもあり、理解が難しかったのではないかとと思われるが、長岡には特徴的で高度な技術をもった企業があることを知る良い機会にもなったのではないかと考える。



同社ホームページのシステム診断は年が明けた1月から実施した。2社目ともなると、細かい指示を出さなくともゼミ生が主体的に作業を進める割合が多くなり、集計も担当者を決めるだけで任せられるようになっていた。「優れている点」、「改善を期待する点」の集約においても、挙げられた項目を「構成」、「デザイン」、「機能」の категорияで分類することがスムーズに行えるようになった。

3.11.4 ステップ4：調査研究報告書の作成

調査報告書の作成においては、まずはゼミ生に報告書執筆の役割分担を行った上で、各自が書いた原稿を村山に提出するように指示した。村山ゼミナールとしては地域活性化プログラムへの参加は今年度が最初であり、過去の先輩学生の残した報告書なども無い新規の取り組みであったことから、参考となる資料も乏しい中でゼミ生は執筆に時間がかかっていた様子であった。今回は3年生でもあり、報告書の作成と成果発表会の準備をほぼ同時に行う密な日程であったことから、最終的には各自から提出された原稿を村山がチェックしながら組み合わせて、全体を構成することにした。

3.11.5 ステップ5：調査研究の発表

11月20日(土)に行われた地域活性化プログラム中間発表会では、大原鉄工所のシステム診断結果と改善提案について発表を行った。中間発表時の役割分担については、ゼミ生の話し合いで決定し、リーダーが発表を担当することに決まった。発表原稿は主にサブリーダーが作成し、村山が修正をおこなった。発表練習を2回行った中で時間配分と言いや表現方法の見直しを行った。また、質疑応答に対応するためにあらかじめ想定される質問を考え、できれば答えを準備しておくようにとゼミ生に指示をした。

2月12日(土)に行われた「学生による地域活性化プログラム 平成22年度成果発表会」

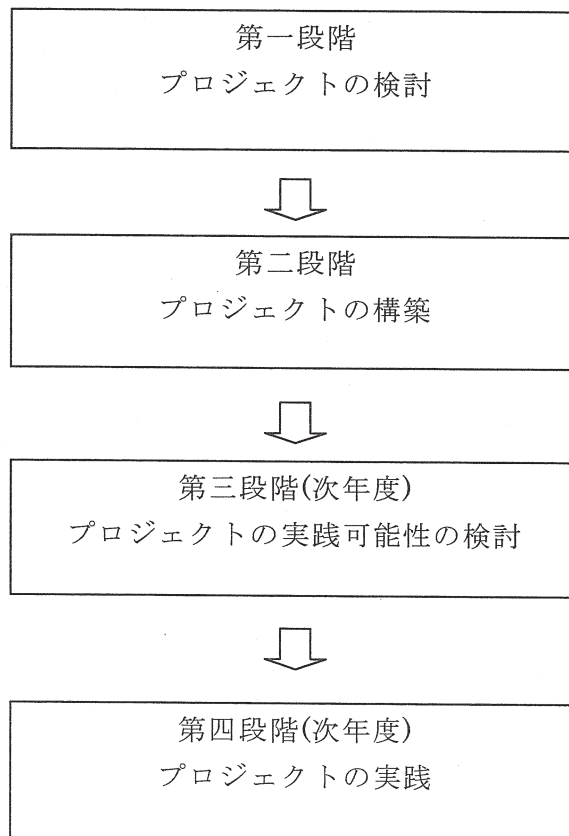
3.12 「中山間地における地域活性化の提案と実践」の研究手順とその経過

田 邊 正

一昨年度から当ゼミナールでは、「学生による地域活性化プログラム」に参加しており、「長岡市における特産品の東京市場販売計画ー長岡を売り込み首都圏と繋ぐー」というテーマで取組んでいた。しかし、販売戦略を構築してもバーチャルな域での提案で終わってしまい。実践に結び付かなければ、地域活性化も不可能ではないかと個人的に考えていた。

私自身が農業会計という分野にも興味があり、また、学長から中山間地の活性化についてゼミナールで研究をしてみたらどうかと打診されたので、ゼミナールの学生と検討して「中山間地における地域活性化の提案と実践」というテーマで研究することに決定した。ただ、私自身興味があるのは農業会計であり、農業に関する知識は皆無であったため、テーマを決定した時点から農業について個人的に勉強することになったことも確かである。

そこで、テーマから解るように、今回は提案をして実践可能か否かを判断して、実践可能であれば、実践に移したいと考えている。したがって、PDCA サイクルにもとづいて研究していきたい。よって、下記の研究手順によって進める予定である。



3.12.1 第一階段(プロジェクトの検討)

(1) プロジェクトの設定

当ゼミナールでは、ゼミ生全員が地域活性化プログラムに参加しているが、「長岡市に

おける特産品の東京市場販売計画「長岡を売り込み首都圏と繋ぐ」というテーマで取組んでいるゼミ生もおり、4年生のメンバー2名、3年生のメンバー2名が、このテーマで取組んで研究していた。したがって、残りのゼミ生6名は、「中山間地における地域活性化の提案と実践」というテーマで取組むことになった。しかし、どのようなプロジェクトを提案するのかという問題が生じてくる。

当初、安易にB級グルメの商品開発をすればどうかという意見が提案され、この案にゼミ生も同調し、B級グルメの商品開発という方向でプロジェクトが進んでいた。しかし、後述するが、八木雄大、笠原浩、彭佛兵が、(財)山の暮らし再生機構が主催するインターンシップに参加することで、大きく方向性が変わってくる。このインターンシップを切っ掛けに、「担い手育成プロジェクト」と「七つの恵み・農作祭りプロジェクト」が提案されることとなった。

(2) グループわけについて

当初、B級グルメの商品開発であったため、3年生の6名で取組む予定であった。しかし、インターンシップ後、渡部耕士が「担い手育成プロジェクト」を提案することになるが、一人でプロジェクトを構築していくには難しい。そこで、一緒にプロジェクトを構築してくれるパートナーとして松原唯介を私が選ぶことにした。まず、渡部耕士に選ぶ権利を与えたが、なかなか決めることができず、性格的におとなしい松原唯介を私が意図的に指名したのである。

これによって、八木雄大、稲井正人、渡辺翔太、東條昌美の4名が、「七つの恵み・農作祭りプロジェクト」のメンバーとなった。

ちなみに、これらのプロジェクトは二年間を予定しており、4年時に仕上げた報告書が卒業論文となる。しかし、本格的に実践することになれば、その後のプロジェクトを次の学年が引継ぐことになる。

(3) 中山間地の研究

まず、中山間地について知らなければならないということで、中山間地について文献とウェブで資料収集をさせた。そして、これらの資料にもとづいて、文章にまとめさせることにした。それぞれの学生に分担させてまとめさせたのだが、真面目に取り組んでまとめ上げてくる学生もいれば、いい加減にまとめてくる学生もおり、これは性格的なものか温度差なのか今一つ判断できない側面があった。ただ、中山間地を調査するうえで、学生が知らなかった中山間地の問題が、徐々に見えてきたことは確かである。

また、六月に、(財)山の暮らし再生機構の佐々木康彦氏から小国地域七日町のインターンシップへの参加の話しを頂いた。これを切っ掛けに、中山間地としての対象が漠然なものから小国地域七日町へとシフトしていった。

七日町の特産品について調査をした結果、銀杏が特産品の一つであるということがわかった。しかし、この銀杏を利用してB級グルメを商品化することは難しい。これ以外に、B級グルメとしてあがったものが、七日町の山菜等を利用した山菜 Pasta であった。さらに、具を様々な素材にした新感覚の笹団子という提案もあった。インターンシップ参加以前、山菜 Pasta か新感覚の笹団子をB級グルメとして商品開発しようと考えていたのである。

(4) 七日町インターンシップ

(財)山の暮らし再生機構の佐々木康彦氏から小国地域七日町のインターンシップへの参加の話しを頂いた後、ゼミナールで佐々木康彦氏にインターンシップについて説明をして頂いた。このインターンシップは、中山間地を知るためには有意義なイベントであると考え、当ゼミナールではゼミ合宿もないことから、ゼミ合宿の代わりとして、ゼミ生全員でインターンシップに参加することを提案した。しかし、日程上、大学側のインターンシップが重なるということから数人が参加できないとの旨を伝えてきた。そして、二人の学生が個人的に参加したくないと伝えてきた。理由として、参加費の5,000円が支払うことができなということと単に気が向かないという理由であった。このことから、インターンシップへ当ゼミナールでは一切参加しないということにした。

しかし、中山間地について学生が認識しておかなければ、プロジェクトは進まないことは確かである。そこで、他のゼミ生には何も伝えずに、積極的に参加したいと言っていた4年生の笠原浩と彭佛兵、3年生の八木雄大にインターンシップへの参加をお願いした。

平成22年8月17日に、磯野武氏宅に民泊して、三人はインターンシップに参加することとなった。このインターンシップの目的は、七日町の現状を知ることと農作業を体験することが目的で、ネギ植え及び山登り、他大学生との交流等と彼らにとっては有意義なものとなったようである。また、彼らにとって得たものは体験だけではなく、中山間地である七日町がどのような現状かを認識することもできた。若者が殆ど町にいないということと住民の高齢化が進んでいるということである。このことは、どこの中山間地も抱えている担い手の問題へと繋がっていく。すなわち、農業に従事する後継ぎがないのである。この深刻な問題を八木雄大がゼミナールの学生に知らせることで、プロジェクトの方向性は大きく変わっていく。

3.12.2 第二段階(プロジェクトの構築)

(1) プロジェクトの変更

当初、七日町の特産品を利用したB級グルメの商品開発であったが、夏季休暇終了後、八木雄大がゼミナールでインターンシップに参加した感想をゼミ生に報告したところ、プロジェクトの方向性は大きく変化していった。七日町にとって本当に必要なことは、七日町の良さを長岡市民に認識してもらうことと担い手の問題の解消である。

そこで、再度、プロジェクトを検討し直すことになった。こちらからヒントを与えながら、各自意見を出し合っていた。私の地元の友人が熊本県商工連合会に勤務しており、山形県新庄市の「新庄100円商店街」を模倣して宇城市で成功しているということも学生に伝えてみた。これにもとづいて提案されたのが、「七つの恵み・農作祭りプロジェクト」であった。このネーミングは八木雄大が決定した。

一方、「担い手育成プロジェクト」については、渡部耕士が提案することとなった。これは渡部耕士が個人的にニート及びフリーター等の若年層無職者に興味があったことによる。

この提案によって、二つのプロジェクトを構築することになるのだが、それぞれメンバーが必要になる。まず、「担い手育成プロジェクト」は、渡部耕士と私が指名した松原唯介がメンバーとなった。そして、「七つの恵み・農作祭りプロジェクト」は、八木雄大、稲井正人、渡辺翔太、東條昌美がメンバーとなった。

(2) プロジェクトの構築

まず、「担い手育成プロジェクト」については、担い手を育成するというプロジェクトだが、提案当初から若年層無職者を対象としたプロジェクトと渡部耕士の意見で決まっていた。そこで、ニート及びフリーター等の若年層無職者の現状について文献及びウェブで調査研究させた。これにもとづいて、プロジェクトを構築することになるが、まとめ上げたものが今一つのできであった。そこで、ゼミナールの時間にゼミ生全員で検討した結果が報告書に記載した「担い手育成プロジェクト」の詳細である。

次に、「七つの恵み・農作祭りプロジェクト」については、まず、「新庄 100 円商店街」について文献及びウェブで調査研究させた。そして、どのようにして野菜等の生産物が流通しているのかを調べさせた。このように、基礎的な知識を踏襲したうえで、プロジェクトを構築していった。一応、ゼミナールの時間にゼミ生全員で検討して、それをまとめ上げることとなった。ただ、七日町で余っている野菜等の生産物を学生が代わりに販売するプロジェクトであるから、最終的には学生にやる気があるか否かの問題に尽きることになる。

3.12.3 第三段階及び第四段階(プロジェクトの実践可能性の検討と実践)

(1) 来年度の予定①(中山間地への訪問)

ゼミ生全員が中山間地を知る必要がある。文献及びウェブによって、どのようなものが中山間地かという漠然とした知識はあるが、実際に足を運んだ学生は、インターンシップに参加した八木雄大だけなのである。他の学生も中山間地に足を運ばなければ、これらのプロジェクトは実践されない。そこで、来年度は、ゴールデンウィークを利用してゼミ生全員で七日町に伺いたいと考えている。これによって、より充実したプロジェクトになることを期待している。

(2) 来年度の予定②(七日町でのプロジェクト報告会)

「学生による地域活性化プログラム」の目的は、提案だけではなく実践することにもウエイトを置いている。今年度のプロジェクトは提案だけで終わっているため、これらのプロジェクトが実践可能か否かを判断する必要があると考えられる。したがって、七日町でのプロジェクト報告会を開催する予定である。インターンシップに八木雄大が参加した際、七日町には担い手がないという深刻な問題があり、その打開策を検討しているわけだが、なかなか大人の意見では打開策が出てこないというのである。この問題の打開策をインターンシップに参加した大学生たちに求めていた状況である。よって、「担い手育成プロジェクト」と「七つの恵み・農作祭りプロジェクト」は、七日町の問題の打開策となりうる可能性がある。そこで、七日町の住民と一緒に、これらのプロジェクトを検討し、実践可能と判断したならば実践に移していきたい。

まとめ

ゼミナールでテーマを「中山間地における地域活性化の提案と実践」と決定した当初から、ゼミ生間では、かなり温度差があったようである。課題を与えれば、まとめ上げてくるのだが、出来れば作業をしたくないという状況であった。夏期休暇終了後、「担い手育成プロジェクト」は渡部耕士と松原唯介、「七つの恵み・農作祭りプロジェクト」は八木雄大、

稲井正人、渡辺翔太、東條昌美というメンバーに分かれるわけだが、渡部耕士と松原唯介は作業を分担して上手い具合に作業を進めていった。一方、八木雄大、稲井正人、渡辺翔太、東條昌美については温度差がみられ、与えられた作業はやってくるが、それ以外については全くやらないメンバーもあり、ゼミナールの時間以外に話し合いをしても、アルバイト等を理由に話し合いに出席しないメンバーもいた。

成果発表会と報告書の作成締切りが近づくとつれて、学生もあせって作業をやり始めることになったが、よい成果発表会にしようという考えはあまり見られなかった。したがって、内容的にもよいプレゼンテーションではなかったことは学生たちも自覚しているようである。

成果発表会后、ゼミ室で参加できるものだけを集めて反省会をしたが、他のグループの発表と比較して、劣っていたこと及び準備不足であったことに対して悔しかったらしく、来年度はしっかりしたものを作り上げようと誓った。

ただ、3年間、ゼミ生を見ていて思うことは、後輩が先輩の背中をみて育っていくということが常々感じられる。今年度の4年生が3年生の手本になったとは言い難い。したがって、4年生の杜撰さが3年生に影響を及ぼしたといえる。来年度も新しい7名のゼミ生が入ってくる予定である。今年度の3年生が手本になるように頑張ってもらい、大きく成長していくことを期待している。そして、七日町のプロジェクト報告会を成功させてもらいたい。

第4章 本取組における学生教育の評価

地域活性化プログラムにおける学生教育の目標は、

- ① 社会人基礎力（アクション力、シンキング力、チームワーク力）を向上させること
- ② ビジネス展開能力（企画・提案力・実行力）を向上させること
- ③ 専門的技法に関するスキルを向上させること

である。

4.1 社会人基礎力の評価

社会人基礎力が伸びたかどうかについては、学生に「社会人基礎力診断シート（学生用）アンケート」（参考資料5）を実施した。また、プログラム推進協議会の構成員であるゼミ担当教員には、同様の「社会人基礎力診断シート（教員用）アンケート」（参考資料6）を実施した。

アンケートは、取組に参加した学生一人一人を対象に、社会人基礎力の変化を評価する形で実施した。したがって、学生は自己評価（有効回収数89）であり、教員は各ゼミ学生についての評価である。

(1) アクション力の評価

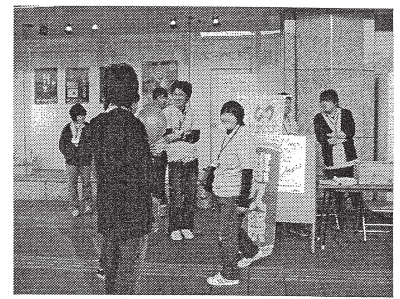
アクション力に関する指標は、[主体性]、[働きかけ力]、[実行力]である。

①主体性

取組に「1. 進んで取り組んだ」と答えている学生は40.4%で、教員評価では45.3%となっている。学生と教員の評価を比較すると、5ポイントほど教員の方が高くなっている。

Q1. [主体性] あなた（この学生）は、進んで取り組みましたか。

	1. 進んで取り組んだ	2. あまり進んで取り組めなかった	3. 取り組みなかった	合計
学生	36	50	3	89
教員	43	44	8	95
学生	40.4%	56.2%	3.4%	100.0%
教員	45.3%	46.3%	8.4%	100.0%



②働きかけ力

取組の実施にあたって他の人に積極的に働きかけたかどうかについては、「1. 積極的に働きかけた」と回答している学生が27.0%で、教員が35.8%となっている。学生と教員の評価を比較すると、9ポイントほど教員の方が高くなっている。「2. あまり働きかけられなかった」と回答している学生は57.3%で、教員の評価では48.4%となっている。

〔働きかけ力〕は、〔主体性〕や〔実行力〕に比較して「1. 積極的に働きかけた」学生がやや少なく、まじめで、こつこつと取組には参加するが、リーダーシップを発揮できる学生が少ない結果となっている。

Q2. 〔働きかけ力〕あなたは、取組の実施にあたって他の人に働きかけましたか。

	1. 積極的に働きかけた	2. あまり働きかけられなかった	3. ほとんど働きかけなかった	合計
学生	24	51	14	89
教員	34	46	15	95
学生	27.0%	57.3%	15.7%	100.0%
教員	35.8%	48.4%	15.8%	100.0%

③実行力

取組にあたって確実に実行できたかどうかについては、「1. 確実に実行できた」と回答している学生が47.3%で、教員が53.7%と、この設問でも教員の評価の方が7ポイントほど高くなっている。「2. あまり実行できなかった」と回答している学生は48.3%で、教員の評価では34.7%となっている。第3章の事例集からも分かるように、取組の過程で学生はつまずきながら進んでいるので、評価が厳しくなっている可能性がある。

Q3. 〔実行力〕あなたは、取組を確実に実行できましたか。

	1. 確実に実行できた	2. あまり実行できなかった	3. ほとんど実行できなかった	合計
学生	42	43	4	89
教員	51	33	11	95
学生	47.2%	48.3%	4.5%	100.0%
教員	53.7%	34.7%	11.6%	100.0%

④アクション力

取組前と比較して、アクション力が「1. 上昇した」と回答している学生は51.7%で、教員は55.8%とアクション力の総合評価でも上昇した学生が多いことが分かる。

個別の評価項目よりも「1. 上昇した」と回答している割合が高くなっており、総合的には成長を実感しているものと思われる。

Q4. 取組前と比較して、アクション力は、上昇したと思いますか。

	1. 上昇した	2. あまり上昇しなかった	3. ほとんど変化がなかった	合計
学生	46	31	12	89
教員	53	31	11	95
学生	51.7%	34.8%	13.5%	100.0%
教員	55.8%	32.6%	11.6%	100.0%

(2) シンキング力の評価

シンキング力に関する評価項目は、[課題発見力]、[計画力]、[創造力]である。

①課題発見力

課題を「1.明らかにできた」と回答している学生は42.7%であった。教員評価では38.9%となっている。この項目については教員評価の方が低い結果となっている。学生は苦勞して活動を行ったということから、それが課題であったと感じている可能性がある。

Q 5. [課題発見力] あなたは、課題を明らかにできましたか。

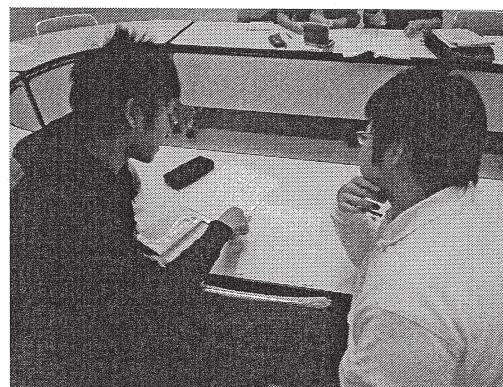
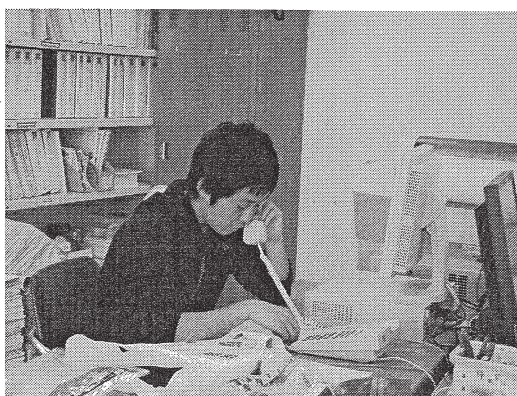
	1. 明らかにできた	2. あまり明らかにできなかった	3. ほとんど明らかにできなかった	合計
学生	38	47	4	89
教員	37	48	10	95
学生	42.7%	52.8%	4.5%	100.0%
教員	38.9%	50.5%	10.5%	100.0%

②計画力

課題解決の準備については、「1.準備できた」と回答している学生が36.0%で、教員評価では37.9%となっている。本学の学生の場合、言われたことはやるが、自分から進んで計画し実行する力が弱い傾向がある。この傾向は本学のみならず、今の若者の特徴でもあると思われるが、次の指標の[創造力]同様、自分自身で考える能力の訓練が望まれる。

Q 6. [計画力] あなたは、課題解決の準備ができましたか。

	1. 準備できた	2. あまり準備できなかった	3. ほとんど準備できなかった	合計
学生	32	51	6	89
教員	36	47	12	95
学生	36.0%	57.3%	6.7%	100.0%
教員	37.9%	49.5%	12.6%	100.0%



③創造力

新しいアイデアを出せたかという質問に対して、「1. 十分出せた」と回答している学生の割合は25.8%で低い結果となっている。それに対して、教員側の評価では、40.0%の学生が「1. 十分出せた」という結果になっている。取組検討段階で、実際には多くの学生がいくつかのアイデアを出せているが、実行に移そうという段になって臆してしまう面が見られる。この点は、昨年度も見られた傾向であり、自分が出しているアイデアをなかなか実行に移せないことが影響しているように思われる。

Q7. [創造力] あなたは、新しいアイデアを出せましたか。

	1. 十分出せた	2. あまり出せなかった	3. ほとんど出せなかった	合計
学生	23	56	10	89
教員	38	47	10	95
学生	25.8%	62.9%	11.2%	100.0%
教員	40.0%	49.5%	10.5%	100.0%

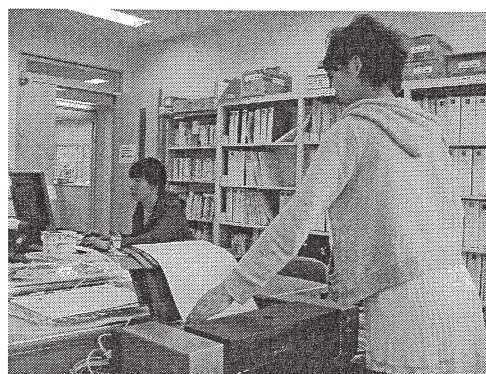
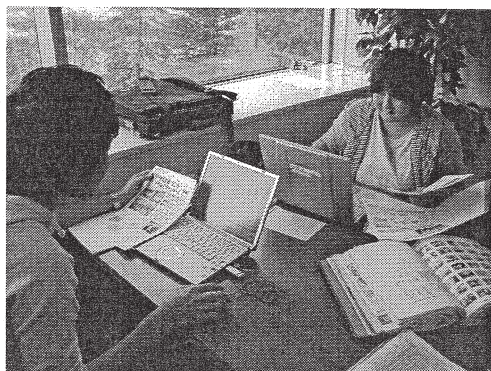
④シンキング力

取組前と比較してシンキング力が向上したかどうかについては、「1. 上昇した」と回答している学生は47.2%で、参加学生全体の半数近くが、シンキング力が上昇したと考えている。教員評価では56.8%となっている。「3. ほとんど変化がなかった」と回答している学生は14.6%で、教員評価では12.6%である。

この結果から、本取組は個人の感じ方もあるが、少なくともプラスに働いていると思われる。「アクション力」同様、「シンキング力」でも総合評価では成長がみられている。

Q8. 取組前と比較して、シンキング力（課題発見力、計画力、創造力）は、上昇したと思いますか。

	1. 上昇した	2. あまり上昇しなかった	3. ほとんど変化がなかった	合計
学生	42	34	13	89
教員	54	29	12	95
学生	47.2%	38.2%	14.6%	100.0%
教員	56.8%	30.5%	12.6%	100.0%



(3) チームワーク力の評価

チームワーク力に関する指標は、[発信力]、[傾聴力]、[柔軟性]、[状況把握力]、[規律性]、[ストレスコントロール力]である。

①発信力

自分の意見を相手に伝えられたかどうかについて、「1. 十分伝えられた」と回答している学生の割合は42.7%で、教員評価では38.9%となっており、教員評価の方が若干ではあるが低くなっている。

活動の打ち合わせ等は学生のみで行っている場合もあり、そういう席では発言をしている可能性もある。

Q 9. [発信力] あなたは、自分の意見を相手に伝えられましたか。

	1. 十分伝えられた	2. あまり伝えられなかった	3. ほとんど伝えられなかった	合計
学生	38	46	5	89
教員	37	47	11	95
学生	42.7%	51.7%	5.6%	100.0%
教員	38.9%	49.5%	11.6%	100.0%

②傾聴力

相手の意見を聞いたかどうかの傾聴力については、「1. 十分聞いた」と回答している学生の割合は69.7%で、教員評価では70.5%と非常に高くなっている。取組の継続により、共通の話題性をもてるようになってきていることが、一部の教員から報告されている。一方で、「2. あまり聞けなかった」、「3. ほとんど聞けなかった」学生が約3割いるわけで、これらの学生をどのように取組に参加させていくかも、基本的な課題として残っている。

Q 10. [傾聴力] あなたは、相手の意見を聞けましたか。

	1. 十分聞いた	2. あまり聞けなかった	3. ほとんど聞けなかった	合計
学生	62	26	1	89
教員	67	24	4	95
学生	69.7%	29.2%	1.1%	100.0%
教員	70.5%	25.3%	4.2%	100.0%

③柔軟性

意見の違いなどを理解したかどうかについては、「1. 十分理解した」と回答している学生の割合が66.3%、教員評価では69.5%となっている。

取組の継続により活発な意見交換がなされているゼミも多く、その結果が学生の自己評価の向上につながっているものと思われる。

Q 11. [柔軟性] あなたは、意見の違いなどを理解しましたか。

	1. 十分理解した	2. あまり理解しなかった	3. ほとんど理解しなかった	合計
学生	59	27	3	89
教員	66	25	4	95
学生	66.3%	30.3%	3.4%	100.0%
教員	69.5%	26.3%	4.2%	100.0%

④ 状況把握力

周囲の人や物事との関係をよく理解したかという質問に対しては、「1. 十分理解した」と回答している学生の割合は43.8%で、教員評価では40.0%となっている。

また、「2. 一定に理解した」を加えると、学生の自己評価では93.3%が、教員評価では88.4%となっている。ここでも、取組の継続により、学生の活動への意識向上が見られる。

Q 12. [状況把握力] あなたは、周囲の人や物事との関係を良く理解しましたか。

	1. 十分理解した	2. 一定に理解した	3. ほとんど理解しなかった	合計
学生	39	44	6	89
教員	38	46	11	95
学生	43.8%	49.4%	6.7%	100.0%
教員	40.0%	48.4%	11.6%	100.0%

⑤ 規律性

ルールや約束を守ったかどうかについては、「1. 守った」と回答している学生の割合が77.5%で、教員評価では62.1%となっている。この点についても取組の進め方が影響しているものと思われる。繰り返しになるが、取組の継続により、学生同士の話し合い（学生自身によるサブゼミ）も多く実施されていた。

Q 13. [規律性] あなたは、ルールや約束を守りましたか。

	1. 守った	2. あまり守れなかった	合計
学生	69	20	89
教員	59	36	95
学生	77.5%	22.5%	100.0%
教員	62.1%	37.9%	100.0%

⑥ストレスコントロール力

ストレスをうまく解消できたかという質問に対して「1. うまく解消できた」と回答している学生の割合は55.1%で、教員評価の63.2%を8ポイントほど下回っている。取組において多くの学生は悩みながら活動しているので、それを克服できなかったと感じているようである。

Q 14. [ストレスコントロール力] あなたは、ストレスをうまく解消できましたか。

	1. うまく解消できた	2. あまり解消できなかった	合計
学生	49	40	89
教員	60	35	95
学生	55.1%	44.9%	100.0%
教員	63.2%	36.8%	100.0%

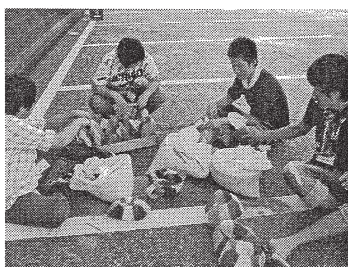
⑦チームワーク力

取組前と比較して、チームワーク力が上昇したかどうかについては、学生の55.1%が「1. 上昇した」と回答している。教員評価では62.1%となっており、それなりにチームワーク力は上昇したと考えられる。

学生が中心となって活動をすればするほど、ある意味では学生同士がぶつかることもあり、単なる仲良しグループというわけにはいなくなるので、評価が難しいところでもあろう。

Q 15. 取組前と比較して、チームワーク力は、上昇したと思いますか。

	1. 上昇した	2. あまり上昇しなかった	3. ほとんど変化がなかった	合計
学生	49	27	13	89
教員	59	25	11	95
学生	55.1%	30.3%	14.6%	100.0%
教員	62.1%	26.3%	11.6%	100.0%



(4) 3つの社会人基礎力の比較

以上3つの社会人基礎力の評価結果を図示すると、次のとおりである。

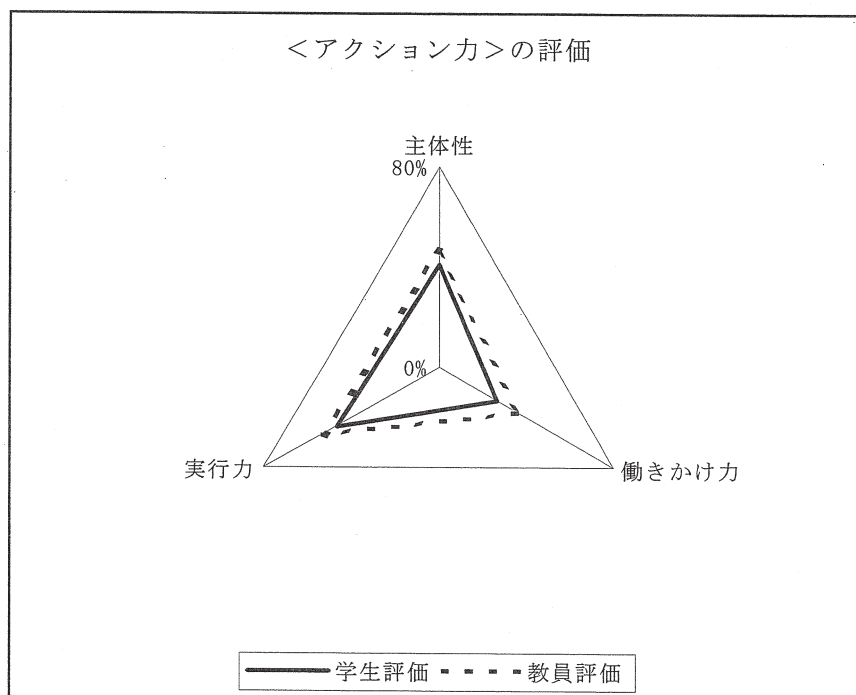
①アクション力

アクション力では、働きかけ力の評価が、学生、教員ともに低くなっている。

アクション力の3つの指標を比較すると、やはり言われたことはするが、主体性は弱く、働きかける力はそれ以上に弱いという結果となっている。今後どうやって積極性をつけさせていくかが課題として残っている。

＜アクション力＞の評価

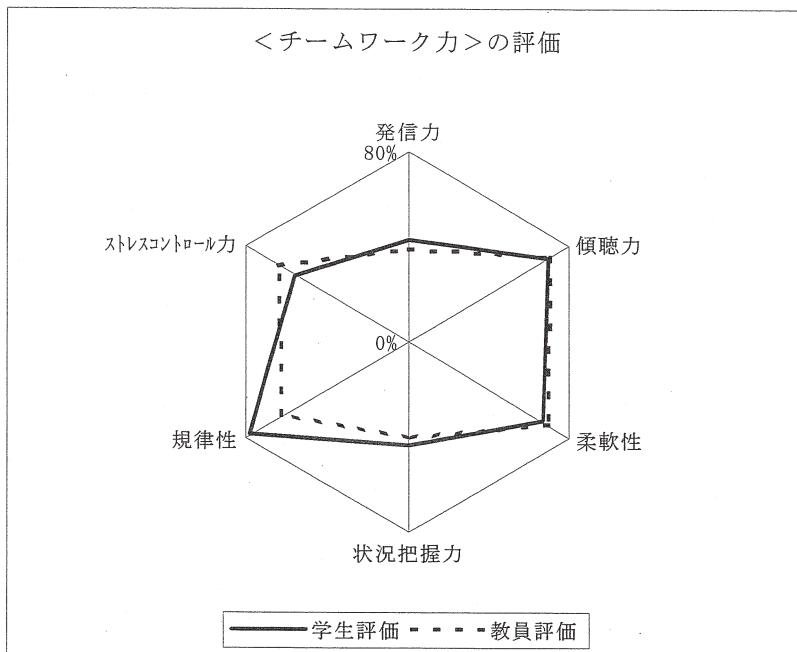
		学生評価	教員評価
主体性	進んで取り組んだ学生の割合	40.4%	45.3%
働きかけ力	積極的に働きかけた学生の割合	27.0%	35.8%
実行力	確実に実行できた学生の割合	47.2%	53.7%



②シンキング力

学生の自己評価の場合、課題は見つけれられたが、自分で計画して課題に立ち向かい、課題解決ができた学生は残念ながら少ないということになる。とりわけ、学生の自己評価では創造力が著しく低くなっている。これに対して、教員評価では必ずしも低くはない。学生の場合、自己評価では絶対評価に近い可能性があるが、教員の場合、この取組にまだ参加していない1、2年生や取組に参加していないゼミの3、4年も見ているわけで、総合的（相対的に）に判断すれば、評価が高いことになっていると思われる。

学生が自己評価で厳しい評価をしていることは、その学生にとって成長への原動力になるものと思われる。

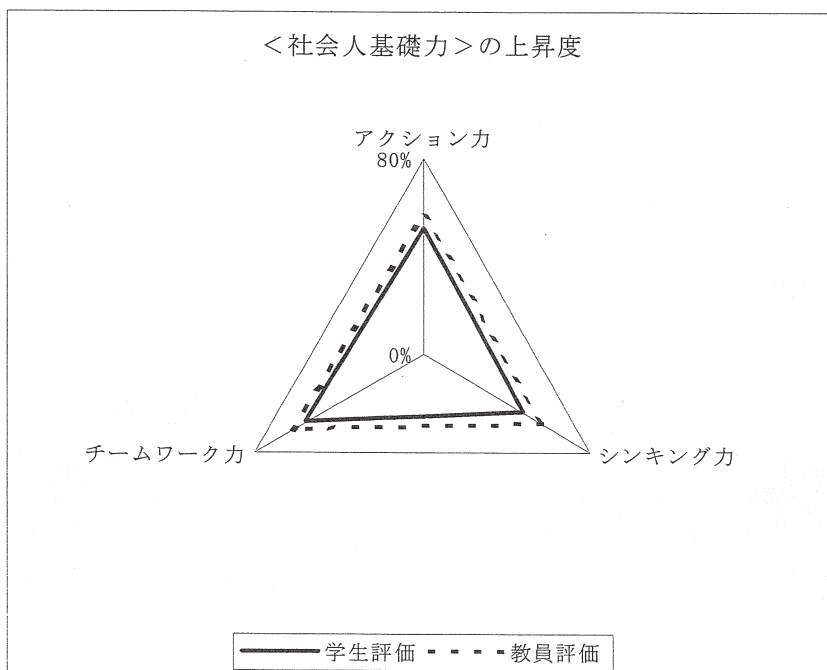


④ 社会人基礎力の上昇度

3つの社会人基礎力の上昇度（取組前と取組後の比較）は、学生の自己評価ではシンキング力が低いですが、教員評価ではどの基礎力も6割前後の学生が上昇したと回答している。この数値が高いか低いかは評価が分かれるところであろうが、プログラムとしては一応の成功がみられるのではなかろうか。

＜社会人基礎力＞の上昇度

		学生評価	教員評価
アクション力	上昇した学生の割合	51.7%	55.8%
シンキング力	上昇した学生の割合	47.2%	56.8%
チームワーク力	上昇した学生の割合	55.1%	62.1%



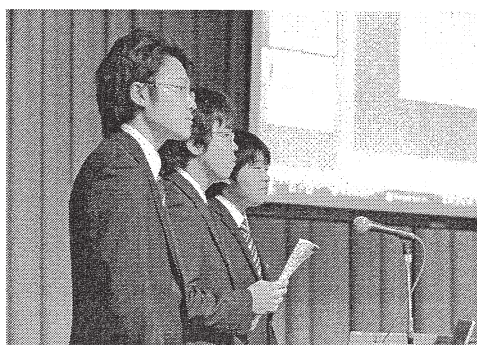
4.2 ビジネス展開能力の評価

ビジネス展開能力（企画、提案）については、『成果発表会』において、参加者（地域連携アドバイザー、一般参加者、本学学生、本学教職員）に対して、「地域活性化プログラム成果発表会意見シート（参考資料7）」にて、取組の評価等をいただいた。

意見シートは、参加者 230 名に対して、162 名回収できた。回収率は 70.4%である。当日は以下の 12 取組の発表がなされた。

<取組ゼミとテーマ>

ゼミ名	テ　　マ
菊池いづみ ゼミ	長岡地域の在宅介護の現状と課題 — 一家族介護者の負担を軽減するために—
田邊 正 ゼミ	長岡市における特産品の東京市場販売計画
高橋 治道 ゼミ	地域コミュニティ活性化による豊かで安全・安心な暮らしを考える
広田 秀樹 ゼミ	グラスルーツグローバリゼーション (草の根・地域からの地球一体化推進)
山川 智子 ゼミ	長岡周辺地域における健康管理と予防医療の現状
原田 誠司 ゼミ	環境・リサイクル問題への取り組み
鯉江 康正 ゼミ	楽しもう！越後長岡「まちの駅」
吉盛 一郎 ゼミ	佐潟・福島潟・鳥屋野潟の地域との関わりと湿地の賢明な利用について
鯉江 康正 ゼミ	「出会いの街・ながおか」大手通活性化プロジェクト
原田 誠司 ゼミ	企業の情報発信とホームページの役割（コンテンツ診断）
村山 光博 ゼミ	企業の情報発信とホームページの役割（システム診断）
田邊 正 ゼミ	中山間地における地域活性化の提案と実践



(1) 取組テーマ（タイトル）と内容の合致

取組テーマ（タイトル）と内容の合致については、「1. 合致していた」との回答が全体で81.7%であった。活動を進めるなかで活動の範囲や方向性が変わった取組もあったようであるが、タイトルは非常に重要であり、この点は担当教員が指導していくことが望まれる。

Q1 取組テーマ（タイトル）と内容は合致しておりましたか。

		1. 合致していた	2. あまり合致していなかった	3. 合致していなかった	小計	無回答	合計
実数	アドバイザー	97	20	2	119	25	144
	一般参加者	416	121	9	546	162	708
	本学学生	698	95	9	802	86	888
	本学教職員	146	43	4	193	11	204
	合計	1,357	279	24	1,660	284	1,944
構成比 (%)	アドバイザー	81.5	16.8	1.7	100.0		
	一般参加者	76.2	22.2	1.6	100.0		
	本学学生	87.0	11.8	1.1	100.0		
	本学教職員	75.6	22.3	2.1	100.0		
	合計	81.7	16.8	1.4	100.0		

(2) 取組に対する参加者の興味

各取組への興味については、「1. 興味がある」という回答は、全体で66.2%であった。興味を持てるかどうかは、扱う内容によるが、地域の課題を解決することを目的とした取組である以上、無意味な取組は無いわけで、この設問自体意味がないかもしれない。ただし、本学学生の興味の度合いが低いことは問題であろう。学生がこれから社会に出て行く上で、多くの事柄に興味を持つことを期待したい。

Q2 この取組に興味がありましたか。

		1. 興味がある	2. どちらかといえば、興味がない	小計	無回答	合計
実数	アドバイザー	97	23	120	24	144
	一般参加者	404	144	548	160	708
	本学学生	456	345	801	87	888
	本学教職員	145	50	195	9	204
	合計	1,102	562	1,664	280	1,944
構成比 (%)	アドバイザー	80.8	19.2	100.0		
	一般参加者	73.7	26.3	100.0		
	本学学生	56.9	43.1	100.0		
	本学教職員	74.4	25.6	100.0		
	合計	66.2	33.8	100.0		

(3) 発表の仕方

発表については、「1. 非常に優れていた」が15.7%、「2. 優れていた」が54.5%で、この評価はかなり厳しいものではあるが、多くの学生が、壇上で一般市民をも含めた方々の前での発表は初めての経験であり、一応の評価はできるものと思われる。

プログラムも地域活性化GPの取組から通算すると4年目であり、学生の間には何とかなるだろうという雰囲気が感じられないこともない。自分たちの一年間の活動成果を発表することによって、地域貢献をしていくということを指導していく必要がある。

Q3 発表の仕方はどう感じましたか。

		1. 非常に優れていた	2. 優れていた	3. やや問題あり	4. 問題外	小計	無回答	合計
実数	アドバイザー	21	52	41	3	117	27	144
	一般参加者	71	296	163	16	546	162	708
	本学学生	143	479	170	10	802	86	888
	本学教職員	26	78	84	7	195	9	204
	合計	261	905	458	36	1,660	284	1,944
構成比 (%)	アドバイザー	17.9	44.4	35.0	2.6	100.0		
	一般参加者	13.0	54.2	29.9	2.9	100.0		
	本学学生	17.8	59.7	21.2	1.2	100.0		
	本学教職員	13.3	40.0	43.1	3.6	100.0		
	合計	15.7	54.5	27.6	2.2	100.0		

(4) 取組の評価

取組の評価については、「1. 非常に素晴らしい」が15.5%であった。また、「2. 素晴らしい」まで加えると76.6%でそれなりに取組が評価されていることがわかる。本学学生についてみると両者の合計は80.1%であり、興味を聞いた質問よりも23ポイントも増加している。この結果からも、シンポジウム等への参加機会や学生間の交流機会を増やしていくことが、学生の興味を引き起こし、社会人基礎力を向上させたり、ビジネス展開能力を養成するために必要であると思われる。

Q4 学生の取組としてどのように評価できますか。感想をお聞かせください。

		1. 非常に素晴らしい	2. 素晴らしい	3. やや物足りない	4. 大学生のレベルに達していない	小計	無回答	合計
実数	アドバイザー	30	61	25	0	116	28	144
	一般参加者	58	350	124	3	535	173	708
	本学学生	143	501	153	7	804	84	888
	本学教職員	24	93	71	1	189	15	204
	合計	255	1,005	373	11	1,644	300	1,944
構成比 (%)	アドバイザー	25.9	52.6	21.6	0.0	100.0		
	一般参加者	10.8	65.4	23.2	0.6	100.0		
	本学学生	17.8	62.3	19.0	0.9	100.0		
	本学教職員	12.7	49.2	37.6	0.5	100.0		
	合計	15.5	61.1	22.7	0.7	100.0		

4.3 専門的技法等の評価

専門的技法や取組の進め方、成果については、「第3章 取組の進め方に関する事例集」および「第Ⅱ部 学生による活動報告」を参照されたい。

第5章 取組結果のまとめ

平成22年度長岡大学「学生による地域活性化プログラム」のまとめとして、取組成果と今後の課題、各取組の概要を整理しておく。なお、各取組の詳細な内容は「第Ⅱ部 学生による活動報告」を参照されたい。

5.1 取組成果と今後の課題

本プログラムは学生の社会人基礎力、企画・提案力の開発と地域活性化への貢献を目指すものである。ここで本年度の成果と今後の課題を簡単にまとめておく。

- ①取組に熱心に参加した学生については、社会人基礎力のうち、アクション力とチームワーク力はかなり向上したと思われる。また、シンキング力については、その成長度合いが他の2つの「力」よりも低かったものの、提案（地域活性化GPの主たる目的）から実際の活動にウエイトを変えたことにより、自分たちで考えて行動する力の成長は数値以上にみられた。
- ②専門的技法の活用能力についても、活動の中心となっている学生は真剣で成長がみられたが、基礎調査や情報処理が苦手な学生もおり、彼らをどのようにして取組に積極的に参加させ能力アップを図っていくかの方策の検討が必要であろう。
- ③地域活性化への貢献については、アンケートやヒアリングの実施、地域イベントへの参加、ボランティア活動への参加を通して、かなり満足のいく結果が得られていると感じている。また、今年度の成果としては、取組4年目のゼミも多く、学生が調査の仕方をかなり身につけてきている点があげられる。しかしながら、非常に積極的に地域に入り込み活動していく学生がいる一方で、自主性という点についてはまだまだ足りない面も見られる学生がいることは事実である。大学である以上、4年生は卒業していくことになるので、3年生が次の3年生にどう活動を伝えていくかが重要なポイントになると思われる。
- ⑤一部のゼミでは次年度の活動について議論を始めており、実際に街へ出て活動しようという機運も見られる。次年度以降も学内予算で取組が継続されるため、地域社会からの応援をお願いしたい。1年間お世話になった皆様、ありがとうございました。今後とも、ご指導、ご鞭撻のほど、よろしく願い申し上げます。

5.2 取組結果の概要

以下、本年度の取組結果の概要をパネルで紹介して、第I部のまとめとしたい。

ゼミ名	テ　　マ
菊池いづみ ゼミ	長岡地域の在宅介護の現状と課題 — 一家族介護者の負担を軽減するために—
田邊 正 ゼミ	長岡市における特産品の東京市場販売計画
高橋 治道 ゼミ	地域コミュニティ活性化による豊かで安全・安心な暮らしを考える
広田 秀樹 ゼミ	グラスルーツグローバリゼーション (草の根・地域からの地球一体化推進)
山川 智子 ゼミ	長岡周辺地域における健康管理と予防医療の現状
原田 誠司 ゼミ	環境・リサイクル問題への取り組み
鯉江 康正 ゼミ	楽しもう！越後長岡「まちの駅」
吉盛 一郎 ゼミ	佐潟・福島潟・鳥屋野潟の地域との関わりと湿地の賢明な利用について
鯉江 康正 ゼミ	「出会いの街・ながおか」大手通活性化プロジェクト
原田 誠司 ゼミ	企業の情報発信とホームページの役割（コンテンツ診断）
村山 光博 ゼミ	企業の情報発信とホームページの役割（システム診断）
田邊 正 ゼミ	中山間地における地域活性化の提案と実践

平成 22年度 活動報告

長岡地域の在宅介護の現状と課題
— 家族介護者の負担を軽減するために —



ゼミ教員

菊池 いづみ 准教授

ゼミ学生名

4年生：小野 治佳 木村 亮太 糞 珊 近藤 隆太 佐藤 こす恵 佐野 篤 戸成 昭人
3年生：石月 美沙世 小出 祐也 齋藤 優穂 佐久間 瑞樹 高野 広大 角田 美佳 古川 輝明
三浦 茜 宗村 芳成

取組みの目的

介護保険制度によるサービス利用が進んだとはいえ、家族介護の担っている役割は大きい。要介護状態となっても住み慣れた地域社会で自立した生活を送るために、在宅介護はどうあるべきか。家族介護者へのヒアリング調査によって、在宅介護を継続するうえでの困難を明らかにし、介護負担の軽減策を探る。

研究の意義

若者世代ができることは何かという視点で、学生自らが地域福祉推進の主体として取り組み、実践に結びつく提案をする。

主な分析結果

質問項目ごとの分析結果

(1)在宅による介護を引き受けるまで：介護のきっかけとして、以前できていたことができなくなる。要介護者が在宅での介護を希望している。介護者も自分かみよと思う(長男としての責任感など)。あるいは、自分しかいない。(2)日常生活とサービス利用の現状：介護のために離職や、仕事との両立に支障がある。調査対象者全員が、デイサービスを利用。ショートステイの利用は要介護者が不安感を抱き、難しいことも。施設介護との間で迷っている。(3)介護による負担と幸せ：悩みを打ち明ける仲間、相談相手が必要。わずかな時間に気分転換を図る。旅行などでリフレッシュする(しかし、心配しながら)。家族からの援助が心強い。要介護者の言動(見送ってくれたりする)に幸せを感じる。同時に、やらなければ、という気持ちをもって介護を続ける。(4)在宅介護で学んだこと、伝えたいこと：学んだこと一人一人ことではないと感じる。周囲の人に、いい影響がある。伝えたいこと使用できるサービスや制度をフルに使って一人介護をしない。要介護者のプライバシーを尊重する。施設や制度と個人との折り合いをつける。

介護者のパターン別の分析結果

(1)複数介護Aさん：元々の介護者であった母が倒れたため引き継ぐ。離職して内職に。大変なところはヘルパーさんに担ってもらう。食事の仕度をシルバーサービスに考えながら、人を増やしたくない。病院などの移動の際に負担を感じている。嫁さん先協力がない。Aさんの在宅介護は成り立たない。(2)別居介護Bさん：自宅から長岡まで、長距離移動のため、負担を感じている。特に冬の雪道は危険も付きまとうため負担は大きい。また、移動の際にかかる費用も大きな負担となっている。自宅からは、インターネットの監視カメラを通して安否確認。(3)息子介護Cさん：長男で同居しているの介護をしている。働きながら介護をしていることが大きな負担となっている。介護の悩みや相談は、会社の同じような仲間にして。ストレスをためないようにしている。周りの人の状況も見ながら、施設介護も考える。強い口調や大きい声を使わないように心掛けている。(4)老老介護Dさん：子供が近くにおらず、要を介護。身近に相談できる相手がない。孤立した介護。下の世話が思うようにいかない。自身の健康状態にも不安があるため、施設入居に対しては抵抗が少ない。しかし、適当な施設がみつからない。



支援策の提案

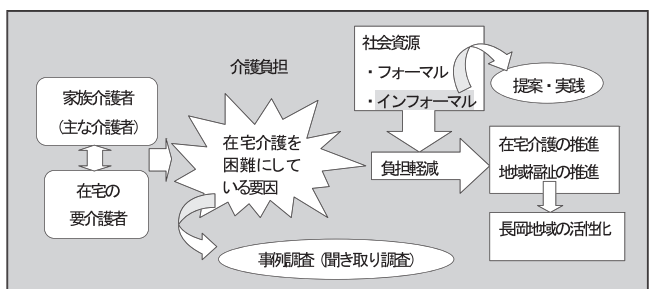
— 家族介護者の負担を軽減するために —

- 介護者に対する直接の支援：悩みを話せる場所、介護者の交流、リフレッシュの機会、介護教室の開催、介護者の体調管理、情報提供、張り合いとなるもの
- 仕事と介護の両立支援：育児介護休業制度の整備、企業による支援策、柔軟な働き方、所得保障(離職の際の生活費の補填・遠距離介護に対する交通費の補助)
- サービスの充実・サービスと協働：夜間のサービス、病院の付き添い(車いすを乗せられる福祉車両など)、使いやすい生活援助(食事用意、薬をもらいに行く、留守番ほか)、本人の意思の尊重(住み慣れた地域で、自立した生活を送りたいという気持ちを尊重)、趣味を生かせるデイサービスのレクリエーション、施設の整備
- 社会に対する働きかけ：社会規範(長男が介護・介護は家族)の見直し誰がどう介護するかの話し合い、住環境整備(バリアフリー)、認知症介護に対する取り組みの促進(人びとの理解と見守りのネットワーク・認知症特効薬の開発)、若者の介護参加

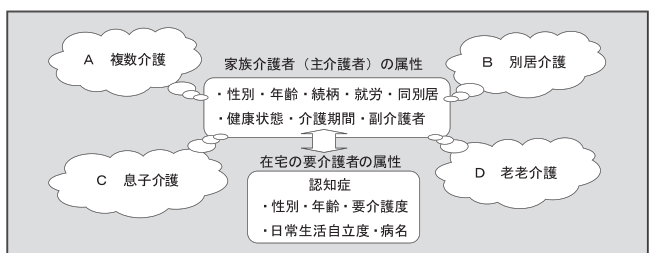
若者世代ができること

訪問・見守り・話し相手・安否確認・生活援助
(料理・掃除・洗濯・買い物・留守番)

研究の枠組みと方法



調査の枠組み



調査の概要

調査方法：半構造化インタビュー

調査実施と対象者の基本属性

事例	A 複数介護	B 別居介護	C 息子介護	D 老老介護
調査年月日	8月23日(月)	9月18日(土)	9月25日(土)	9月22日(火)
調査者	佐野(戸成・小出)	石月・古川・宗村	齋藤・佐久間・高野	角田・三浦(近藤)

項目	A 複数介護	B 別居介護	C 息子介護	D 老老介護
性別	女性	男性	男性	男性
年齢	55歳	58歳	61歳	94歳
続柄	次女	長男	長男	夫
就労	パート	小学校教諭	なし	なし
居住	別居(近距離)	別居(遠距離)	同居	同居
健康状態	足に障害あり	心臓病持ち	健康	健康(耳が遠い程度)
介護期間	10年以上	9年	2年半	2年
副介護者	長男	次男	なし	なし
性別	男性	女性	男性	女性
年齢	99歳	88歳	83歳	89歳
要介護度	要介護5	要介護3	要介護3	要介護1
日常生活自立度	II	II	II	IIIa
認知症の病名		アルツハイマー型		アルツハイマー型



平成 22年度 活動報告

長岡市における特産品の東京市場販売計画
—長岡を売り込み首都圏とつなぐ—



■ゼミ教員
田邊 正 専任講師

■ゼミ学生名
4年生：笠原 浩 彭佛兵
3年生：斉藤 俊輔 坂井 良成

取組みの目的

口コミ又はマスメディアの利用によって、東京市場で地方の特産品が着目されることが多々ある。例えば、「宇都宮の餃子」、「富士宮焼そば」等と例をあげればきりが無い。そこで、長岡市の特産品をいかにして東京市場に売り込んでいくかという販売戦略モデルを構築することが取組みの目的である。

研究の意義

長岡市の特産品が関東圏で認知されることによって、特産品だけでなく長岡市も認知されることになる。このことが、長岡市へ興味をもってもらうことになり、最終的には地域活性化に繋がることになる。

取組みの内容

四年生は、昨年度より引き続きで小国和紙の販売戦略の構築を提案する。一方、三年生は、新潟ラーメンの販売戦略の構築を提案することにし、次年度は実践可能性について検討する。

第1グループ 小国和紙の販売戦略

- ・小国和紙の調査研究
- ・(有)小国和紙生産組合へのヒアリング
- ・小国和紙の販売戦略モデルの構築

第2グループ 新潟ラーメンの販売戦略

- ・ラーメン全般の調査研究
- ・新潟四大ラーメンの調査研究
- ・ラーメンの嗜好性についてのアンケート調査の実施



学生のアイデアによる
販売戦略モデル

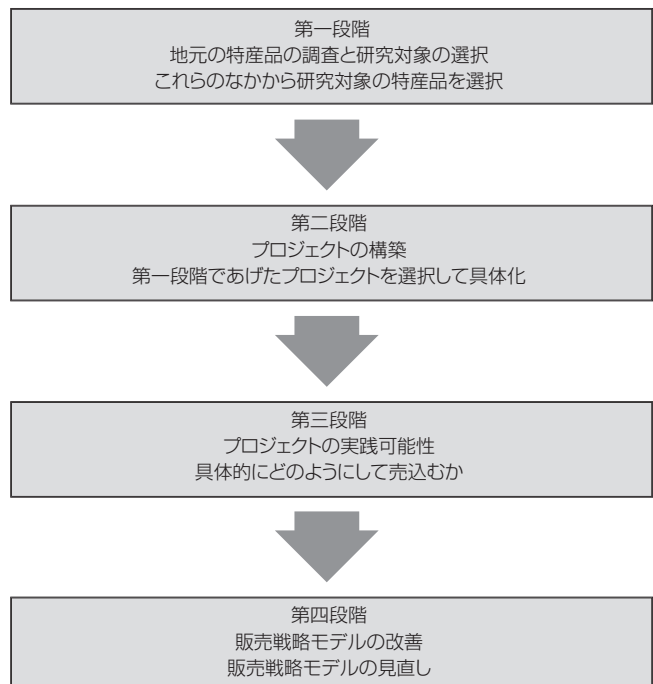
第1グループ 小国和紙の販売戦略

昨年度は、商品開発を中心に販売戦略モデルを構築していたが、今年度は、美術大学、芸術大学、デザイン系専門学校の学生に作品自体を発注し、この作品で個展を開催することで小国和紙を認知してもらうという販売戦略モデルに改善した。

第2グループ 新潟ラーメンの販売戦略

アンケート調査を実施したところ新潟ラーメンは関東で通用するという意見が圧倒的に多かった。このことから、新潟ラーメンを関東に売込むために、数店のラーメン店が組合を組織化し、関東に二週間ごとに看板を替えて順番に出店するという販売戦略モデルを構築した。次年度に、この販売戦略モデルが実践可能か否かをラーメン店主及び専門家を交えて検討する予定である。

研究の流れ目的



和紙の原材料



有名店と言われる所にも調査に行きました。

平成22年度 活動報告

地域コミュニティ活性化による
豊かで安全・安心な暮らしを考える



ゼミ教員
高橋 治道 教授

ゼミ学生名
4年生：齊藤 健二 中村 良胤
3年生：石田 美希 板垣 友祐 近藤 翔 梶谷 貴広 渡邊 尚史

取組みの目的

- ・地域コミュニティが中心となった「地域の安全・安心のあり方」を明らかにする。(4年生)
- ・歴史的建造物と耕作者の高齢化により耕作されないままになっている畑の課題解決を目指した地域コミュニティ活性化プランを策定し、提案する。(3年生)

研究の意義

地域コミュニティを中心とした安全・安心のあり方を明らかにするとともに、地域に残された歴史的建造物等の地域の資産を活用した地域コミュニティ活性化策を提示する。

主な分析結果

旧神谷信用組合の建物と畑の現地調査を行った結果、次のことが明らかになった。

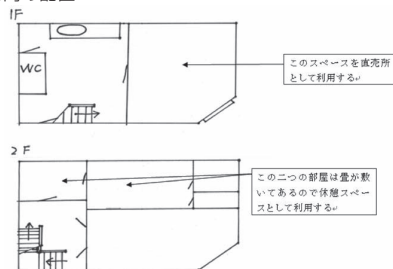
- ① 耕作者の高齢化により、畑の耕作を辞めたいと思っている人が多い。
- ② エコブーム等で都市の人には畑作希望がある。
- ③ お年寄りによる農業指導により、地域内外の人との交流、及びお年寄りの意欲向上が期待できる。
- ④ 建物が交通の便が良いところに位置している。さらに、駐車場も建物に隣接して確保できる。
- ⑤ 旧神谷信用組合の建物と畑の距離は 100mと近く、建物を活用するのに適している。



提案

旧神谷信用組合の建物の中に、休憩所と直売所の機能を持たせた「ニコニコ交流直売センター」を設置し、このセンターを仲介組織とした耕作困難畑の貸し出しと収穫物の直接販売システムを提案。

建物内の配置



研究の枠組みと方法

4年生と3年生がそれぞれ下記に示した研究に取り組むことにより、地域コミュニティ活性化による豊かで安全・安心な暮らしの仕組みを明らかにする。

◆4年生

神谷地区の住民が、①神谷地区の防犯、②住民同士のつながりと交流、③神谷地区の防災についてどのような意識を持っているかを明らかにし、地域コミュニティが主体となった地域の安全の仕組みを明らかにする。

◆3年生

神谷地区が平成21年に購入した歴史的建造物である「旧神谷信用組合」の建物を活用した地域活性化の仕組み考え、その仕組みの中で神谷が抱えている耕作困難な畑の課題も解決することとした。

調査の枠組み

◆地域コミュニティと地域の安全に関する神谷地区の住民意識の把握は、神谷地区の協力を得ての回覧板による全戸配布と郵送による回収としたアンケート調査を実施する。ついで、その調査結果を分析して地域コミュニティを主体とした地域の安全・安心の仕組みを考える。

◆旧神谷信用組合の建物と耕作困難な畑の現状の現地調査、および他地域における地域活性化の取り組みを調査し、その結果を基にして、歴史的建造物の活用と耕作困難な畑の問題を解決する仕組みを考える。

調査の概要

◆地域コミュニティや地域の安全に対する神谷地区の住民の意識を明らかにするために、「地域コミュニティに対する意識調査」を郵送による回収によって全戸(163戸)調査を実施した。アンケートの回収率は34%であった。

◆旧神谷信用組合の建物と耕作が困難な畑の現状を把握し、歴史的な建物を生かしつつ、神谷が抱える畑の問題を解決する提案を行うために、2回にわたる現地調査を行った。





平成 22年度 活動報告

グラスルーツグローバルイゼーション
—草の根・地域からの地球一体化推進—

■ゼミ教員
広田 秀樹 教授

■ゼミ学生名
4年生：ラブダンスレン=エルデネバド
3年生：王 慧 高橋 健幸 本間 圭 松永 貴幸

ゼミ生の問題意識

ゼミ生は、「草の根・地域からグローバルイゼーションを平和的に進め、その過程を地域活性化に役立てることはできないだろうか」という問題意識を持ち、活発なディスカッションを実施

コンセプトの考案

Grass-roots Globalization: グラスルーツグローバルイゼーション(草の根・地域からの地球一体化推進) というコンセプトを考案

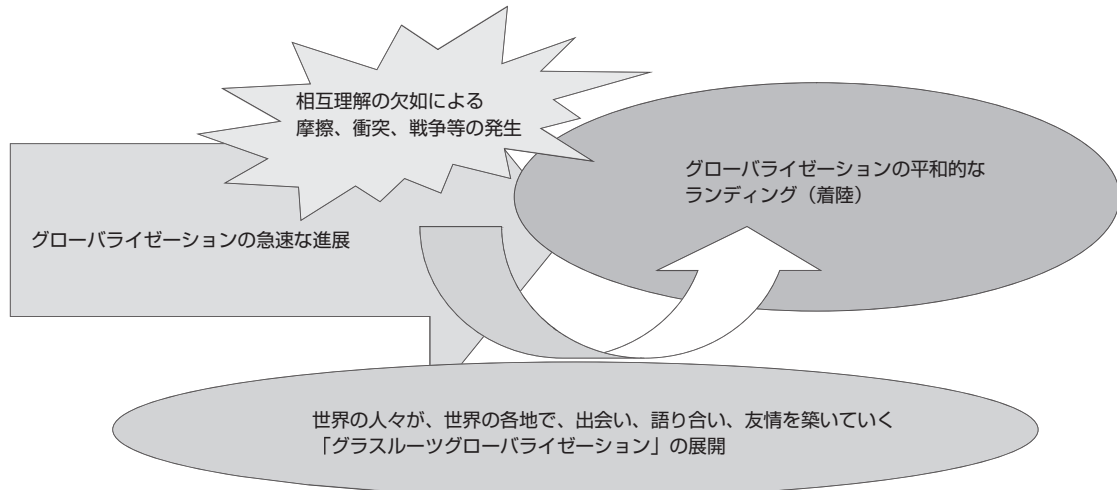
ゼミ生が考えたグラスルーツグローバルイゼーションの具体的活動

- 1) Study : グローバルイゼーションに関する学習
- 2) Invite : 外国人の方をゼミに招待し交流
- 3) Visit : 外国人の方が集まる場所等への訪問
- 4) Donate : 学園祭に出店し利益を世界に寄付

アメリカ人ビジネスパーソンのスコッティ=ジロッド氏をゼミに招待し、米国の経済状況、政治、社会、教育等について話を伺いました



—グラスルーツグローバルイゼーションの重要性—





平成22年度 活動報告

長岡周辺地域における 健康管理と予防医療の現状 ～「食育」と「運動」を中心とした取り組みについて～

ゼミ教員

山川 智子 准教授

ゼミ学生名

4年生：秋田 妃果里 草野 淳子 澁谷 省吾 高橋 祐也 毒島 美幸

保坂 俊樹 星野 緑 村山 新 矢和田 芳浩

3年生：磯部 将孝 猪飼 洋平 小林 康泰 酒井 舞乃 佐藤 咲子 高野 いづみ 番場 諒

取組みの目的

研究のモットーは「健康第一 みんなの幸せ」
以下の3点から「健康管理」と「予防医療」の取り組みに臨んだ。
1. 食育の推進などの「健康」への取り組みを調べる。
2. 運動の実施による「健康」への効果を調べる。
3. 健診の受診状況や「健康」への意識を調べる。

研究の意義

長岡市周辺における「食育」の浸透を調べ、地域の食文化を理解した。
「運動」について学内で実験を行い、ウォーキングの効用や集中力と運動能力の因果関係について検討をした。

主な分析結果

- 「食育」編：「愛してやまない（病まない）食育編」と改題
→長岡びったり 3.1.2 弁当普及の取り組みや近隣で市販している弁当とも比較検討をした。
- 「運動」編：「鍛えよう！連脳編」と「バイクとパズルの運動編」の2つに途中で分かれる。2つを合わせた取り組みとしてまとめた。
→それぞれウォーキングの効能や、心拍数と集中力との関係として試行錯誤を繰り返した。結果として、学内でのウォーキングコースの確立と、心拍数の変化による集中力の違いなどを実証した。
さらに、長岡大学の学生を対象として、2回に渡り、アンケート調査を実施した。結果を踏まえて、食生活の習慣と食育の浸透について考察した。



今後の課題・展望など

- 実際に自分たちでオリジナル「3・1・2弁当」を作って、コンテストに挑んでみたかった。学内でもっと3・1・2弁当を知ってもらいたいと感じた。
- ウォーキングコースを作成にする際に、屋外のコースも考案したかった。悠久山公園などをルートに加えると魅力的だっただろう。ウォーキングコースをマップ化するためには、コースの要所に表示を設けるのもいいと思う。例：「〇〇地点から〇〇地点まであと〇〇歩」
- コンビニ等の弁当比較で検討した内容を栄養学的な面からもう少し深く追究したかった。他地域の食育についても調査をしておきたかった。
- バイクの負荷を5段階(25, 50, 75, 100, 125)にして、各負荷10分間漕がせてからパズルをさせる実験をやってみたかった。「ランナーズハイ」との関係性も含めて、改めて検討をしたかった。

研究の枠組みと方法

- 愛してやまない（病まない）食育編
→各種の食育イベントへの参加、現状の把握と理解に努める。
1. 父の日企画『家族で守ろう パパの健康』（6月）
2. 食育PRイベント（10月）
3. 長岡農業まつり（10月）
4. 家族でおいしく3・1・2弁当料理教室（1月）
- 鍛えよう！連脳（うんのう）編
→学内において万歩計をつけて学内を歩き回り、10分で1,000歩が基準のウォーキングコースの模索をした。長岡大学の中を振り返る、いいきっかけとなった。
- バイクとパズルと運動編→文字通り、エアロバイクによる運動負荷を与えた後パズルを解くという実験方法を考えた。パズルを用いたことで楽しんで実験に取り組めた。

調査の枠組み

- 愛してやまない（病まない）食育編
→料理教室で、3.1.2 弁当を実際に作った。さらに長岡大学周辺で売られている弁当類について、主食、主菜、副菜などのチェックを行い、それぞれの特徴をまとめた。
- バイクとパズルと運動編
→被験者にエアロバイクを漕いでもらい、運動負荷を与えた後にパズルを解く作業を行う。心拍数をなるべく一定に保つように指示して、それぞれの場合でパズルを解く時間を測定した。（集中力の発揮で、パズルを解く時間が短縮できるという仮説から）

調査の概要

学生アンケートなどからも、食育の浸透には、まだまだ工夫の余地があると感じた。
食育イベントにせよ、ウォーキングマップなどの運動に関する事柄にせよ、周知をして関心を持ってもらうのは容易なことではない。取り組みをより充実させるだけではなく、周囲の人たちを巻き込んでその気にさせるのが大事と思った。



平成22年度 活動報告

環境・リサイクル問題への取り組み
—地域環境ネットワークの活動中心に—■ゼミ教員
原田 誠司 教授■ゼミ学生名
3年生：1名

取組みの目的

地球環境問題への取組は今や、全世界的に展開されている。この取組は、環境問題のなかでも日常の事業活動や生活に最も身近で、かつ重要な分野である<リサイクル>活動の具体的なあり方、方向を調査研究することをめざして行った。

研究の意義

長岡地域における地域循環ネットワークのリサイクル活動の仕組みを学び、他地域への拡大の方向を見つけること。学生にとっては、調査能力・社会人基礎力の向上に役立つ。

主な分析結果

- 地域循環ネットワークは市民の自発的リサイクル活動として始まったが、長岡地域における地域連携でNPOとして自立できた。
- 学校給食残さのリサイクル事業で、公的事業を民間で行う仕組みとして確立したことにより、同様の課題解決が迫られる地域の先進事例となった。
- そのことにより、環境大臣賞や農林水産大臣賞など多数の表彰を受けることができた。
- 地域循環ネットワークの活動は、給食残さ以外の環境問題解決の分野に拡大している（エコグリーン、里山整備等）。



提案等まとめ

提案というより、地域循環ネットワークのリサイクル活動の特徴と今後の方向性について、まとめておきたい。

- ①学校給食の調理残さの処理の仕組みを創ったこと・・・分別一回収一処理→リサイクル加工の仕組みを完成させ、企業と市民の協力と理解を得ることができた事はすばらしい。
- ②NPOが地域の問題解決のモデルを示したこと・・・工夫すれば、地域のいろいろな問題解決ができる。地域循環ネットワークは、他の環境問題への取り組みを広げている。
- ③NPOでも社会的な事業が可能（給食残さリサイクル事業は長岡市からの委託事業）・・・世界的に広がっている「ソーシャル・ビジネス」（社会的課題をビジネスにする手法で解決する）の先進的な事例といえる。ソーシャル・ビジネスを拡大してゆく先例になるのではないだろうか。

研究の枠組みと方法

次のような枠組みで調査研究を行った。

- ・対象となる事業……長岡地域において活動するNPO法人地域循環ネットワークの事業
- ・中心の対象事業……同ネットワークの中心の事業である<学校給食残さのリサイクル事業等>
- ・調査研究項目……同事業の目的、仕組み、意義を把握する。
- ・方法……同ネットワークへのヒアリング、さらには、取組学生自身が活動へのボランティア参加も行い、まとめる。

調査の枠組み

具体的には、次のように、調査研究を行った。

- ・地域循環ネットワークへのヒアリング……同ネットワーク・スタッフ（長谷川公亮氏）へのヒアリング（4回）を行った。
- ・学校給食残さ事業へのボランティア参加……学校給食残さ事業に実際に参加した（8月夏休み中4日間）。
- ・わりばしリサイクル事業への参加……わりばしリサイクル事業に参加した（2回）

調査の概要

- ・地域循環ネットワークは、1990年代半ばから市民の自発的リサイクル活動として始まり、学校給食残さリサイクル事業を確立した。
- ・給食残さリサイクル事業もわりばしリサイクル事業も、事業としての仕組みを地域においてしっかりと形成できたところに大きな特徴と将来性がある。

平成22年度 活動報告

楽しもう! 越後長岡「まちの駅」



ゼミ教員
鯉江 康正 教授

ゼミ学生名
4年生:石綿 真也 大井 拓朗 黒田 未奈子 小島 和幸 重野 友里 寺本 誉 山田 祐介 李 佩
3年生:今坂 麻美 大平 卓弥 小嶋 さやか 粉川 大樹 小林 薫 関根 絢也 竹内 祐輝
中嶋 真悠美 中山 佳之 南雲 涼

取組みの目的

取組の目的は、「まちの駅」の活動を通して地域活性化へ貢献することである。具体的には、以下の3点を達成することにある。
①学生が地域と関わり合いをもち、地域に入り込むこと。
②合併前の旧市町村の相互理解を深めるお手伝いをする事。
③ゼミ生全体の社会人基礎力向上を図ること。

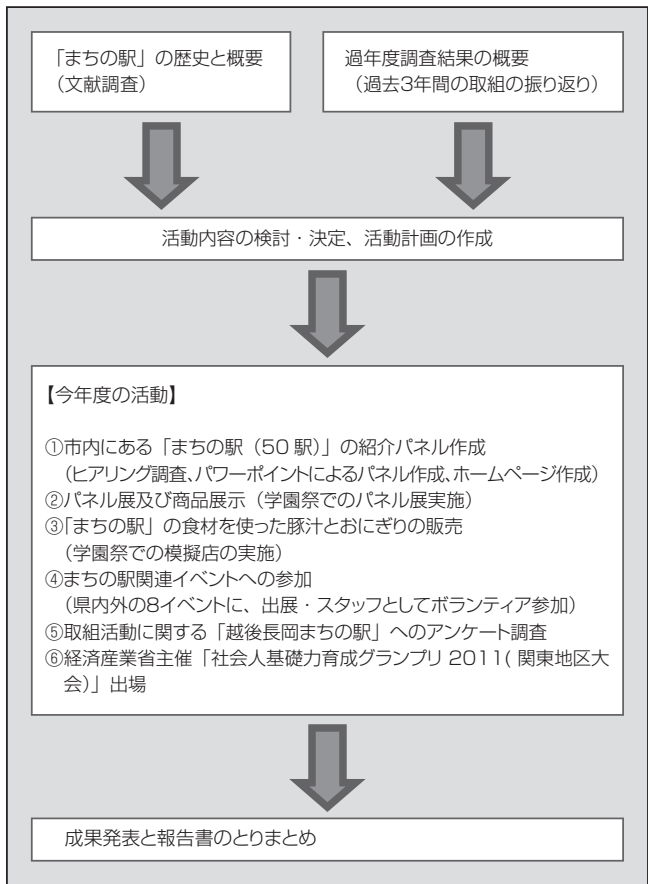


取組の成果

取組の成果は、『学生の成長』と『地域愛の醸成』にある。具体的には以下の点があげられる。

- ① 学生が地域と関わり合いをもち、地域に入り込むことにより、アクション力が大幅に向上した。50 駅へのヒアリングは並大抵のものではない。また、イベントに参加することにより、各自の役割を認識する力が向上した。50 駅を対象にヒアリング調査を実施したことにより、この取組の地域への認知度が大幅に向上した。
- ② 50 駅のパネルを作成し、それを紹介することで、合併前の旧市町村の相互理解を深めるお手伝いできたものと思われる。また、学生自身の「地域愛」を醸成することもできた。この点は社会人基礎力育成グランプリでも高く評価されている。
- ③ ヒアリング活動やホームページの作成、パネル作成によって学生の専門的技術が向上したことはもちろんであるが、活動の事後評価としてまちの駅へのアンケートを実施することにより、社会人基礎力の向上を実感できた。この点については、学生自身が「地域に向くこと、人とかかわることの楽しさを感じられるようになったことが成長である」と述べていることから伺える。

研究の枠組みと方法



平成 22年度 活動報告

佐潟・福島潟・鳥屋野潟の地域との関わりと
湿地の賢明な利用について



ゼミ教員
吉盛 一郎 教授

ゼミ学生名
4年生：青柳 貴大 猪股 瑞樹 川瀬 将司 後藤 学 酒井 隆史 反町 俊哉
田邊 洸介 中村 浩太郎 樋口 一樹 彭平胡 苺迪标

取組みの目的

新潟市には「潟」という地名が市内のあちこちに残されている。しかし、現存する「潟湖」は少なくなっているが、そこには、希少なオオヒシクイや多くのコハクチョウ、カモなどが生息できる自然環境がある。本研究では、「佐潟」、「福島潟」と「鳥屋野潟」で現地調査を行って、いかに地域の人々が守り、関わってきたかを考察する。

研究の意義

「佐潟」はラムサール条約登録湿地である。ラムサール条約は「湿地の生態系の保全」や「湿地を持続的に利用していくワイズユース（賢明な利用）」を基本理念としている。「湿地の保全」と「ワイズユース」とこれらを支える「交流・学習」について理解を深める。

主な分析結果

・ラムサール条約の登録条件は、①湿地が国際的重要性の評価があること、②国内法による湿地保全の担保（国の鳥獣保護区の指定）があること、③地元市町村の賛同が得られることの3点である。
・「福島潟」と「鳥屋野潟」は、①と②の条件を満たしているが、③の地元の賛同がない。



・「佐潟」は、1996年3月にラムサール条約に登録されて、環境省、新潟市、地域の人々の保護管理が十分にある。他方「福島潟」は新潟市と地域の有志の人（NPO法人など）の保護管理では永久的なものではなく、また、「鳥屋野潟」は、新潟市が管理しているが、地域との結びつきは弱いため、保護管理が十分とはなっていない。



・新潟市内にある「佐潟」・「福島潟」・「鳥屋野潟」は、多くの野鳥と植物の生息地である。

・「福島潟」と「鳥屋野潟」も国際的に重要な湿地であるので、地域の人々が賛同して登録湿地として申請すべきである。



提案

・湿地は、さまざまな生き物の生育・生息地として重要であり、また私たちの貴重な資源である。ラムサール条約は国際協力によって、湿地の保全とワイズユース（賢明な利用）を進めていくことを目的としており、またその手段として、交流・学習・普及啓発を重視している。
・登録湿地のメリットは、学校教育、地域の生涯学習、レクリエーションや観光の対象として活用される。

研究の枠組みと方法

・水鳥を保護する「ラムサール条約」についてまず文献研究する。1971年イランのラムサール（都市名）で、「特に水鳥の生息地として国際的に重要な湿地に関する条約」が締結された。



・基本理念である「湿地の生態系の保全」や「湿地を持続的に利用していく（ワイズユース）」について調べる。



・「佐潟」・「福島潟」・「鳥屋野潟」でフィールドワークして、ラムサール条約の基本理念が実践されているか調査する。

調査の枠組み

・ゼミ生を4班に分ける。「ラムサール条約」班、「佐潟」班、「福島潟」班、「鳥屋野潟」班と各班が分担して調査する。

・「ラムサール条約」班は、ゼミ生全員にラムサール条約の概要を説明する。全員がラムサール条約の理念を理解した上で、「佐潟」は登録湿地であるので、理念通りに実践されているか考察し、「福島潟」と「鳥屋野潟」では、「ワイズユース」が実践されているか、また条約登録湿地になるための条件を考える。

調査の概要

・「ワイズユース（賢明な利用）」とは、「将来にわたり、湿地を失うことなく利用していくこと」をいう。
・「佐潟」では、ヨシ利用（堆肥、燃料）、採取（蓮根・菱・鯉・鮒）、憩い、観察会や環境教育などで賢明な利用が実践されている。
・「保全」については「潟普請の復活」や「ヨシ刈り出し」等がある。



平成22年度 活動報告

「出会いの街・ながおか」
大手通活性化プロジェクト



ゼミ教員
鯉江 康正 教授

ゼミ学生名
4年生：石綿 真也 大井 拓朗 黒田 未奈子 小島 和幸 重野 友里 寺本 誉 山田 祐介 李 佩
3年生：今坂 麻美 大平 卓弥 小嶋 さやか 粉川 大樹 小林 薫 関根 絢也 竹内 祐輝
中嶋 真悠美 中山 佳之 南雲 涼 石月 美沙世(菊池いづみゼミ)

取組みの目的

取組の目的は、「大手通にあるブロンズ像の原画を使い、大手通の魅力を学生が発信することで、市民の方々や周辺市町村の方々に大手通に興味を抱いてもらい出会いの街・ながおかに貢献すること」である。

日	月	火	水	木	金	土
		1	2	3	4	5
6	7	8	9	10	11	12
13	14	15	16	17	18	19
20	21	22	23	24	25	26
27	28					

2011年 2月

たのしな
お買い物
大手通で



取組の成果

取組の成果は、ブロンズ像とその原画という一つのものに着目して、大手通を考え、市民との双方での活性化を考える仕組みを作ることができたことである。また、学生の成長も成果の一つである。具体的には以下の点があげられる。

- ① この取組に関しては、「何を目的として、何をしていくのか」の議論に約半年を費やした。その中で、学生は他人を批判し、信頼関係を失っていったが、誰も助けてくれないこと、責任を全うしなければならないことを学び、その後の3ヶ月で飛躍的に進歩を遂げた。
- ② イベントやカレンダー、ストーリーづくりを通じて、大手通の方々とも交流を持てたことは大きい。
- ③ また、ホームページ上にメールフォームを用意し、ストーリーを投稿してもらうなど、今後の活動への足がかりをつくることもできたことも評価できる。

研究の枠組みと方法

(きっかけ)中越高校放送部の取組「街かど調査隊〜出会いの街、長岡から」→ブロンズ像の原画の魅力を活かしたい

・大手通の概要と歴史
・「ハイレイフステージ出会いの街」コンセプト調査
・モニュメントに込める想い(文献およびホームページによる調査、ヒアリング調査)

(活動内容のコンセプト)

・大手通の魅力を発信するために大手通の魅力発見。
・ブロンズ像及び原画を媒体とした大手通の魅力発信企画の実行。

【今年度の活動】

- ① 上記、文献調査とヒアリング調査をもとに、中心市街地の方々の大手通への想いを調査する。
- ② 大手通の魅力発見(学生による現地調査)
- ③ 「市民活動まつり」での「大手通ちびっ子探検ラリー」の実施(企画、イベント)
- ④ ブロンズ像の原画を活かした魅力発信(カレンダー作成、原画から想像したストーリー作成、デスクトップの壁紙作成、携帯電話の待ち受け画面作成、ホームページでの公開)

成果発表と報告書のとりまとめ



平成 22年度 活動報告
**企業の情報発信とホームページの役割
 —コンテンツ診断—**

ゼミ教員
 原田 誠司 教授

ゼミ学生名
 4年生：野村 祐彰 野村 聡史 緒方 康幸 鈴木 茂樹 石丸 祐貴 榎本 啓樹

取組みの目的

ホームページは企業の情報発信や取引にとって重要な役割を担っている。我々は、NAZE と連携して、NAZE 会員企業のホームページ、とくに情報内容（コンテンツ）を診断し、改善提案を行い、ホームページの改善を通して、診断企業の情報発信力の充実・強化に役立てていただくこととした。

研究の意義

この調査研究は、企業にとっては若者＝学生の目からみたホームページの改善方向がわかり、参加学生にとっては、この調査研究を通して、企業研究による調査能力や社会人基礎力の向上を図ることができる。

主な分析結果
<大原鉄工所>

- ① 会社概要—資産状況などと売上高・利益が未掲載。
- ② 沿革・理念・戦略—沿革は充分だが、経営理念は未掲載であり、戦略も明示的ではない。
- ③ 仕事環境—技術、営業など大きくくりで仕事は紹介されているが、人材育成制度などの情報が掲載されていない。

<小西鍍金>

- ① 会社概要—従業員数と売上高・利益が未掲載
- ② 仕事環境—人材育成・仕事環境などが未掲載
- ③ 採用情報—一般求人・新規月卒採用がほとんど未掲載


提案と改善
<大原鉄工所への改善提案と改善>

- A 改善提案・・・売上高・利益、経営理念・戦略のホームページへの掲載、事業概要と仕事環境・採用情報の充実を提案した。
- B 改善・・・大原鉄工所は、上記提案を受けて、売上高および社是・社訓・経営ビジョンを掲載し、事業概要と採用情報の充実を図りました。大いに感謝しています。

<小西鍍金への改善提案>

- A 改善提案・・・売上高・利益、経営理念・戦略のホームページへの掲載、仕事環境・採用情報の充実を提案した。事業概要については、非常に詳細で充実している。
- B 改善・・・現在、企業で検討中である。

研究の枠組みと方法

ホームページ診断は大きく、情報内容（コンテンツ）とシステム（機能）の2つに分けて評価した。コンテンツ診断は原田ゼミナール、システム診断は村山ゼミナールが担当した。

コンテンツについては、企業の情報内容が正しく取引相手や応募希望者に正しく伝えられるよう作成されているか、を、企業研究シートに記入して、診断シート作成により診断・評価する。

診断・評価は、公正に行うため、6名のゼミ学生がそれぞれ企業研究シートと診断シートを作成し、総括して、アウトプットを集約した。

調査の枠組み

- ・調査対象企業・・・NAZE会員企業の株式会社大原鉄工所と株式会社小西鍍金の2社とした。
- ・調査項目・方法・・・両社のホームページや公表資料を見て、以下の項目について、企業研究シート、診断シートを作成、評価した。

- ① 会社概要等—会社名、代表者名、売上高、資本金、利益
- ② 沿革・理念・戦略等—沿革、理念、戦略、目標
- ③ 事業概要—主な事業・商品、主な顧客、主な提供方法
- ④ 仕事環境人事制度、仕事概要、仕事紹介、社風
- ⑤ 採用情報—募集職種、勤務条件、応募方法、求める人材像

調査の概要

- ・2つのゼミで、対象企業のホームページを分担して調査し、診断項目に現状を書き込む。
- ・参加学生メンバーが各項目ごとに、評価点をつけて、合計と平均を算出する。
- ・現状評価と診断評価点を見比べて、どこを改善すべきか整理する。
- ・改善点等を調査企業の社長に報告する。
- ・会社側の改善点党への回答および改善結果を把握する。
- ・調査結果は、NAZE会員にも情報提供を行う（総会で発表）。





平成 22年度 活動報告

企業の情報発信とホームページの役割
— システム診断 —

ゼミ教員
村山 光博 准教授

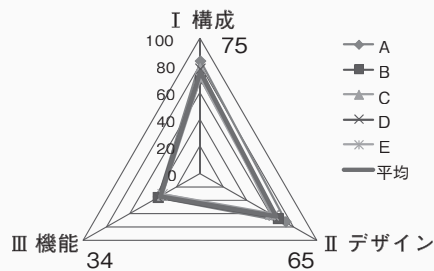
ゼミ学生名
3年生：池田 敬一朗 菊池 拓也 高野 里奈 竹田 隼人 笛木 香央里 山田 亮

取組みの目的

- 企業の情報発信の一つの手段としてのホームページの役割とあり方を検討する。
- 企業ホームページをシステム面から評価するための手法を構築する。
- 具体的には、企業ホームページシステム診断チェックシートを作成し、実際に適用を試みる中で、有効な評価項目を明らかにする。

システム診断

株式会社大原鉄工所ホームページのシステム診断結果



(注) 1 平成 22 年 6 月時点での評価
2 A～E は評価学生 5 名の点数



改善提案

I 構成

- トップページにエントリーフォームへのメニューを追加することで、エントリーフォームに容易に到達できるようにしてはどうか。

II デザイン

- フレーム機能を使わないページデザインの検討をしてはどうか。
- 動画へのバナーを画面上部に配置してはどうか。
- クリックの前後でハイパーリンクの文字色を変える設定にしてはどうか。

III 機能

- トップページ右上付近に文字サイズの「大」「中」「小」の切り替えボタンを配置してはどうか。
- エントリーフォームに個人情報保護に関する記述を加えたほうが良いのではないか。

研究の流れ

① 企業ホームページ調査

ホームページの特徴や工夫を調査・整理

② システム診断チェックシートの改善

チェックシートを見直し・改良を加えた

③ 企業ホームページのシステム診断

完成したシートを用いて、企業HPを診断

④ システム診断結果の分析

集計結果により、表およびグラフを作成

⑤ 改善提案

結果の分析、改善案の策定



株式会社小西鍍金 ヒアリング風景



成果発表会の様子

平成 22年度 活動報告

中山間地における
地域活性化の提案と実践



■ゼミ教員
田邊 正 専任講師

■ゼミ学生名
3年生：八木 雄大 東條 昌美 稲井 正人 渡辺 翔太 松原 唯介 渡部 耕士

取組みの目的

現在、中山間地では若者が町及び村から出ていき、農業就業者の高齢化が進んでいる。この傾向は止むことがないことが予測されている。そこで、学生が中山間地に足を運んで調査し、そこから打開策としてプロジェクトを提案していきたい。そして、これらが実践に移れば、中山間地の地域活性化に貢献することであろう。

研究の意義

当然、中山間地でも様々な打開策を提案している。しかし、大人による発想と異なる視点から、学生は斬新な提案をするのではないかと考えている。そこで、学生の視点からプロジェクトを提案し、これらのプロジェクトを実践に移してみたい。

取組みの内容

第1グループ 担い手育成プロジェクト
・ ニート及びフリーター等の若年層無職者の現状を調査研究
・ 農業就業者の現状を調査研究
・ プロジェクトを構築

第2グループ 七つの恵み・農作祭りプロジェクト
・ 中山間地の現状を調査研究
・ (財)山の暮らし再生機構主催のインターンシップに参加
・ 「新庄 100円商店街」について調査研究
・ 野菜等の生産物の流通について調査研究
・ プロジェクトを構築

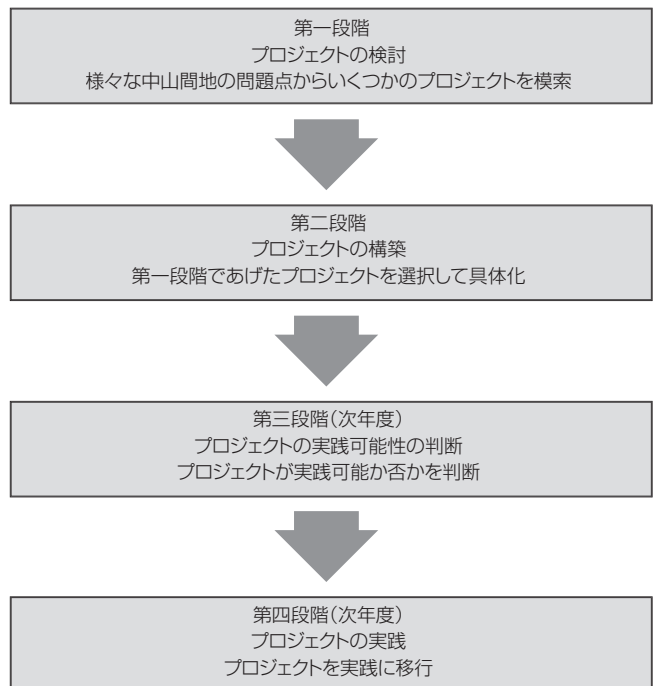


学生のアイデアによる
販売戦略モデル

第1グループ 担い手育成プロジェクト
担い手育成プロジェクトは、ニート及びフリーター等の若年層無職者を農業就業者として育成しようというプロジェクトである。中山間地では、後継ぎである担い手が不足している。その担い手として、若年層無職者の力を借りたいというのである。

第2グループ 七つの恵み・農作祭りプロジェクト
七日町のインターンシップに参加したところ、七日町には素晴らしい自然と美味しい農作物が豊富にあることを知った。そして、その農作物のなかには市場に出回らないものも大量に存在する。そこで、この余っている農作物を学生の力によって、長岡市内で販売しようというプロジェクトである。このプロジェクトによって、中山間地の魅力を長岡市民に知ってもらうことができるであろう。

研究の流れ目的



(財)山の暮らし再生機構主催のインターンシップに参加しました。



七日町には、自然と農作物が豊富にあります。

平成22年度 学生による地域活性化プログラム中間発表会

11月20日（土）に本学にて、平成22年度学生による地域活性化プログラムの中間発表会が開催されました。各ゼミナールの報告後、学外の地域連携アドバイザー方々から質問や有益な助言を頂きました。

これを受けて、各ゼミとも来年2月の成果発表会に向けて取りまとめを行います。

なお、今年度の成果発表会はホテルニューオータニ長岡NCホールで、平成23年2月12日（土）に開催されます。

<菊池 いづみゼミ>

長岡地域の在宅介護の現状と課題



<鯉江 康正ゼミ>

楽しもう！越後長岡「まちの駅」



<鯉江 康正ゼミ>

「出会いの街・ながおか」大手通活性化プロジェクト



<高橋 治道ゼミ>

地域コミュニティ活性化による豊かで安全・安心な暮らしを考える



<田邊 正ゼミ>

中山間地における地域活性化の提案と実践



<田邊 正ゼミ>

長岡市における特産品の東京市場販売計画



<原田 誠司ゼミ>

企業の情報発信とホームページの役割（コンテンツ診断）



<村山 光博ゼミ>

企業の情報発信とホームページの役割（システム診断）



<原田 誠司ゼミ>

環境・リサイクル問題と取組み



<広田 秀樹ゼミ>

グラスルートグローバリゼーション



<山川 智子ゼミ>

長岡周辺地域における健康管理と予防医療の現状



<吉盛 一郎ゼミ>

佐潟・福島潟・鳥屋野潟の地域との関わりと湿地の賢明な利用について



 **長岡大学**

学生による地域活性化プログラム 平成22年度 成果発表会



9ゼミ12取組の
学生による成果発表

日時 平成23年 **2月12日 (土)** 13:00~17:30 (12:30受付開始)

会場 ホテルニューオータニ長岡「NCホール」

定員 **250名** 申込締切/2月9日(水)

入場無料

※申込順に受け付け。定員になり次第締め切ります。

お申し込み・お問合せ

長岡大学 地域活性化プログラム担当：山田 〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8
TEL.0258-39-1600 FAX.0258-39-9566
<http://www.nagaokauniv.ac.jp> E-mail:yamada@nagaokauniv.ac.jp

■主催/長岡大学

■後援/長岡市・長岡市教育委員会・長岡商工会議所・(財)にいがた産業創造機構



- ① 菊池いづみゼミ…『長岡地域の在宅介護の現状と課題』
- ② 田邊 正 ゼミ…『長岡市における特産品の東京市場販売計画』
- ③ 高橋 治道ゼミ…『地域コミュニティ活性化による豊かで安全・安心な暮らしを考える』
- ④ 広田 秀樹ゼミ…『グラスルーツグローバリゼーション』
- ⑤ 山川 智子ゼミ…『長岡周辺地域における健康管理と予防医療の現状』
- ⑥ 原田 誠司ゼミ…『環境・リサイクル問題と取り組み』
- ⑦ 鯉江 康正ゼミ…『楽しもう!越後長岡「まちの駅」』
～休憩～
- ⑧ 吉盛 一郎ゼミ…『佐潟・福島潟・鳥屋野潟の地域との関わりと湿地の賢明な利用について』
- ⑨ 鯉江 康正ゼミ…『「出会いの街・ながおか」大手通活性化プロジェクト』
- ⑩ 原田 誠司ゼミ…『企業の情報発信とホームページの役割(コンテンツ診断)』
- ⑪ 村山 光博ゼミ…『企業の情報発信とホームページの役割(システム診断)』
- ⑫ 田邊 正 ゼミ…『中山間地における地域活性化の提案と実践』
- ⑬ 鯉江 康正ゼミ…『教育しない者(鯉江)のゼミナール学生の成長記録
—「まちの駅」との連携による活動記録—』(経済産業省主催 社会人基礎力育成グランプリ2011出場)

〈総 評〉(株)ホクギン経済研究所 副所長 河田 博氏
長岡市市長政策室政策企画課 課 長 成田 高史氏

平成23年 2月12日(土) 13:00~17:30(12:30受付開始)

ホテルニューオータニ長岡「NCホール」

※ホテル及び周辺駐車場は有料駐車場のみです。公共交通機関をご利用下さい。

申込締切/2月9日(水)

お申込み

FAX・E-mail・電話・ホームページでお申込み下さい。先着順の受け付けとなります。

TEL.0258-39-1600 FAX.0258-39-9566

http://www.nagaokauniv.ac.jp

E-mail:yamada@nagaokauniv.ac.jp

※Eメールでご連絡を下さった方には必ず当方より連絡を差し上げます。

連絡がない場合はお手数ですが、再度お申込み下さい。

※FAXの場合は、切り取らずに送信してください。

ご登録いただいた個人情報は、本学規定に従って厳正に管理します。

お問合せ

長岡大学 地域活性化プログラム(担当:山田)

〒940-0828 新潟県長岡市御山町80-8



氏 名		所 属	
連 絡 先	〒		
電 話 番 号		F A X	
E-mail			

学生による地域活性化プログラム
平成 22 年度 成果発表会

平成 23 年 2 月 12 日（土）、ホテルニューオータニ長岡 NC ホールにおいて、長岡大学生による地域活性化プログラム平成 22 年度成果発表会を実施いたしました。

参加者は 230 名（地域連携アドバイザー 16 名、一般 90 名、本学教職員 33 名、学生 91 名）でした。

会場が学外ということもあり、11 月に学内で実施した中間発表会の時以上に学生は緊張していたようです。各ゼミとも中間発表会で指摘された改善点や意見を取り入れ、長岡地域の活性化をテーマに、9 ゼミ 12 取組が成果発表を行いました。地域連携アドバイザーから、反省点、実施できなかったこと、次年度に向けての方向性など、たくさんの質問や貴重なアドバイスをいただきました。このような活動を通じて学生の社会人基礎力は大幅に向上したと思われます。

また、地域連携アドバイザーからは、学生の活動には協力を惜しまず、取り入れられるものは実現したいとお言葉をいただきました。次年度も引き続き学生による地域活性化取組を計画しており、学生が地域人として活躍できるものと期待しております。



学生による地域活性化プログラム平成22年度 成果発表会



- ①菊池いづみゼミ：長岡地域の在宅介護の現状と課題—家族介護者の負担を軽減するために—
- ②田邊 正 ゼミ：長岡市における特産品の東京市場販売計画
- ③高橋 治道ゼミ：地域コミュニティ活性化による豊かで安全・安心な暮らしを考える
- ④広田 秀樹ゼミ：グラスルーツグローバルイゼーション（草の根・地域からの地球一体化推進）
- ⑤山川 智子ゼミ：長岡周辺地域における健康管理と予防医療の現状
- ⑥原田 誠司ゼミ：環境・リサイクル問題への取り組み
- ⑦鯉江 康正ゼミ：楽しもう！越後長岡「まちの駅」



- ⑧吉盛 一郎ゼミ：佐潟・福島潟・鳥屋野潟の地域との関わりと湿地の賢明な利用について
- ⑨鯉江 康正ゼミ：「出会いの街・ながおか」大手通活性化プロジェクト
- ⑩原田 誠司ゼミ：企業の情報発信とホームページの役割（コンテンツ診断）
- ⑪村山 光博ゼミ：企業の情報発信とホームページの役割（システム診断）
- ⑫田邊 正ゼミ：中山間地における地域活性化の提案と実践
- ⑬鯉江 康正ゼミ：教育しない者（鯉江）のゼミナール学生の成長記録
—「まちの駅」との連携による活動記録—
（経済産業省主催 社会人基礎力育成グランプリ 2011 出場）

社会人基礎力育成グランプリ 2011 関東地区予選大会で健闘！

(経済産業省主催)

2010年11月29日(月):日経カンファレンスルーム(東京)

長岡大学は多数の応募の中から選ばれ、今年も社会人基礎力育成グランプリに出場しました。

今年度の出場ゼミは鯉江康正ゼミです。

鯉江 康正ゼミ

教育しない者(鯉江)のゼミナール学生の成長記録

—「まちの駅」との連携による活動記録—

発表者:環境経済学科4年 重野 友里、山田 祐介 3年 小嶋 さやか



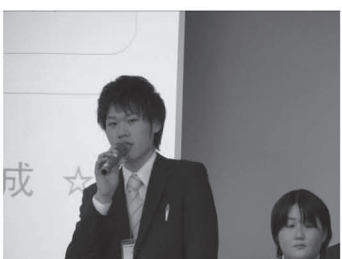
緊張するなあ・・・



ドキドキキキ・・・



始めました！



重野: 錚々たる大学と同じ舞台上に立てて良い経験になりました。大変でしたが、今までのゼミ活動を振り返り、自分の成長を感じることができました。

山田: 悔しかった!!この思いを後輩たちに託していきます。

小嶋: 同じ壁にぶつかり同じ悩みを持ち、それを克服してきた大学を見て、良い刺激になりました。来年は・・・

社会人基礎力診断シート（学生用）

本取組（地域活性化の取組）について、各質問の該当する番号に○をつけてください。

ア ク シ ョ ン	[主体性] あなたは、進んで取り組みましたか。 1. 進んで取り組んだ 2. あまり進んで取り組めなかった 3. 取り組めなかった
	[働きかけ力] あなたは、取組の実施にあたって他の人に働きかけましたか。 1. 積極的に働きかけた 2. あまり働きかけられなかった 3. ほとんど働きかけなかった
	[実行力] あなたは、取組を確実に実行できましたか 1. 確実に実行できた 2. あまり実行できなかった 3. ほとんど実行できなかった
	取組前と比較して、アクション力（主体性、働きかけ力、実行力）は、上昇したと思いますか。 1. 上昇した 2. あまり上昇しなかった 3. ほとんど変化がなかった
シ ン キ ン グ	[課題発見力] あなたは、課題を明らかにできましたか。 1. 明らかにできた 2. あまり明らかにできなかった 3. ほとんど明らかにできなかった
	[計画力] あなたは、課題解決の準備ができましたか 1. 準備できた 2. あまり準備できなかった 3. ほとんど準備できなかった
	[創造力] あなたは、新しいアイデアを出せましたか。 1. 十分出せた 2. あまり出せなかった 3. ほとんど出せなかった
	取組前と比較して、シンキング力（課題発見力、計画力、創造力）は、上昇したと思いますか。 1. 上昇した 2. あまり上昇しなかった 3. ほとんど変化がなかった
チ ー ム ワ ー ク	[発信力] あなたは、自分の意見を相手に伝えられましたか。 1. 十分伝えられた 2. あまり伝えられなかった 3. ほとんど伝えられなかった
	[傾聴力] あなたは、相手の意見を聞きましたか。 1. 十分聞いた 2. あまり聞けなかった 3. ほとんど聞けなかった
	[柔軟性] あなたは、意見の違いなどを理解しましたか。 1. 十分理解した 2. あまり理解しなかった 3. ほとんど理解しなかった
	[状況判断力] あなたは、周囲の人や物事との関係を良く理解しましたか。 1. 十分理解した 2. 一定に理解した 3. ほとんど理解しなかった
	[規律性] あなたは、ルールや約束を守りましたか。 1. 守った 2. あまり守れなかった
	[ストレスコントロール力] あなたは、ストレスをうまく解消できましたか。 1. うまく解消できた 2. あまり解消できなかった
	取組前と比較して、チームワーク力（発進力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）は、上昇したと思いますか。 1. 上昇した 2. あまり上昇しなかった 3. ほとんど変化がなかった

（資料）長岡大学「長岡地域若者キャリア育成事業報告書」（平成19年3月）をもとに作成

社会人基礎力診断シート（教員用）

本取組（地域活性化の取組）について、各質問の該当する番号に○をつけてください。

ア ク シ ョ ン	[主体性] この学生は、進んで取り組みましたか。 1. 進んで取り組んだ 2. あまり進んで取り組めなかった 3. 取り組めなかった
	[働きかけ力] この学生は、取組の実施にあたって他の人に働きかけましたか。 1. 積極的に働きかけた 2. あまり働きかけられなかった 3. ほとんど働きかけなかった
	[実行力] この学生は、取組を確実に実行できましたか 1. 確実に実行できた 2. あまり実行できなかった 3. ほとんど実行できなかった
	取組前と比較して、アクション力（主体性、働きかけ力、実行力）は、上昇したと思えますか。 1. 上昇した 2. あまり上昇しなかった 3. ほとんど変化がなかった
シ ン キ ン グ	[課題発見力] この学生は、課題を明らかにできましたか。 1. 明らかにできた 2. あまり明らかにできなかった 3. ほとんど明らかにできなかった
	[計画力] この学生は、課題解決の準備ができましたか 1. 準備できた 2. あまり準備できなかった 3. ほとんど準備できなかった
	[創造力] この学生は、新しいアイデアを出せましたか。 1. 十分出せた 2. あまり出せなかった 3. ほとんど出せなかった
	取組前と比較して、シンキング力（課題発見力、計画力、創造力）は、上昇したと思えますか。 1. 上昇した 2. あまり上昇しなかった 3. ほとんど変化がなかった
チ ー ム ワ ー ク	[発信力] この学生は、自分の意見を相手に伝えられましたか。 1. 十分伝えられた 2. あまり伝えられなかった 3. ほとんど伝えられなかった
	[傾聴力] この学生は、相手の意見を聞けましたか。 1. 十分聞けた 2. あまり聞けなかった 3. ほとんど聞けなかった
	[柔軟性] この学生は、意見の違いなどを理解しましたか。 1. 十分理解した 2. あまり理解しなかった 3. ほとんど理解しなかった
	[状況判断力] この学生は、周囲の人や物事との関係を良く理解しましたか。 1. 十分理解した 2. 一定に理解した 3. ほとんど理解しなかった
	[規律性] この学生は、ルールや約束を守りましたか。 1. 守った 2. あまり守れなかった
	[ストレスコントロール力] この学生は、ストレスをうまく解消できましたか。 1. うまく解消できた 2. あまり解消できなかった
	取組前と比較して、チームワーク力（発信力、傾聴力、柔軟性、状況把握力、規律性、ストレスコントロール力）は、上昇したと思えますか。 1. 上昇した 2. あまり上昇しなかった 3. ほとんど変化がなかった

（資料）長岡大学「長岡地域若者キャリア育成事業報告書」（平成19年3月）をもとに作成

平成22年度「地域活性化プログラム成果発表会」意見シート

本シートは、学生の「ビジネス展開能力」を判断するもので、各取組の優劣を判断するものではありません。したがって、忌憚のないご意見をお願いいたします。

各質問の該当する番号に○をつけてください。

<あなたの所属を教えてください>

- | | | | |
|---------------|----------|---------|----------|
| 1. 地域連携アドバイザー | 2. 一般参加者 | 3. 本学学生 | 4. 本学教職員 |
| 5. その他 () | | | |

〇〇ゼミ：タイトル

Q1 取組テーマ（タイトル）と内容は合致しておりましたか。

1. 合致していた 2. あまり合致していなかった 3. 合致していなかった

Q2 この取組に興味をもてましたか。

1. 興味がある 2. どちらかといえば、興味がない

Q3 学生の取組としてどのように評価できますか。感想をお聞かせください。

1. 非常に素晴らしい 2. 素晴らしい
3. やや物足りない 4. 大学生のレベルに達していない

Q4 発表の仕方はどう感じましたか。

1. 非常に優れていた 2. 優れていた 3. やや問題あり 4. 問題外

Q5 本取組に対するご意見をご自由にお書きください。

(注) 評価は取組ごとに行った